

# 大嘗祭非公式ガイドブック

第零版 alpha03

大嘗祭非公式ガイドブック・第零版 alpha03  
著者——大黒学

2018年 9月16日(日) 第零版 alpha03 発行

Copyright © 2017–2018 Daikoku Manabu

This tutorial is licensed under a Creative Commons Attribution 2.1 Japan License.

## 目次

|      |              |    |
|------|--------------|----|
| 第1章  | 神道           | 4  |
| 1.1  | 神道の基礎        | 4  |
| 1.2  | 神            | 4  |
| 1.3  | 祭祀           | 5  |
| 1.4  | 神社           | 8  |
| 1.5  | 神話           | 10 |
| 第2章  | 天皇           | 12 |
| 2.1  | 天皇とは何か       | 12 |
| 2.2  | 皇居           | 16 |
| 2.3  | 天皇制の歴史       | 18 |
| 2.4  | 天照大神と素戔鳴尊    | 21 |
| 2.5  | 天孫降臨         | 22 |
| 2.6  | 三種の神器        | 24 |
| 2.7  | 伊勢神宮         | 26 |
| 2.8  | 宮中祭祀         | 29 |
| 2.9  | 新嘗祭          | 31 |
| 2.10 | 鎮魂の儀         | 34 |
| 第3章  | 概要           | 35 |
| 3.1  | 皇位継承儀礼       | 36 |
| 3.2  | 大嘗祭とは何か      | 38 |
| 3.3  | 斎田           | 39 |
| 3.4  | 大嘗宮          | 40 |
| 3.5  | 大嘗宮の儀        | 42 |
| 3.6  | 大嘗宮の儀の祭神     | 44 |
| 第4章  | 歴史           | 45 |
| 4.1  | 成立           | 45 |
| 4.2  | 中断           | 47 |
| 4.3  | 登極令          | 49 |
| 4.4  | 御禊           | 51 |
| 4.5  | 標山           | 53 |
| 第5章  | 太一           | 54 |
| 5.1  | 陰陽五行思想       | 54 |
| 5.2  | 習合           | 56 |
| 5.3  | 皇大神宮における習合   | 57 |
| 5.4  | 大嘗祭における習合    | 59 |
| 第6章  | 天皇霊          | 60 |
| 6.1  | 「大嘗祭の本義」     | 61 |
| 6.2  | 天皇霊についての折口説  | 62 |
| 6.3  | 真床覆衾についての折口説 | 63 |
| 6.4  | 折口説に対する批判    | 64 |
| 参考文献 |              | 65 |
| 索引   |              | 71 |

## 第1章 神道

### 1.1 神道の基礎

#### Q 1.1.1 自然宗教って何ですか。

「自然宗教」というのは、自然発生的に成立した宗教のことです。

宗教は、自然発生的に成立したか、それとも特定の人物によって創唱されることによって成立したか、ということによって二種類に分類することができます。前者が「自然宗教」と呼ばれるのに対して、後者は「創唱宗教」と呼ばれます。

自然宗教に分類される宗教としては、ユダヤ教、ヒンドゥー教、道教などがあります。

創唱宗教に分類される宗教としては、仏教、キリスト教、イスラームなどがあります。

#### Q 1.1.2 民族宗教って何ですか。

「民族宗教」というのは、それを信仰している人々が特定の民族にほとんど限定されている宗教のことです。

自然宗教は、特定の民族による社会の中で成立して、それ以外の民族にはほとんど伝播しません。ですから、ユダヤ教やヒンドゥー教や道教などの自然宗教は、結果的に民族宗教でもありません。

#### Q 1.1.3 神道って何ですか。

「神道」というのは、古代の日本において自然発生的に成立して、日本人によって現代まで受け継がれてきた宗教のことです。

神道は、ユダヤ教やヒンドゥー教や道教と同じように、民族宗教に分類される宗教です。ただし、神道には創唱宗教に分類される宗派も含まれていますので、その全体を自然宗教に分類することはできません。創唱宗教に分類される神道の宗派の代表例は、Q 1.1.4 で紹介します。

#### Q 1.1.4 教派神道って何ですか。

「教派神道」というのは、創唱宗教であるような神道の宗派のことです。

教派神道に分類される神道の宗派としては、黒住宗忠くろずみむねただによって創唱された黒住教、川手文治郎かわてぶんじろう（赤沢文治あかざわぶんじ）によって創唱された金光教、中山みきなかやまみきによって創唱された天理教、出口なおでぐちなおによって創唱された大本おおもとなどがあります。

#### Q 1.1.5 神社神道って何ですか。

「神社神道」というのは、神道から教派神道を除外した、自然宗教であるような神道の宗派のことです。

#### Q 1.1.6 神道って、どういう宗教なんですか。

神道は、「神」と呼ばれる存在者に対する祭祀を重要視する宗教です。

神道における神については第 1.2 節で、神に対する祭祀については第 1.3 節で説明することにしたと思います。

神に対する祭祀は、主として「神社」と呼ばれる施設で執行されます。神社については、第 1.4 節で説明することにしたと思います。

## 1.2 神

### Q 1.2.1 神って何ですか。

「神」というのは、宗教において崇拜や祭祀や祈願などの対象となる超自然的な存在者のことです。

ただし、「神」と呼ばれる存在者が具体的にどのような属性を持つのかということは、それぞれの宗教ごとに異なっています。

Q 1.2.2 神道では、どういう存在者のことを「神」と呼ぶんですか。

神道においては、祭祀の対象となっている超自然的な存在者を「神」と呼びます。

日本人は古来より、さまざまな超自然的な存在者の存在を認めてきました。それらの存在者は、「祖霊」、「幽霊」、「怨霊<sup>あんりょう</sup>」、「鬼」、「憑物<sup>つきもの</sup>」など、それぞれの属性に応じたさまざまな言葉で呼ばれます。

日本人が存在を認めてきた超自然的な存在者は、「妖怪」と「神」という二種類のものに大きく分類することができます。それらの間の境界線はそれほど明確ではありませんが、祭祀の対象になっているか否かということ、それらを区別する指標にすることができます。民俗学者の小松和彦は、妖怪と神の区別について次のように述べています。

人々は「妖怪」を「神」に変換するために祭祀を行なう。また、人々の祭祀が不足すると、「神」は「妖怪」に変貌することになるのだ。「神」とは人々によって祀られた「超自然的存在」であり、「妖怪」とは人々に祀られていない「超自然的存在」なのである。別の言い方をすれば、祭祀された「妖怪」が「神」であり、祭祀されない「神」が「妖怪」ということになるのである。<sup>1</sup>

Q 1.2.3 神道で神とみなされてる存在者って、具体的にはどんなものがあるんですか。

神道において神として祭祀の対象にされている存在者は、きわめて多様に富んでいます。

有史以前の時代から、日本においては、大自然に存在するさまざまな事物、特に岩石や樹木などの中には、神が宿っていると考えられていました。日本の各地には、現在でも、その中に神が宿しているとみなされている岩石や樹木が存在していて、人々の崇拜の対象となっています。

また、大陸から文字が伝来する以前から、日本では、超人的な存在者が登場する神話が口承によって語り伝えられていました。そのような時代からのちは、その中に登場する人格を持った存在者たちもまた、神であると考えられるようになりました。たとえば、天照大神<sup>あまてらすおおみかみ</sup>、素戔嗚尊<sup>すさのおのみこと</sup>、大国主命<sup>おおくにぬしのみこと</sup>などは、そのような、神話に登場する神々です。

また、日本に仏教が伝来したのちは、仏教において「天」と呼ばれる存在者たちもまた、神として受け入れられました。たとえば、弁才天(サラスパティー)、金毘羅(クンビーラ)<sup>こんびら</sup>、歡喜天<sup>かんぎてん</sup>(ガネーシャ)などは、そのような、仏教とともに日本に伝来した神々です。

また、日本では古くから、怨みを抱いて死んだために災厄をもたらす怨霊を鎮めるために、あるいは、偉大な業績を残した人間の靈魂を顕彰するために、そのような人間の靈魂を神として祀るという習俗がありました。北野天満宮に祀られている菅原道真<sup>すがわらのみちざね</sup>や、和霊神社に祀られている山家公頼<sup>やんべきんより</sup>(通称は清兵衛<sup>せいべゑ</sup>)などは、怨霊として災厄をもたらした人間の靈魂で、豊国神社に祀られている豊臣秀吉や、東照宮に祀られている徳川家康などは、顕彰を目的として祀られている人間の靈魂です。

Q 1.2.4 神道の神って、一人、二人、三人、……と数えるんですか。

いいえ、神道の神は、一柱<sup>ひとはしら</sup>、二柱<sup>ふたはしら</sup>、三柱<sup>さんはしら</sup>、……と数えます。

日本語において、ものの数を数えるときに数字のうしろに付ける言葉は、「助数詞」と呼ばれます。たとえば、人間を数えるときは「人」、書籍を数えるときは「冊」、手紙や書類などを数えるときは「通」という助数詞が使われます。神道の神を数えるときに使われる助数詞は、「柱<sup>はしら</sup>」です。

## 1.3 祭祀

Q 1.3.1 祭祀って何ですか。

「祭祀」というのは、超自然的な存在者を対象とする、感謝、祈願、占い、賛美、慰め、供物の献上などを目的として執行される儀礼のことです。

神道における祭祀は、「まつり」(祀り、祭り)と呼ばれたり、「神事」と呼ばれたりすることもあります。また、神に対して祭祀を執行することを、神を「まつる」(祀る、祭る)ということもあります。

<sup>1</sup>[小松,2007], p. 193.

Q 1.4.7で、「社殿に祀られている神」という意味を持つ「祭神<sup>さいじん</sup>」という言葉を紹介しましたが、この言葉は、「祭祀の対象となっている神」という意味でも使われます。

Q 1.3.2 依代って何ですか。

「依代<sup>よりしろ</sup>」<sup>2</sup>というのは、神がそこに宿っているとみなされる物体のことです。

神道の祭祀においては、その対象となる神は何らかの物体に宿っていなければならないと考えられています。古代においては、岩や樹木を依代として、そこに神を招いて祭祀が執行されました。依代として使われた岩は「磐境<sup>いわきか</sup>」または「磐座<sup>いわくら</sup>」と呼ばれ、依代として使われた樹木は「神籬<sup>ひもろぎ</sup>」と呼ばれます。

人間という物体が依代として使われることもあります。依代として使われる人間は、「戸童<sup>よりまし</sup>」<sup>3</sup>と呼ばれます。

Q 1.3.3 神体って何ですか。

「神体<sup>しんたい</sup>」というのは、祭祀のときだけではなく、そこに恒久的に神が宿っているとみなされる依代のことです。

たとえば、古来よりそこに神が宿っていると信じられてきた山や島や岩や滝などの自然物は、「神体」と呼ばれます。

自然物のみではなく、鏡<sup>つるぎ</sup>、剣<sup>ほこ</sup>、鉾<sup>たま</sup>、玉などの人工物に神を招くことによって、それが神体とされることもあります。

神体は、「御神体<sup>ごしんたい</sup>」や「御霊代<sup>みたましろ</sup>」などと呼ばれることもあります。

Q 1.3.4 穢れって何ですか。

「穢れ<sup>けが</sup>」というのは、神道の神々が好まないもののことです。

神道においては、神は、死、病気、失火、出産、月経などを好まないと考えられていて、それらにかかわった人間は穢れを持っていると考えられています。

神道の神々は穢れを嫌いますので、神道の祭祀を執行する者は、それに先立って、穢れを落とす必要があります。

Q 1.3.5 禊って何ですか。

「禊<sup>みそぎ</sup>」というのは、神道の祭祀を執行する人間が、その祭祀に先立って、自身が持っている穢れを洗い流すために、水や湯で沐浴することです。

Q 1.3.6 祓って何ですか。

「祓<sup>はら</sup>」というのは、神道の祭祀の冒頭で執行される、参列者や土地などが持っている穢れを落とすための儀式のことです。「修祓<sup>しゆぼつ</sup>」と呼ばれることもあります。

祓によって穢れを落とすことを、穢れを「祓<sup>はら</sup>う」と言います。

祓を執行するために使われる道具は、「祓具<sup>はらえのく</sup>」と呼ばれます。通常、祓具としては、「大麻<sup>おおぬさ</sup>」と呼ばれるものと、「塩湯<sup>えんとう</sup>」と呼ばれるものが使われます。

「大麻<sup>おおぬさ</sup>」は、榊の枝または白木の棒に、楮<sup>こうぞ</sup>を原料とする「木綿<sup>ゆ</sup>」と呼ばれる布や、「垂<sup>しで</sup>」<sup>4</sup>と呼ばれる紙を取り付けたものです。これを、穢れを祓う対象に向かって左右に振ることによって、穢れを祓います。

「塩湯<sup>えんとう</sup>」は、塩をお湯で溶いたものです。榊の小枝を使ってこれの雫を飛ばすことによって、穢れを祓います。

<sup>2</sup> 「よりしろ」は、「憑代」と表記されることもある。

<sup>3</sup> 「よりまし」は、「憑坐」あるいは「依坐」と表記されることもある。

<sup>4</sup> 「しで」は、「神垂」あるいは「四手」と表記されることもある。

## Q 1.3.7 祝詞って何ですか

「祝詞」というのは、神道の祭祀において、神に対して奏上される言葉のことです。

祝詞の形式には、「宣下体」と呼ばれるものと「奏上体」と呼ばれるものの二種類があります。宣下体は、末尾が「宣る」で終わる形式で、奏上体は、末尾が「申す」または「白す」で終わる形式です。

祝詞を紙に記す場合には、「宣命書」と呼ばれる、助詞、助動詞、活用語尾を小さな万葉仮名で右に寄せて書く、という特殊な書き方が使われます。

## Q 1.3.8 玉串って何ですか。

「玉串」というのは、神の小枝に垂（Q 1.3.6 参照）を取り付けた祭具です。

玉串は、神道の祭祀において神に対する礼拝をするときに使われます。玉串を使って拝礼することは、「玉串拝礼」と呼ばれます。

## Q 1.3.9 拝って何ですか。

「拝」というのは、腰を90度に折り曲げるという所作のことです。

拝は、神道の祭祀において神に対して敬意を表明するための所作のうちで最も敬意が深いものです。拝と同様に腰を折り曲げるという所作で、折り曲げる角度が拝よりも小さいものは、「揖」と呼ばれます。折り曲げる角度が45度のものを「深揖」と言い、15度のものを「小揖」と言います。

拝は、連続して何回か繰り返されることもあります。一回だけ拝をすることを「一拝」、二回連続して拝をすることを「二拝」あるいは「再拝」と言います。

## Q 1.3.10 拍手って何ですか。

「拍手」（読み方は「かしわで」または「はくしゅ」）というのは、手のひらを打ち合わせて音を鳴らすという所作のことです。

拍手も、拝（Q 1.3.9 参照）と同様に、神に対する敬意を表明するための所作です。

拍手は、通常、何回か繰り返されます。二回連続して拍手を打つことを「二拍手」、四回連続して拍手を打つことを「四拍手」、八回連続して拍手を打つことを「八開手」<sup>5</sup>と言います。

また、八回連続して拍手を打つということを四回繰り返す、という所作もあり、この所作が「八開手」と呼ばれることもあります<sup>6</sup>。

## Q 1.3.11 幣帛って何ですか。

「幣帛」というのは、神道の祭祀において神に捧げられる供え物のことです。

幣帛としては、布帛（織物）、紙、玉、食物、酒類などが供えられます。幣帛として供えられる食物は神饌、酒類は神酒と呼ばれます。

## Q 1.3.12 案って何ですか。

「案」というのは、丁重な取り扱いを要する物品を置くために使われる机のことです。

案は、神道の祭祀において、幣帛、袂具、玉串などを置くために使われます。

## Q 1.3.13 直会って何ですか。

「直会」というのは、祭祀が終わったのちに、供えられていた神饌（Q 1.3.11 参照）を参列した人々が飲食するという行事のことです。

<sup>5</sup> 「やひらで」は、「八平手」と表記されることもある。

<sup>6</sup> [中澤,2010], p. 81、[所,2009], p. 69。

直会は、神と人間とが食事を共にすることによって、神と人間、人間と人間との関係を強化するという意味があると考えられています。

## 1.4 神社

### Q 1.4.1 神社って何ですか。

「神社」というのは、神道における神を祀っている施設、またはそのような施設を運営している組織のことです。

### Q 1.4.2 神社の数を数えるときって、どんな助数詞を使うんですか。

神社の数を数えるときに使われる助数詞は、「社」です。つまり、神社は、一社、二社、三社、……と数えるわけです。

### Q 1.4.3 社号って何ですか。

「社号」というのは、神社の名称のことです。

「社号」という言葉は、神社の名称の末尾にある、「神社」<sup>しゃ</sup>、「社」<sup>しゃ</sup>、「宮」<sup>ぐう</sup>、「神宮」<sup>じんぐう</sup>などの部分のみを指示するために使われることもあります。

### Q 1.4.4 境内って何ですか。

「境内」というのは、神社や寺院の領域のことです。境内の外側の領域は、「境外」と呼ばれます。

### Q 1.4.5 本社って何ですか。

「本社」というのは、一社の神社を構成されている二社以上の神社のうちで、最も中心となる神社のことです。

神社の中には、二社以上の神社が集まって一社の神社を構成しているものもあります。そのような集会的な神社においては、それを構成している神社のうちで最も中心的なものを「本社」と呼び、それ以外の神社を「摂末社」と呼びます。

摂末社は、「摂社」と「末社」に分類されます。摂社に分類されるのは、本社に祀られている神との間に縁故関係などの関係がある神が祀られている摂末社で、それ以外の摂末社は末社に分類されます。

### Q 1.4.6 社殿って何ですか。

「社殿」というのは、神道における神が祀られている建物のことです。「社」という言葉も、同じ意味で使われます。

社殿の数を数えるときに使われる助数詞は、神社の数を数えるときと同様、「社」です。

### Q 1.4.7 祭神って何ですか。

社殿に祀られている神は、その社殿の「祭神」と呼ばれます。そして、神社が持っている社殿の祭神は、その神社の祭神と呼ばれます。

Q 1.2.3 で説明したように、神道において神とみなされている存在者は、きわめて多様性に富んでいます。しかし、個々の神社が、それらのすべての神々を祀っているわけではありません。個々の神社に祀られているのは、何柱かの特定の神々です。「祭神」という言葉は、特定の神社と、その神社に祀られている神々との関係について語るときに使われるものです。たとえば、「出雲大社の祭神は大国主命である」とか、「巖島神社の祭神は市杵島姫命と田心姫命と湍津姫命である」という言い方をします。



## Q 1.4.8 本殿って何ですか。

「本殿<sup>ほんでん</sup>」というのは、社殿のうちで、その中に神が常に存在していると考えられている建物のことです。

一社の社殿を構成している建物は、一棟だけとは限りません。一社の社殿が複数の建物から構成されている場合、それらの建物の中で実際に神が存在していると考えられている建物は、「本殿」と呼ばれる一棟だけです。通常、神体（Q 1.3.3 参照）は本殿の内部に安置されます。

Q 1.3.2 で述べたように、古代における神道の祭祀は、岩や樹木を依代として、そこに神を招いて執行されました。ですから、古代においては、本殿と呼ぶことのできる恒久的な施設は造営されませんでした。神が常に存在している恒久的な施設が造営されるようになったのは、飛鳥時代後期（7世紀後半）のことではないかと考えられています<sup>7</sup>。

岩や山や島などの巨大な自然物を神体としている神社の中には、現在も本殿を持たないものがあります。たとえば、奈良県桜井市にある三輪山<sup>みわやま</sup>という山を神体としている大神神社<sup>おおみわ</sup>には、現在も本殿が存在しません。

## Q 1.4.9 拝殿って何ですか。

「拝殿<sup>はいでん</sup>」というのは、本殿の前に建てられた、参拝者が礼拝をするための建物のことです。

## Q 1.4.10 切妻造とか寄棟造とか入母屋造とって何のことですか。

「切妻造<sup>きりまづくり</sup>」、「寄棟造<sup>よせむねづくり</sup>」、「入母屋造<sup>いりもやづくり</sup>」というのは、屋根の形式のことです。

屋根を構成している傾斜した二面の平面が接している直線は、「棟<sup>むね</sup>」と呼ばれます。棟に対して平行な壁面は「平<sup>ひら</sup>」と呼ばれ、棟に対して垂直な壁面は「妻<sup>つま</sup>」と呼ばれます。

屋根を構成している傾斜した平面は、「流れ<sup>なが</sup>」と呼ばれます。屋根の形式は、妻の側に流れがあるかどうか、あるとすればその上端は棟に接しているかどうかということによって分類されます。

「切妻造<sup>きりまづくり</sup>」というのは、流れが平の側にしかなく、妻の側には流れがない屋根の形式のことです。「切妻造」と呼ばれるのは、屋根が妻側で垂直に切り落とされたように見えるからです。

「寄棟造<sup>よせむねづくり</sup>」というのは、平と妻の両側に流れがあって、妻側の流れの上端が棟に接している屋根の形式のことです。

「入母屋造<sup>いりもやづくり</sup>」というのは、平と妻の両側に流れがあって、妻側の流れの上端が棟よりも低い位置にある屋根の形式のことです。

神社の本殿が持つ屋根の形式は、切妻造または入母屋造です。寄棟造の神社の本殿というのは、まったく例がありません<sup>8</sup>。

## Q 1.4.11 平入とか妻入とって何のことですか。

「平入<sup>ひらいり</sup>」と「妻入<sup>つまいり</sup>」というのは、建物の入口の位置と屋根の方向との関係のことです。平に入口があるのが平入で、妻に入口があるのが妻入です（平と妻については Q 1.4.10 を参照）。

神社の本殿には、平入のものも妻入のものもあります。ただし、大多数は平入で、妻入の本殿は全体の一割未満です<sup>9</sup>。

## Q 1.4.12 千木って何ですか。

「千木<sup>ちぎ</sup>」というのは、社殿の屋根の両端に取り付けられる、Xの形に交差した2本の部材のことです。

社殿の多くには、その屋根の両端に千木が取り付けられています<sup>10</sup>。千木が取り付けられていない社殿もありますが、社殿ではない建築物に千木が取り付けられているということは、ほとんどありません。ですから、千木は、社殿に特有の部材だと考えることができます。

<sup>7</sup>[三浦正幸,2013], p. 171.

<sup>8</sup>[三浦正幸,2013], pp. 83-87.

<sup>9</sup>[三浦正幸,2013], pp. 27-28.

<sup>10</sup>取り付けられているのではなく、屋根の部材が延長されたものが千木になっている場合もある。

Q 1.4.13 内削とか外削とあって、何のことですか。

「内削」と「外削」というのは、千木(Q 1.4.12 参照)の先端の形状のことです。千木の先端の断面が水平になっている形状が内削で、垂直になっている形状が外削です。

内削の千木は祭神が女神の場合に使われ、外削の千木は祭神が男神の場合に使われると言われていることがありますが、これは俗説です。

Q 1.4.14 鯉木って何ですか。

「鯉木」<sup>11</sup>というの、社殿の屋根に取り付けられる、中央部が膨らんだ円筒形の部材のことです。

鯉木は、棟と直交する方向に置かれ、何本かが水平に並べられます。本数は2本以上で、偶数の場合も奇数の場合もあります。

千木の場合と同じように、鯉木も、社殿に特有の部材だと考えることができます。

Q 1.4.15 鳥居って何ですか。

「鳥居」というのは、神社に参拝する人がくぐることになる、複数の柱(ほとんどのものは二本)と、それらの間に渡された二本の部材から構成される門のことです。

鳥居を構成する柱の間に渡された二本の部材のうちで、柱の上部に乗せられたものは、「笠木」と呼ばれます。そして、それよりも低い位置で渡された部材は、「貫」と呼ばれます。

## 1.5 神話

Q 1.5.1 神話って何ですか。

「神話」というのは、古代の社会において自然発生的に形成された、超自然的な存在者が関与する、宇宙や人間や文化の起源についての物語のことです。

世界各地の民族の多くは、独自の神話を持っています。よく知られているものとしては、ギリシア神話や北欧神話などがあります。

日本人も、独自の神話を持っています。日本人が持っている神話は、「記紀」と呼ばれる歴史書や、「風土記」と呼ばれる地誌に記載されています。

Q 1.5.2 記紀って何ですか。

「記紀」というのは、『古事記』と『日本書紀』という二篇の歴史書をひとまとめにして呼ぶときに使う名前です。

『古事記』と『日本書紀』は、ともに、天武天皇(大海人)が681年に編纂を命じた歴史書です(天武天皇については、Q 4.1.2 で詳述します)。

『古事記』の序文には、このときの天武天皇の言葉が次のように引用されています。

そこで天皇が仰せられるには、「私の聞くところによれば、諸家に伝わっている帝紀及び本辞には、真実と違い、あるいは虚偽を加えたものがはなはだ多いとのことである。そうだとすると、ただいまこの時に、その誤りを改めておかないと、今後幾年もたたないうちに、その正しい趣旨は失われてしまうにちがいない。そもそも帝紀と本辞は、国家組織の原理を示すものであり、天皇政治の基本となるものである。それ故、正しい帝紀を撰んで記し、旧辞をよく検討して、偽りを削除し、正しいものを定めて、後世に伝えようと思う」と仰せられた。<sup>12</sup>

この言葉の中で言及されている「帝紀」というのは、『帝紀』という書名で呼ばれる歴史書のことです。「本辞」または「旧辞」というのは、『旧辞』という書名で呼ばれる歴史書のことです。これらの歴史書は、天武天皇の時代までに成立していたと考えられますが、現在は伝わっていま

<sup>11</sup> 「かつおぎ」は、「堅男木」、「勝男木」、「賢魚木」などと表記されることもある。

<sup>12</sup> [次田,1977], p. 25。

せん。『古事記』と『日本書紀』は、これらの歴史書を資料として使うことによって編纂されたと考えられています。

天武天皇は、<sup>ひえだのあれ</sup>禰田阿礼という<sup>とねり</sup>舎人（天皇や皇族の側に仕える者）に『帝紀』と『旧辞』を暗誦させましたが、新たな歴史書は天武天皇の存命中には完成しませんでした。それが完成するのは、<sup>げんめい</sup>元明天皇（<sup>あへ</sup>阿閉）の時代のことです。

Q 1.5.3 『古事記』って、どういう歴史書なんですか。

『<sup>こじき</sup>古事記』は、712年（和銅5年）に完成した日本の歴史書で、現存する日本の歴史書としては最古のものです。

711年（和銅4年）、<sup>げんめい</sup>元明天皇（<sup>あへ</sup>阿閉）は、<sup>ひえだのあれ</sup>禰田阿礼（Q 1.5.2 参照）が暗誦していた『帝紀』と『旧辞』を筆録せよと、<sup>おおのやすまろ</sup>太安万侶という学者に命じました。その結果として完成したのが『古事記』です。

『古事記』は3巻から構成されていて、それぞれの巻は、「上巻」、「中巻」、「下巻」と呼ばれます。

Q 1.5.4 『日本書紀』って、どういう歴史書なんですか。

『<sup>にほんしょき</sup>日本書紀』は、<sup>とねりしんのう</sup>舎人親王を中心とする宮廷史家によって編纂され、720年（養老4年）に完成した日本の歴史書です。

『日本書紀』は30巻から構成されていて、それぞれの巻は、「巻第一」、「巻第二」、「巻第三」、……と呼ばれます。

『日本書紀』の巻第三以降は、どの天皇の時代について書かれたものかということによって区分されて、それぞれの部分は、天皇の名前から「〇〇紀」と呼ばれます。たとえば、<sup>にんとく</sup>仁徳天皇（<sup>おおさざき</sup>大鷦鷯）の時代について書かれた部分は、「仁徳紀」と呼ばれます。

Q 1.5.5 風土記って何ですか。

『<sup>ふどき</sup>風土記』というのは、713年（和銅6年）に<sup>げんめい</sup>元明天皇（<sup>あへ</sup>阿閉）が出した命令によって諸国が編纂した、地名の由来、地形、産物、伝説を記した地誌のことです。

風土記のうちで、現存しているものは、<sup>はりま</sup>播磨（兵庫県）、<sup>ひたち</sup>常陸（茨城県）、<sup>いづち</sup>出雲（島根県）、<sup>ぶんご</sup>豊後（大分県）、<sup>ひぜん</sup>肥前（熊本県）のもののみです。これらの現存する風土記のうちで、完全に残っているものは『<sup>いずものくに</sup>出雲国風土記』のみで、これ以外のものは一部分しか残っていません。

Q 1.5.6 記紀神話って何ですか。

「<sup>きき</sup>記紀神話」というのは、記紀の冒頭に記されている神話のことです。

Q 1.5.2 で述べたように、『古事記』と『日本書紀』は、ともに歴史書です。しかし、それぞれの冒頭に記されているのは、歴史ではなく神話です。

『古事記』は、上巻のすべてが神話です。同じように、『日本書紀』は、巻第一と巻第二に神話が記されていて、それぞれの巻は、「<sup>かみよじょう</sup>神代上」、「<sup>げ</sup>神代下」と呼ばれます。

Q 1.5.7 一書って何ですか。

『<sup>あるらみ</sup>一書』というのは、『日本書紀』の巻第一と巻第二に収録されている、本文とは異なる伝承のことです。

『日本書紀』の巻第一と巻第二の本文は、「<sup>だん</sup>段」と呼ばれる11の部分から構成されていて、それが並んでいる順番に応じて、「第一段」、「第二段」、……と呼ばれます。そして、それぞれの段の末尾には、「<sup>あるらみ</sup>一書」と呼ばれる、本文とは異なるいくつかの伝承が収録されています。それらの一書は、それが並んでいる順番に応じて、「第一の一書」、「第二の一書」、……と呼ばれます。

## Q 1.5.8 記紀神話って、どんな世界が舞台になってるんですか。

記紀神話は、三つの世界が舞台となっています。すなわち、高天原<sup>たかまがはら</sup><sup>13</sup>、根の国<sup>ねのくに</sup>、そして葦原の中つ国<sup>あしはらのなかつくに</sup>です。

高天原は、天上にあると考えられている世界です。この世界に住んでいる神、あるいはこの世界から降臨した神は、「天つ神<sup>あまつかみ</sup>」または「天神<sup>てんじん</sup>」と呼ばれます。

根の国は、地下にあると考えられている、死者が住んでいる世界です。「根の壑洲国<sup>ねのかたすくに</sup>」、「黄泉の国<sup>よみ</sup>」などと呼ばれることもあります。

葦原の中つ国は、高天原と根の国との中間、すなわち地上にあると考えられている、神々と人間たちが住んでいる世界です。「大八洲国<sup>おおよしまくに</sup>」と呼ばれることもあります。この世界に住んでいる神は、「国つ神<sup>くにつかみ</sup>」または「地祇<sup>ちぎ</sup>」と呼ばれます。

## Q 1.5.9 天神地祇って何ですか。

「天神地祇<sup>てんじんちぎ</sup>」というのは、基本的には、天神たちと地祇たちを合わせた神々のことですが、この言葉は多くの場合、「すべての神々」という意味で使われます。

ただし、「天神地祇」に含まれているのは貴族や豪族などの支配階層の人々が祀っている神々のみであって、農民などの被支配階層の人々が祀っている神々は含まれていない、という見解<sup>14</sup>もあります。

「すべての神々」を意味する言葉としては、「八百万の神<sup>ややおよそ</sup>」という言葉も、よく使われます。

## Q 1.5.10 天地開闢って何ですか。

「天地開闢<sup>てんちかいびやく</sup>」というのは、混沌とした状態だった宇宙が天と地に分かれることです。

『古事記』は、その序文の冒頭で天地開闢に言及しています。また、『日本書紀』も、その冒頭で天地開闢に言及しています。

## Q 1.5.11 造化の三神って、どういう神なんですか。

「造化の三神<sup>そうかさんしん</sup>」というのは、天地開闢のときに高天原に出現した三柱の神々のことです。

造化の三神は、『古事記』では、天之御中主神<sup>あめのみなかぬしのかみ</sup>、高御産巢日神<sup>たかみむすひのかみ</sup>、神産巢日神<sup>かむむすひのかみ</sup>と呼ばれています。

## Q 1.5.12 伊弉諾尊と伊弉冉尊って、どういう神なんですか。

伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>と伊弉冉尊<sup>いざなみのみこと</sup>は、ともに記紀神話に登場する神で、葦原の中つ国(Q 1.5.8 参照)を創造した神です。

伊弉諾尊は男神、伊弉冉尊は女神です。この二柱の神は夫婦となって、互いに協力することによって、葦原の中つ国を構成する島々や、多くの神々を生みました。

## 第2章 天皇

## 2.1 天皇とは何か

## Q 2.1.1 天皇って何ですか。

「天皇<sup>てんのう</sup>」というのは、日本という国の象徴、およびその国民の統合の象徴、という地位のこと、またはその地位にいる人物のことです。

「天皇」という日本語の単語には、多くの同義語があります。たとえば、「みかど」(表記は「帝」または「御門」)、「おおきみ」(表記は「大君」または「大王」)、「すめらみこと」(表記は「皇尊」または「天皇」)、「すめろぎ」(表記は「天皇」)などです。

<sup>13</sup>「高天原」の読み方には、「たかまがはら」と「たかまのはら」の二通りがある。

<sup>14</sup>[田村,2009], pp. 261–262.

英語では、天皇を意味する単語として、皇帝を意味する emperor が使われます。また、日本語の「みかど」に由来する mikado という単語が使われることもあります。

### Q 2.1.2 皇位って何ですか。

「皇位<sup>こうい</sup>」というのは、天皇という地位のことです。

次の天皇が前の天皇から皇位を受け継ぐことを、「皇位を継承する」と言います。「皇位継承」は、皇位を継承すること、という意味を持つ名詞です。

皇位は、世襲される地位です。天皇の血統は、「皇統<sup>こうとう</sup>」と呼ばれます。天皇を中心として配偶関係または血縁関係で結ばれた一族は、「皇室<sup>こうしつ</sup>」または「天皇家<sup>てんげ</sup>」と呼ばれます。

### Q 2.1.3 即位するとか退位するとかって、どういうことですか。

「即位<sup>そくい</sup>する」というのは、何らかの人物が王や皇帝などの地位に就くことで、「退位<sup>たいい</sup>する」というのは、王や皇帝がその地位から退くことです。

天皇というのは王や皇帝と同列の地位ですので、何らかの人物が皇位に就くことを、その人物が天皇に「即位する」と言い、天皇が皇位から退くことを、天皇が「退位する」と言います。

### Q 2.1.4 崩御するって、どういうことですか。

「崩御<sup>ほうぎょ</sup>する」というのは、天皇またはそれに準ずる者が死去することです。「崩<sup>ほう</sup>ずる」、「神上<sup>かむあ</sup>がる」などと言うこともあります。

### Q 2.1.5 天皇制って何ですか。

「天皇制」というのは、天皇をめぐる国家の制度のことです。

天皇制は、日本の歴史を通じて、幾多の変遷を経て現在に至っています。この点については、第 2.3 節で、もう少し詳しく説明したいと思います。

### Q 2.1.6 皇族って何ですか。

「皇族<sup>こうぞく</sup>」というのは、天皇の親族のことです。ただし、天皇自身は皇族ではありません。現行の制度では、皇族に含まれるのは次のような人々です。

|                          |                            |
|--------------------------|----------------------------|
| 皇后 <sup>こうごう</sup>       | 天皇の妻。                      |
| 親王 <sup>しんのう</sup>       | 天皇の息子、および男系の男性の孫。          |
| 内親王 <sup>ないしんのう</sup>    | 天皇の娘、および男系の女性の孫。           |
| 親王妃 <sup>しんのうひ</sup>     | 親王の妻。                      |
| 王 <sup>おう</sup>          | 3 世以下の天皇の子孫のうちで、男系の男性である者。 |
| 女王 <sup>じょおう</sup>       | 3 世以下の天皇の子孫のうちで、男系の女性である者。 |
| 皇太后 <sup>こうたいごう</sup>    | 崩御した先代の天皇の妻。               |
| 太皇太后 <sup>たいこうたいごう</sup> | 崩御した先々代の天皇の妻。              |
| 上皇 <sup>じょうこう</sup>      | 退位した先代の天皇。                 |
| 上皇后 <sup>じょうこうごう</sup>   | 退位した先代の天皇の妻。               |

### Q 2.1.7 現行の天皇制は、どんな法律で定められてるんですか。

現行の天皇制は、主として、日本国憲法と皇室典範<sup>てんぱん</sup>という法律によって定められています。

それら以外の法律で天皇制に関連するものとしては、宮内庁<sup>くわい</sup>という行政機関（Q 2.1.13 参照）について定めた宮内庁法、皇室の運営に必要となる予算について定めた皇室経済法、元号（Q

2.1.14 参照)について定めた元号法などがあります。

Q 2.1.8 日本国憲法って何ですか。

日本国憲法は、1946年(昭和21年)11月3日に公布され、1947年(昭和22年)5月3日に施行された、日本の現行の憲法です。

Q 2.1.9 日本国憲法は、天皇制についてどんなことを定めてるんですか。

日本国憲法が天皇制について定めていることは、天皇という地位や、天皇が執行する国事に関する行為などの事項です。

日本国憲法は、その第1章(第1条から第8条まで)が、天皇について定めている部分です。日本国憲法の第1条は、天皇の地位について次のように定めています。

天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。

第2条は、「皇位は、世襲のものであつて、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを継承する」と定めています。

第3条は、「天皇の国事に関するすべての行為には、内閣の助言と承認を必要とし、内閣が、その責任を負ふ」と定めています。天皇が執行する国事に関する行為は、「国事行為」と呼ばれます。

第4条は、「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行ひ、国政に関する権能を有しない」と定めています。

天皇が執行する国事行為については、日本国憲法の第7条で、その内容が次のように列挙されています。

- 一 憲法改正、法律、政令及び条約を公布すること。
- 二 国会を召集すること。
- 三 衆議院を解散すること。
- 四 国会議員の総選挙の施行を公示すること。
- 五 国務大臣及び法律の定めるその他の官吏の任免並びに全権委任状及び大使及び公使の信任状を認証すること。
- 六 大赦、特赦、減刑、刑の執行の免除及び復権を認証すること。
- 七 栄典を授与すること。
- 八 批准書及び法律の定めるその他の外交文書を認証すること。
- 九 外国の大使及び公使を接受すること。
- 十 儀式を行ふこと。

Q 2.1.10 皇室典範って何ですか。

皇室典範<sup>てんぱん</sup>は、1947年(昭和22年)に制定された、皇室に関連する事項について定めた法律です。

「皇室典範」と呼ばれる法律は、現行のものほかに、1889年(明治22年)に制定されて1947年(昭和22年)に廃止されたものがあります。本書では、この法律を「旧皇室典範」と呼ぶことにします。

Q 2.1.11 皇室典範は、天皇制についてどんなことを定めてるんですか。

皇室典範が天皇制について定めていることは、皇位継承、皇族の範囲、皇族からの離脱などの事項です。

皇室典範の第1条は、皇位継承について次のように定めています。

皇位は、皇統に属する男系の男子が、これを継承する。

第2条は、皇位を継承する皇族の順位について、次のように定めています。

- 一 皇長子
- 二 皇長孫

- 三 その他の皇長子の子孫
- 四 皇次子及びその子孫
- 五 その他の皇子孫
- 六 皇兄弟及びその子孫
- 七 皇伯叔父及びその子孫

皇位継承順位の第1位にある者は、「皇嗣」と呼ばれます。皇室典範の第4条は、「天皇が崩じたときは、皇嗣が、直ちに即位する」と定めています。

天皇の男の子供は、「皇子」と呼ばれます。皇室典範の第8条は、「皇太子」という言葉を、「皇嗣たる皇子を皇太子」と定義しています。

皇室典範の第16条から第18条までは、「摂政」と呼ばれる者について定めています。「摂政」というのは、天皇の代理としてその職務を遂行する者のことです。皇室典範の第16条は、摂政が置かれるのは、「天皇が成年に達しないとき」または「天皇が、精神若しくは身体の重患又は重大な事故により、国事に関する行為をみずからすることができないとき」と定めています。

#### Q 2.1.12 象徴天皇制って何ですか。

「象徴天皇制」というのは、天皇は何かの象徴であって、国政には関与することができないと定められた天皇制のことです。

Q 2.1.9 で述べたように、日本国憲法の第1条は、天皇は日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であると定めていて、さらに第4条は、天皇は国政に関する権能を有しないと定めています。日本国憲法は日本の現行の憲法ですから、現行の天皇制は象徴天皇制であるということになります。

#### Q 2.1.13 宮内庁って何ですか。

宮内庁は、皇室関係の事務、天皇の国事行為に関する事務、御璽（天皇の印）と国璽（国の印）の保管を掌る、日本の中央省庁の一つです。

宮内庁は、1869年（明治2年）に設置された宮内省の後身です。宮内省は、1947年（昭和22年）5月3日に宮内府に改称し、1949年（昭和24年）6月1日に総理府（現在の内閣府）の外局となり、宮内庁に改称しました。

#### Q 2.1.14 元号って何ですか。

「元号」というのは、日本で使われている暦法における不定長の期間（短いものは1年未満、長いものは数十年）に与えられた名称のことです。「年号」と呼ばれることもあります。

日本で使われている暦法は、「和暦」と呼ばれます。

現在とは異なる別の元号を与えられた新しい期間を開始することを、「改元」と言います。和暦における年は、元号と、改元の年から数えた年数とを組み合わせ、「何年」と呼ばれます。改元があった年の年数は「元年」と呼ばれ、その翌年が2年となります。たとえば、「昭和」という期間は、1989年1月7日で終わり、その翌日から「平成」という期間が始まりました。ですから、1989年1月8日から12月31日までは「平成元年」と呼ばれ、1990年は「平成2年」と呼ばれます。

改元は、基本的には皇位継承のあった年に行われるのですが、災害などの別の理由で改元されることもありました。しかし、1868年（明治元年）9月8日に「慶応」から「明治」に改元されたとき、それと同時に定められた「一世一元の制」と呼ばれる制度によって、改元は皇位継承のときだけに限定されることになりました。現行の元号法も、この制度を踏襲しています。

#### Q 2.1.15 諱って何ですか。

「諱」というのは、身分の高い人の実名のことです。

歴代のすべての天皇は、「諱」と呼ばれる実名を持っています。たとえば、仁徳天皇の諱は大鷦鷯、天智天皇の諱は天命、開別、安徳天皇の諱は言仁、明治天皇の諱は睦仁です。

「諱」は、「忌み名」に由来する言葉です。日本においては、身分の高い人については、その実名を呼ぶことは避けるべきであると考えられてきました。この傾向は、天皇については現在も廃れていません。

#### Q 2.1.16 諱って何ですか。

「諱」（贈り名）というのは、亡くなった人に対して、その人の生前の徳を称えて贈られる名前のことです。「諱号」と呼ばれることもあります。

天皇に対しては、崩御したのちに必ず諱が贈られます。仁徳天皇、天智天皇、安徳天皇、明治天皇というような、歴史上の天皇を呼ぶときに使われる名前は、諱ではなく諱です。

明治天皇以降の崩御した天皇に対しては、在位期間の元号が諱として贈られています。

元号が日本の文化に定着するよりも以前の時代に言及する歴史書においては、年の呼び名として、その時代の天皇の諱と、その天皇が即位した年から数えた年数とを組み合わせたものが使われることがあります。たとえば、継体天皇（男大迹）が即位したとされる西暦 507 年は、「継体天皇元年」と呼ばれることがあり、その翌年の西暦 508 年は、「継体天皇 2 年」と呼ばれることがあります。

#### Q 2.1.17 天皇家の姓って何ですか。

天皇家に姓はありません。

日本人が所属している家系は、「佐藤」や「田中」のような、「姓」または「名字」<sup>1</sup>と呼ばれる、自身を識別する名前を持っています。しかし、天皇家だけは例外で、天皇家は自身の家系を識別する名前を持っていません。

#### Q 2.1.18 今上天皇って何ですか。

「今上天皇」というのは、現職の天皇のことです。

なお、天皇が崩御した場合、そのときから諱が贈られるまでの間、その天皇は「大行天皇」と呼ばれることになります。

## 2.2 皇居

#### Q 2.2.1 皇居って何ですか。

「皇居」というのは、天皇の住居のことです。

現在の皇居は、東京都千代田区にあります。そこは、江戸幕府の将軍が住んでいた「江戸城」と呼ばれる城郭があった場所です。

天皇の住居は、古くは、「御所」、「内裏」、「禁裏」、「禁中」、「宮中」などと呼ばれていました。1869 年（明治 2 年）に天皇の住居が京都から東京に移ったとき、新たに天皇の住居となったかつての江戸城は、「皇城」と呼ばれることになりました。そして、1888 年（明治 21 年）には「宮城」に改称されました。天皇の住居が「皇居」に改称されたのは、1948 年（昭和 23 年）のことです。

皇居は、「皇居東御苑」と呼ばれる東の区域と、「吹上御苑」と呼ばれる西の区域から構成されています。皇居東御苑は、1968 年（昭和 43 年）から無料で開放されています。

#### Q 2.2.2 皇居東御苑にはどんなものがあるんですか。

皇居東御苑には、次のようなものがあります。

<sup>1</sup> 「みょうじ」は、「苗字」と表記されることもある。



|                                |  |
|--------------------------------|--|
| 天守閣跡                           | 「明暦 <sup>めいれき</sup> の大火」と呼ばれる 1657 年（明暦 3 年）の火災で消失した天守閣の石垣。                  |
| 桃華楽堂 <sup>とうか がくどう</sup>       | 香淳 <sup>こうじゆん</sup> 皇后（ <sup>なが こ</sup> 良子）の還暦を祝して 1966 年（昭和 41 年）に建てられた音楽堂。 |
| 書陵部 <sup>しりょうぶ</sup>           | 皇室が保有している図書および皇族の墓を管轄する宮内庁の部局。   |
| 三の丸尚蔵館 <sup>さん まるしやうぞうかん</sup> | 昭和天皇（裕仁）の手元にあった美術品を保管するために 1993 年（平成 5 年）に開設された美術館。                          |

### Q 2.2.3 吹上御苑にはどんなものがあるんですか。

吹上御苑には次のようなものがあります。

|                            |  |
|----------------------------|--|
| 皇居 <sup>きやうでん</sup> 宮殿     | Q 2.2.4 で説明する。   |
| 御所 <sup>ごしよ</sup>          | 天皇と皇后が日常生活を送る建物。現在の建物は 1993 年（平成 5 年）に竣工。                                      |
| 宮中三殿 <sup>きやうちゆうさんでん</sup> | Q 2.2.5 で説明する。   |
| 生物学御研究所                    | 天皇が生物学の研究をする建物。  |
| 水田                         | 稲作のための水田。天皇も、ここで田植や稲刈をする。ここで収穫された稲は、祭祀において神饌として供えられたり、天皇と皇后の食卓に出されたりする。        |
| 養蚕所                        | 養蚕のための建物。皇后も、ここで養蚕の作業をする。ここで生産された生糸で作られた織物は、祭祀において幣帛として供えられたり、海外からの賓客に贈られたりする。 |

### Q 2.2.4 皇居宮殿って、どんな建物なんですか。

皇居<sup>きやうでん</sup> 宮殿は、吹上御苑にある、天皇の執務や各種の儀式や晩餐会などに使われる建物です。1888 年（明治 21 年）に竣工して、「明治宮殿」と呼ばれた皇居宮殿は、1945 年（昭和 20 年）5 月の空襲で焼失しました。現在の皇居宮殿は、その跡地に 1968 年（昭和 43 年）に再建されたものです。

現在の皇居宮殿は、7 棟の建物から構成されています。それらのうちで最も中心となる建物は、「正殿<sup>せいでん</sup>」と呼ばれています。正殿には、松の間、竹の間、梅の間などの部屋があります。松の間は各種の儀式などが実施される部屋で、竹の間は天皇が応接に使う部屋で、梅の間は皇后が応接に使う部屋です。

正殿の北東には、「豊明殿<sup>ほうめいでん</sup>」と呼ばれる建物があって、ここでは晩餐会や午餐などが実施されます。

### Q 2.2.5 宮中三殿って、どんな建物なんですか。

宮中三殿<sup>きやうちゆうさんでん</sup>は、吹上御苑にある、神々を祀っている建物です。宮中三殿は、三つの社殿から構成されています。それらの社殿は、すべて南を向いていて、東西に並んでいます。そして、それらの社殿は回廊によって結ばれています。

宮中三殿の中央の社殿は、「賢所<sup>かしどころ</sup>」と呼ばれ、両側の二つの社殿と比べて、大きさが少し大きく、床も少し高く作られています。この社殿については、Q 2.2.6 で説明します。

賢所の西側にある社殿は、「皇霊殿<sup>こうれいでん</sup>」と呼ばれます。この社殿の祭神は、「皇霊」と呼ばれる、神武天皇以降の天皇と皇族の霊です。

賢所の東側にある社殿は、「神殿<sup>しんでん</sup>」と呼ばれます。この社殿の祭神は、天神地祇（Q 1.5.8 参照）すなわちすべての神々です。

### Q 2.2.6 賢所って、どんな建物なんですか。

賢所<sup>かしどころ</sup>は、宮中三殿の中央に位置する、天皇の祖先とされる天照大神<sup>あまてらすおおみかみ</sup>という女神を祀っている社殿です。天照大神については、第 2.4 節で説明します。

賢所に安置されている、天照大神が宿っているとされる神体は、「八咫鏡」と呼ばれる鏡です。この鏡については、第2.6節で説明します。

宮中三殿のうちで、賢所のみは、天皇の住居が京都にあった時代にも同じ目的の社殿が存在していたのに対して、その左右にある皇霊殿と神殿は、明治時代に新設された社殿です。

「賢所」という言葉は、本来は、「八咫鏡を安置している場所」を意味する普通名詞です。「内侍所」という言葉も、同じ意味で使われる普通名詞です。平安時代には「温明殿」と呼ばれる建物が賢所として使われていましたが、鎌倉時代末期からは、それまで武器庫として使われていた「春興殿」と呼ばれる建物が賢所として使われるようになりました。

#### Q 2.2.7 宮中三殿の周囲にはどんな建物があるんですか。

宮中三殿の周囲には、次のような建物があります。

|      |   |
|------|---|
| 綾綺殿  | 天皇と皇后が着替えをするための建物。神殿の背後にある。                           |
| 東宮便殿 | 皇太子と皇太子妃が着替えをするための建物。賢所の後方にある。                        |
| 御饌殿  | 神饌（Q 1.3.11 参照）を調理するための建物。皇霊殿の背後にある。                  |
| 神楽舎  | 御神楽（天照大神に捧げる音楽と舞）のための建物。賢所の前方にある。                     |
| 神嘉殿  | 新嘗祭という一年に一度の祭祀のために使われる建物。皇霊殿の西にある。新嘗祭については第2.9節で説明する。 |
| 膳舎   | 新嘗祭で神に供える神饌を調理するための建物。神嘉殿と皇霊殿の間にある。                   |

## 2.3 天皇制の歴史

### Q 2.3.1 天皇制って、いつごろ始まったんですか。

天皇制が始まったのは、4世紀ごろのことだと考えられています。

4世紀ごろ、大和（現在の奈良県）の三輪山付近を本拠地とする政権が成立しました。この政権の成立が、天皇制の始まりだと考えられています。この政権は、通常、「大和政権」または「大和朝廷」と呼ばれます。「朝廷」というのは、「君主が政務を執る場所」という意味の言葉です。

『宋書』という中国の歴史書の中に、「倭の五王」と呼ばれる、5世紀の大和政権における5人の王についての記述があります。「倭」というのは、当時の中国が使った日本の国号です。

『宋書』は倭の五王を、讃、珍、済、興、武という名前で呼んでいます。彼らの関係について、讃と珍は兄弟、興と武も兄弟で、済は興と武の父親であると記されていますので、この当時の天皇制がすでに世襲制だったことが分かります。

この当時の大和政権の王は、「すめらみこと」または「おおきみ」という称号で呼ばれていました（表記は「大王」）。「天皇」という称号が使われるようになったのは、7世紀ごろのことだと考えられています。

### Q 2.3.2 「天皇」という言葉は、漢語としてはどういう意味なんですか。

漢語の「天皇」という言葉は、古代の中国において宇宙の最高の統治者とされた神のことを意味しています。「天皇帝」、「天帝」、「太一」などと呼ばれることもあります。

中国では、漢の時代に、「北辰」と呼ばれるものを崇拜する宗教が流行しました。北辰というのは北極星のことで、それを崇拜する理由は、そこが天皇の住居であると信じられていたからです。

### Q 2.3.3 親政って何ですか。

「親政」というのは、王や皇帝などの君主が自ら政治に携わるということです。

天皇制は、その大部分の期間において、天皇による親政という形態ではありませんでした。天皇制が天皇による親政という形態だったのは、次のような限られた期間だけです。

- 奈良時代。
- 「延喜・天曆の治」と呼ばれる平安時代の一時期。
- 「建武の新政」と呼ばれる、後醍醐天皇（尊治）による親政の期間。
- 明治維新からアジア太平洋戦争の終結までの期間。

天皇が政治に携わっていたこれらの例外的な期間を除くと、天皇は単に形式的または儀礼的な権威を持っているだけで、日本の統治権を持っていたのは、天皇以外の者たちでした。

Q 2.3.4 奈良時代よりも前の時代に日本の統治権を持っていたのは、どんな人たちだったんですか。

奈良時代よりも前の時代には、「大臣」と呼ばれる職位の者が日本の統治権を持っていました。

大臣は、蘇我氏という豪族によって世襲される職位でした。蘇我氏の権勢は、蘇我蝦夷と入鹿の父子のときに頂点に達しましたが、645年6月12日に「乙巳の変」と呼ばれる政変が起き、入鹿は暗殺され、蝦夷は自殺しました。この政変に始まる一連の改革は、「大化改新」と呼ばれます。

Q 2.3.5 親政だった奈良時代の天皇制って、どんな体制だったんですか。

奈良時代の天皇制は、中国の皇帝の制度を模倣したものでした。

日本が奈良時代だったとき、中国は、唐という王朝の時代でした。当時の日本は、「遣唐使」と呼ばれる使節を何度も派遣して、制度や学問などを唐から取り入れていました。

君主の独断による政治は「専制」と呼ばれ、そのような政治をする君主は「専制君主」と呼ばれます。唐の皇帝は典型的な専制君主でした。奈良時代の日本は唐の制度の影響下にありましたが、この時代の天皇も、専制君主としての性格を強く持っていました。724年（神亀元年）に即位した聖武天皇（首）や、749年（天平勝宝元年）に即位した孝謙天皇（阿倍）は、この時代の専制君主だった天皇の代表例です。

唐の皇帝は、「律令」と呼ばれる基本法典を整備して、それに基づいて国家を中央集権的に統治しました。律令に基づく政治体制は、「律令制度」と呼ばれます。唐の影響を受けた日本の奈良時代の天皇も、律令制度を採用しました。

Q 2.3.6 奈良時代の天皇による親政が終わったあとは、どんな人たちが日本の統治権を持つことになったんですか。

奈良時代の天皇による親政が終わったあとに日本の統治権を持つことになったのは、「摂政」、  
「関白」、「征夷大將軍」という職位の者たちです。

摂政と関白についてはQ 2.3.7で、征夷大將軍についてはQ 2.3.8で説明することにしたいと思います。

Q 2.3.7 摂政とか関白とかって何のことですか。

「摂政」というのは、君主に代わって政務を執ること、またはそれをする者のことです。そして、「関白」というのは、天皇を補佐して政務を執る者のことです。

摂政は、天皇が幼少である場合や、病気などで政務を執ることができない場合に置かれる職位です。現在の皇室典範にも、摂政に関する規定があります。

摂政という職位には天皇家の者が就任するのが原則ですが、平安時代の中期には、藤原氏という貴族の家系が権力を握り、関白のみならず摂政をも独占しました。藤原氏は、天皇が幼少のときは摂政を置き、成長ののちは関白を置いて政務を執りました。藤原氏によるこのような政治は、「摂関政治」と呼ばれます。

Q 2.3.8 征夷大將軍って何ですか。

「征夷大將軍」というのは、日本の統治権を持つ、武士の統率者のことです。単に「將軍」と呼ばれることもあります。

「征夷大將軍」という言葉は、本来は、大和政権に服従しない人々を征討するために派遣される將軍という意味でした。しかし、1192年（建久3年）に源頼朝がこの職位に任命されたときからは、日本の統治者となった武士の称号として、この言葉が使われるようになりました。

征夷大將軍を中心とする政権、またはその政庁は、「幕府」と呼ばれます。歴史上のそれぞれの幕府は、鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府というように、その政庁が置かれた地名を冠して呼ばれます。

江戸に幕府が置かれた時代、すなわち江戸時代は、天皇の権能に厳しい制限が加えられた時代でした。この時代の天皇に残されていた権能は、官位（栄典としての称号）の授与、暦の制定、元号（Q 2.1.14 参照）の制定、という三つのもののみでした<sup>2</sup>。

Q 2.3.9 明治維新からアジア太平洋戦争の終結までの期間の、親政だった天皇制って、どんな体制だったんですか。

明治維新からアジア太平洋戦争の終結までの期間の天皇制は、初期段階では律令制度（Q 2.1.12 参照）の復活を志向していましたが、のちに、「立憲君主制」と呼ばれる体制に移行しました。

明治維新によって成立した政府は、ヨーロッパの政治制度について調査し、その結果、専制君主が統治するプロイセン<sup>3</sup>を模範として、「立憲君主制」と呼ばれる体制を採用しました。立憲君主制というのは、君主が統治権を保有しているけれども、憲法に基づいてその統治権を運用する政治体制のことです。

1889年（明治22年）2月11日に発布されて、1890年（明治23年）11月29日に施行された大日本帝国憲法は、プロイセンの憲法を参考にして起草されたもので、その第1条は、

大日本帝国八万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

と定めています（「万世一系」という言葉についてはQ 2.3.11を参照）。また第4条は、

天皇八国ノ元首ニシテ統治権を総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ

と定めています。「総攬」というのは一手に掌握するということですから、日本の統治権を持っている者は天皇のみであるということが憲法に規定されているということになります。ただし、「此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」という条文が示しているとおり、天皇による統治権の行使に対しては、憲法による制限が加えられていました。

Q 2.3.10 アジア太平洋戦争が終結したあとは、どんな人たちが日本の統治権を持つことになったんですか。

アジア太平洋戦争が終結したあとに日本の統治権を持つことになったのは、日本の国民です。1946年（昭和21年）11月3日に公布されて1947年（昭和22年）5月3日に施行された、日本の現行の憲法である日本国憲法は、その第1条で、

天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。

と定めています。「主権」という言葉は多義的ですが、ここでは統治権という意味で使われています。すなわち、日本の現行の憲法は、日本の統治権を持っているのは日本の国民であると定めているわけです。

日本国憲法のもとでの天皇に対しては、日本の統治権を持つ日本の国民によって、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であるという地位が与えられていますが、国政に関する権能は与えられていません。Q 2.1.12で述べたように、このような天皇制は「象徴天皇制」と呼ばれます。

Q 2.3.11 万世一系って何のことですか。

「万世一系」というのは、初代の天皇から現在の天皇まで、単一の家系の者が皇位を継承してきた、という歴史観のことです。

<sup>2</sup>[石井,2011], pp. 263–279

<sup>3</sup>18世紀初頭に成立した東ヨーロッパの王国。第二次世界大戦後に消滅。

万世一系は、空想的な歴史観であって、それを完全に史実によって裏付けることはできません。

記紀において初代の天皇とされるのは神武天皇（彦火火出見）ですが、この天皇から第9代の開化天皇（稚日本根子彦大日）までは実在しない、というのが定説です。また、第10代以降の天皇についても、実在性については諸説があります。

実在することが確実な天皇よりも後の天皇についても、常に単一の家系の者によって皇位が継承されたという確証はありません。たとえば、第25代の武烈天皇（小泊瀬稚鷦鷯）ののちに即位した第26代の継体天皇（男大迹）について、記紀は、応神天皇（誉田別）の五世の孫と記述していますが、実際にはそれまでとは異なる家系の者が天皇となったのである、という説があります<sup>4</sup>。

## 2.4 天照大神と素戔鳴尊

### Q 2.4.1 天照大神って、どういう神なんですか。

天照大神は、太陽を神格化した、記紀神話に登場する女神です。高天原（Q 1.5.8 参照）の統治者とされています。

「天照大神」というアマテラスオオミカミの表記は『日本書紀』のもので、『古事記』では「天照大御神」と表記されています。

記紀神話において、天照大神は、天皇の先祖とされています。「皇祖」という言葉は、広い意味では、天照大神から初代の天皇とされる神武天皇（彦火火出見）に至るまでの代々の神々を指して使われるのですが、天照大神のみを指して使われることもあります。

「伊勢神宮」と呼ばれる神社群のうちで最も中心となる、皇大神宮という神社は、天照大神を祀っています。伊勢神宮については、第2.7節で説明します。

### Q 2.4.2 素戔鳴尊って、どういう神なんですか。

素戔鳴尊は、記紀神話に登場する神で、天照大神の弟です。

「素戔鳴尊」というスサノオノミコトの表記は『日本書紀』のもので、『古事記』では「須佐之男命」と表記されています。

### Q 2.4.3 天照大神と素戔鳴尊って、父親と母親は誰なんですか。

天照大神と素戔鳴尊は、父親が伊弉諾尊で、母親が伊弉冉尊です（伊弉諾尊と伊弉冉尊についてはQ 1.5.12を参照）。

『古事記』では、天照大神と素戔鳴尊は、伊弉諾尊が褌をしたときに生まれたと語られています。伊弉諾尊は、亡くなった伊弉冉尊を追って黄泉の国（Q 1.5.8 参照）へ行ったのですが、そこは穢れた場所でしたので、そこから帰ってきたのち、彼は穢れを洗い流すために褌をします。そして、その褌の過程で、彼は多くの神々を生みます。左の目を洗ったときに生まれたのが天照大神で、鼻を洗ったときに生まれたのが素戔鳴尊です。

ちなみに、伊弉諾尊が右の目を洗ったときに生まれたのは、月読尊という、月を神格化した神です。

伊弉諾尊は、天照大神、月読尊、素戔鳴尊を生んだとき、「三柱の尊い子供を得た」と述べましたので、これらの三柱の神は、「三貴子」と呼ばれます。『古事記』では、伊弉諾尊は、天照大神に高天原の統治を、月読尊に夜の世界の統治を、素戔鳴尊に海原の統治を委任したと語られています。

### Q 2.4.4 天の岩屋って何ですか。

「天の岩屋」というのは、天照大神がその中に籠ったと記紀神話が語っている岩屋<sup>5</sup>のことです。

<sup>4</sup>[歴史読本,2009], pp. 84-88。

<sup>5</sup>岩を穿って造られた住居。

記紀神話が語っている、天照大神が天の岩屋に籠ったエピソードというのは、次のようなものです。

「天照大神は、素戔鳴尊が高天原で狼藉を働いたことに立腹して、天の岩屋に入って岩戸を閉じた。その結果、高天原も葦原の中つ国も暗闇となった。困った高天原の神々は、天の安の河原に集まって対策を練った。彼らは、大きな勾玉<sup>6</sup>、大きな鏡、そして木綿（Q 1.3.6 参照）を作り、天香具山から榊を掘り起こして、その上の枝に勾玉を通した紐を掛けて、中の枝に鏡を掛けて、下の枝に木綿を掛けた。そして、祝詞を唱えたり、天鈿女命<sup>あめのうずめのみこと</sup>という女神の踊りを見て笑ったりした。天照大神が、外の様子を見るために岩戸を開けたとき、手力雄神<sup>たぢからのおのかみ</sup>という神が彼女の手を取って岩屋から引き出した。すると、高天原と葦原の中つ国は再び明るくなった。神々は、素戔鳴尊を高天原から追放した」

#### Q 2.4.5 八岐大蛇って何ですか。

八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>は、素戔鳴尊が退治したと記紀神話が語っている大蛇です。

八岐大蛇の姿について、『古事記』は、一つの胴体に頭と尾がそれぞれ八つあり、その目は酸漿<sup>ほおずき</sup>のように真っ赤で、樹木が背中に生えていて、その全身は八つの谷と八つの峰にまたがるほどの長さであり、その腹は血がにじんでただれている、と語っています。

記紀が語っている、素戔鳴尊が八岐大蛇を退治したエピソードというのは、次のようなものです。

「高天原から追放された素戔鳴尊は出雲の国<sup>いづも</sup>に降臨し、泣いている老夫婦と出会った。夫は脚摩乳<sup>あしなづち</sup>、妻は手摩乳<sup>てなづち</sup>という名前である。なぜ泣いているのかと素戔鳴尊が尋ねると、脚摩乳は、自分たちには八人の娘がいたが、毎年、越の国<sup>こし</sup>から八岐大蛇が来て娘を食べていき、今年は奇稻田姫<sup>くしなだひめ</sup>が食われようとしていて、それが悲しくて泣いているのだと答えた。素戔鳴尊が奇稻田姫を妻としてもらえないかと尋ねると、老夫婦は娘を差し上げると答えた。素戔鳴尊は老夫婦に濃い酒を作らせ、八つの桶をその酒で満たした。八岐大蛇は八つの頭でそれぞれの桶から酒を飲み、酔って眠り込んだ。素戔鳴尊はその大蛇を剣で切り裂いた。その尾を斬ったときに剣の刃がこぼれたので、素戔鳴尊が不審に思って尾を切り開くと、その中に剣があった。素戔鳴尊はその剣を天照大神に献上した」

## 2.5 天孫降臨

### Q 2.5.1 天孫降臨って何ですか。

「天孫降臨<sup>てんそんこうりん</sup>」というのは、天皇の先祖が高天原から葦原の中つ国に降臨したという、記紀神話を構成するエピソードの一つです（高天原と葦原の中つ国については Q 1.5.8 参照）。

### Q 2.5.2 天孫降臨のエピソードに登場する、高天原から葦原の中つ国に降臨した天皇の先祖って、誰ですか。

天孫降臨のエピソードに登場する、高天原から葦原の中つ国に降臨した天皇の先祖というのは、瓊瓊杵尊<sup>にぎのみこと</sup>という神です。

瓊瓊杵尊という名前は、本来の長い名前の省略形です。『日本書紀』と『古事記』のそれぞれは、瓊瓊杵尊の本来の名前を次のように記しています。

『日本書紀』 天津彦彦火瓊瓊杵尊<sup>あまつひこひこほの にぎのみこと</sup>

『古事記』 天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命<sup>あめにきしくににきしあまつひこひこほの にぎのみこと</sup>

この名前に含まれている「ほのになぎ」は、穀物が豊かに実するという意味で、この神が穀神<sup>こくしん</sup>

<sup>6</sup>翡翠などをコンマや胎児のような形に加工した装身具。

<sup>7</sup>現在の島根県の東部。

<sup>8</sup>現在の福井県から青森県までの日本海沿岸の地域。

(穀物の神)だということを示しています。

記紀神話において初代の天皇とされている神武天皇(彦火火出見)は、瓊瓊杵尊の曾孫(ひまご)です。

また、第2.4節で紹介した天照大神は、瓊瓊杵尊の祖母です。瓊瓊杵尊は、天照大神の孫であるという意味で、「天孫」と呼ばれます。

### Q 2.5.3 瓊瓊杵尊って、誰に命令されて葦原の中つ国に降臨したんですか。

葦原の中つ国への降臨を瓊瓊杵尊に命じたのは、高皇産霊尊という神と、天照大神です。高皇産霊尊についてはQ 2.5.4で説明します。

高皇産霊尊は、葦原の中つ国に瓊瓊杵尊を降臨させるに際して、「真床覆衾」と呼ばれるもので彼を覆いました。真床覆衾については、Q 2.5.5で説明します。

天照大神は、葦原の中つ国に孫を降臨させるに際して、「三種の神器」と呼ばれる三つの物品、「天壤無窮の神勅」と呼ばれる指令、そして「斎庭の稻穂」と呼ばれる稲穂を彼に授けました。三種の神器については第2.6節で、天壤無窮の神勅についてはQ 2.5.6で、そして斎庭の稲穂についてはQ 2.5.7で説明します。

さらに天照大神は、「五部神」と呼ばれる五柱の神に対して、瓊瓊杵尊に従って降臨することを命じました。五部神については、Q 2.5.8で説明します。

### Q 2.5.4 高皇産霊尊って、どういう神なんですか。

高皇産霊尊は、造化の三神(Q 1.5.11 参照)のうちの一柱で、高天原に二番目に出現した神です。

「高皇産霊尊」という名前は『日本書紀』でのもので、『古事記』では「高御産巢日神」または「高木神」と呼ばれています。

### Q 2.5.5 真床覆衾って何ですか。

「真床覆衾」というのは、『日本書紀』が語る神話において、高皇産霊尊が葦原の中つ国に瓊瓊杵尊を降臨させるときに彼をそれで覆ったとされる掛け布団のことで、「真床襲衾」または「真床追衾」と表記されることもあります。

「真床」というのは寝床の美称で、「衾」というのは掛け布団のことで。

### Q 2.5.6 天壤無窮の神勅って何ですか。

「天壤無窮の神勅」というのは、記紀神話において、天照大神が瓊瓊杵尊に対して授けたとされる、「天壤無窮」という言葉を含む指令のことで。

天壤無窮の神勅は、『日本書紀』の天孫降臨の段(第九段)の第一の一書に引用されています。それは次のような指令です。

白文 葦原千五百秋之瑞穂国。是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。宝祚之隆、当与天壤無窮者矣。

書き下し文 葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治らせ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壤と窮り無かるべし。

現代語訳 葦原の千五百秋の瑞穂の国は、わが子孫が王たるべき国である。皇孫のあなたがいて治めなさい。さあ、行きなさい。宝祚の栄えることは、天地と共に窮りないであろう。<sup>9</sup>

### Q 2.5.7 斎庭の稻穂って何ですか。

<sup>9</sup>[宇治谷,1988], p. 63.

「<sup>ゆにわ</sup>齋庭の稻穂」というのは、天照大神が瓊瓊杵尊に対して授けたと『日本書紀』の一書が述べている稲穂のことです。

「<sup>ゆにわ</sup>齋庭」というのは、神を祀るために浄められた場所のことです。

『日本書紀』の天孫降臨の段（第九段）の第二の一書は、<sup>あめのこやねのみこと</sup>天兒屋命と<sup>ふとたまのみこと</sup>太玉命（Q 2.5.8 参照）に対して、天照大神が次のように命じたと述べています。

白文 以吾高天原所御齋庭之穂、亦当御於吾兒。

書き下し文 <sup>わ</sup>吾が高天原に<sup>きこしめ</sup>所御<sup>ゆにわのいなほ</sup>齋庭之穂<sup>もち</sup>を以て、亦<sup>またわ</sup>吾が<sup>みこ</sup>兒に<sup>まか</sup>御せまつるべし。

現代語訳 わが高天原にある齋庭の穂（神に捧げる神聖な稲穂）を、わが子に与えなさい<sup>10</sup>

### Q 2.5.8 五部神って何ですか。

「<sup>いつとものおのみ</sup>五部神」というのは、記紀神話において、瓊瓊杵尊に従って葦原の中つ国に降臨することを天照大神が命じた、五柱の神のことです。

イトモノオは、『日本書紀』では「五部」と表記されていますが、『古事記』では「五伴緒」と表記されています。

「五部神」と呼ばれるのは、次の五柱の神です（見出しとして記した名前の表記は『日本書紀』のもの）。

<sup>あめのこやねのみこと</sup>天兒屋命 天照大神が天の岩屋に籠ったときに祝詞を奏したとされる神。大和政権の祭祀に奉仕した<sup>なかとみうじ</sup>中臣氏の先祖とされる。

<sup>ふとたまのみこと</sup>太玉命 天照大神が天の岩屋に籠ったときに<sup>あまのかくやま</sup>天香具山から神を掘り起こしたとされる神。大和政権の祭祀に奉仕した<sup>いんべうじ</sup>齋部氏の先祖とされる。『古事記』での名前の表記は「布刀玉命」。

<sup>あめのうずめのみこと</sup>天鈿女命 天照大神が天の岩屋に籠ったときに踊りを舞って神々を笑わせたとされる女神。大和政権の<sup>みたましづめのまつり</sup>鎮魂祭に奉仕した<sup>さるめのみ</sup>猿女君の先祖とされる。『古事記』での名前の表記は「天宇受売命」。

<sup>いしにりどめのみこと</sup>石凝姥命 天照大神が天の岩屋に籠ったときに神に掛けられた鏡を作ったとされる女神。鏡を製作して大和政権に納めた<sup>かがみつくりべ</sup>鏡作部の先祖とされる。『古事記』での名前の表記は「伊斯許理度売命」。

<sup>たまのやのみこと</sup>玉屋命 天照大神が天の岩屋に籠ったときに神に掛けられた勾玉を作ったとされる神。玉を製作して大和政権に納めた<sup>たまつくりべ</sup>玉作部の先祖とされる。『古事記』での名前は「<sup>たまのあやのみこと</sup>玉祖命」。

## 2.6 三種の神器

### Q 2.6.1 三種の神器って何ですか。

「<sup>さんしゆじんぎ</sup>三種の神器」というのは、皇位を象徴する三つの物品のことです。

三種の神器は、「<sup>やたのがみ</sup>八咫鏡」と呼ばれる鏡、「<sup>さなきのつるぎ</sup>草薙剣」と呼ばれる剣、「<sup>やさかのまがたま</sup>八尺瓊勾玉」<sup>11</sup>と呼ばれる<sup>まがたま</sup>勾玉から構成されています。

草薙剣は、「<sup>あめのむらくものつるぎ</sup>天叢雲剣」<sup>12</sup>と呼ばれることもあります。

三種の神器は、「<sup>しんじ</sup>神璽」と呼ばれることもあります。ただし、この言葉は、八尺瓊勾玉のみを指して使われることもあります。また、「<sup>けんじ</sup>劍璽」という言葉は、草薙剣と八尺瓊勾玉の二つを指します。

<sup>10</sup>[宇治谷,1988], p. 67.

<sup>11</sup>「やさかのまがたま」は、「八尺瓊曲玉」と表記されることもある。

<sup>12</sup>「天叢雲剣」には、「あめのむらくものつるぎ」という読み方もある。



三種の神器は、記紀神話の天孫降臨のエピソード（第 2.5 節参照）において、天照大神が瓊瓊杵尊に授けたものと語られています。

王の地位を象徴する物品は、一般に「レガリア」(regalia) と呼ばれます。三種の神器も、レガリアの一種です。

#### Q 2.6.2 三種の神器って、どんな物品なんですか。

三種の神器は、それぞれが収められている箱を開くことが許されていないため、どのような物品であるかということは定かではありません。

三種の神器のそれぞれは、箱に収められています。それらの箱は、たとえ天皇といえども開くことが許されていません。ですから、三種の神器がどのような物品なのかということについて語られていることは、さまざまな手掛かりから推測したものです。

#### Q 2.6.3 八咫鏡って、どんな由来を持つ鏡なんですか。

八咫鏡<sup>やたのかがみ</sup>は、天照大神が天の岩屋に籠ったという記紀神話のエピソード（Q 2.4.4 参照）において、彼女を岩屋から誘い出すために作られたものとされています。

天照大神は、三種の神器を瓊瓊杵尊に授けるとき、「この鏡はひたすら私の御魂<sup>みたま</sup>として、私を拝むのと同じように敬ってお祭りなさい<sup>13</sup>」と語ったと『古事記』は伝えています。また、『日本書紀』の天孫降臨の段（第九段）は、その第二の一書で、天照大神が「わが子がこの宝鏡を見るのに、丁度私を見るようにすべきである。共に床を同じくし、部屋をひとつにして、つつしみ祭る鏡とせよ<sup>14</sup>」と語ったと伝えています。

#### Q 2.6.4 草薙剣って、どんな由来を持つ剣なんですか。

草薙剣<sup>くさなぎのつるぎ</sup>は、素戔鳴尊<sup>やまたのあろち</sup>が八岐大蛇を退治したという記紀神話のエピソード（Q 2.4.5 参照）において、彼が大蛇の尾の中から取り出して天照大神に献上したものとされています。

草薙剣がその名前で呼ばれるようになったのは、景行天皇<sup>けいこう</sup>（大足彦忍代別<sup>おおたらしひこおしるわけ</sup>）の皇子である日本武尊<sup>やまとたけるのみこと</sup>が、野原に火を放たれて殺されそうになったときに、その剣を使って周囲の草を薙ぎ払うことによって難を逃れたという伝説が由来とされています。

#### Q 2.6.5 八尺瓊勾玉って、どんな由来を持つ勾玉なんですか。

八尺瓊勾玉<sup>やさかにのまがたま</sup>は、天照大神が天の岩屋に籠ったという記紀神話のエピソード（Q 2.4.4 参照）において、彼女を岩屋から誘い出すために作られたものとされています。

#### Q 2.6.6 三種の神器って、どこにあるんですか。

伝承によれば、瓊瓊杵尊に授けられた三種の神器のうち、八咫鏡<sup>いせじんぐう</sup>は伊勢神宮に移され、草薙剣<sup>あつたじんぐう</sup>は熱田神宮に移されたとされています。八尺瓊勾玉のみは皇室によって継承され、現在も皇居にあるとされています。

熱田神宮は、愛知県名古屋市にある、草薙剣を神体として祀っている神社です。伊勢神宮については、第 2.7 節で説明します。

八咫鏡と草薙剣は、同じ名前で呼ばれるものを皇室も保有しています。それらは、伝承によれば、伊勢神宮と熱田神宮のそれぞれにあるものを正体とする形代<sup>しょうたい</sup>（レプリカ<sup>かたしろ</sup>）であるとされています。

ただし、八咫鏡は伊勢神宮に移され、草薙剣は熱田神宮に移された、というのはあくまで伝承です。皇室が保有しているものと、伊勢神宮と熱田神宮にあるものとの関係についての真相は、定かではありません。

皇室が保有している現在の草薙剣は、安徳天皇<sup>あんどく</sup>（言仁<sup>ときひと</sup>）の時代まで皇室が保有していた草薙剣とは異なる別のものです。安徳天皇の時代までの草薙剣は、源氏と平氏との最後の合戦である

<sup>13</sup>[次田,1977], p. 178。

<sup>14</sup>[宇治谷,1988], p. 67。

1185年（元暦2年）の壇ノ浦の戦の折に安徳天皇とともに海に沈み、現在に至っても発見されていません。

Q 2.6.7 皇室が保有してる三種の神器って、どこにあるんですか。

皇室が保有している三種の神器は、皇居にあります。

八咫鏡は、天照大神が宿っている神体として賢所（Q 2.2.6 参照）に安置されています。

草薙剣と八咫瓊勾玉は、御所（Q 2.2.3 参照）の中の、天皇と皇后の寝室の隣にある「剣璽の間」という部屋に安置されています。

Q 2.6.8 動座って何のことですか。

「動座」というのは、神体などの高貴な物品を移動させることです。

三種の神器のそれぞれは、きわめて高貴な物品であると考えられていますので、それを移動させることは、「動座」または「御動座」と呼ばれます。

Q 2.6.7 で述べたように、草薙剣と八咫瓊勾玉は賢所に安置され、八咫鏡は賢所に安置されています。草薙剣と八咫瓊勾玉は祭祀などのために頻りに動座しますが、八咫鏡が動座することはきわめてまれです。

大正天皇（嘉仁）と昭和天皇（裕仁）の即位の式典は京都で挙行されましたので、そのときには八咫鏡も京都に動座しています。動座には列車が使われ、八咫鏡を安置した車両は「賢所奉安車」と呼ばれました。

Q 2.6.9 壺切御剣って何ですか。

壺切御剣は、皇太子の地位を象徴する護身刀です。「壺切の剣」または「壺切の御剣」と呼ばれることもあります。

皇位の継承者は、「立太子礼」と呼ばれる儀式を経て、正式な皇太子となります。壺切御剣は、この儀式のときに天皇から皇太子に授与されます。

壺切御剣は、平安時代に関白の藤原基経が宇多天皇（定省）に献上したものです。この剣が天皇から皇太子に授与されるという伝統は、醍醐天皇（敦仁）が皇太子だったときに、この剣が宇多天皇から授与されたことに始まります。

## 2.7 伊勢神宮

Q 2.7.1 伊勢神宮って何ですか。

「伊勢神宮」というのは、三重県の松阪市、伊勢市、鳥羽市、多気郡、渡会郡、志摩郡に散在する、125社の神社から構成される神社群のことです。

1871年（明治4年）、日本の政府は、伊勢神宮の正式な名称は「神宮」とであると決めました。現在も、伊勢神宮はこれを正式な名称としています。

伊勢神宮を構成している125社の神社のうちで最も中心となるのは、「正宮」と呼ばれる二つの神社です。正宮の一つは「皇大神宮」または「内宮」と呼ばれ、もう一つは「豊受大神宮」または「外宮」と呼ばれます。

Q 2.7.2 皇大神宮って、どういう神社なんですか。

皇大神宮は、八咫鏡（Q 2.6.3 参照）を神体として天照大神（Q 2.4.1 参照）を祀る神社です。内宮と呼ばれることもあります。

皇大神宮が創建されたのはいつなのかということについては、さまざまな説がありますが、おそらく5世紀から6世紀の間ではないかと考えられています。

史実ではありませんが、『日本書紀』は、皇大神宮の創建について次のような物語を語っています。

「瓊瓊杵尊に授けられた三種の神器の一つである八咫鏡は、当初は天皇の宮殿に安置されていた。しかし、崇神天皇（御間城入彦五十瓊殖）は神の勢いを畏れ、自分の娘の豊鋤入姫命にそれを託し、大和の笠縫邑に移させた。そののち垂仁天皇（活目入彦五十狭茅）は、自分の娘の倭姫命にそれを託した。倭姫命は各地を転々としたが、伊勢に入ったとき、この国に降りたいと天照大神が彼女に告げたので、伊勢に社殿が建てられた」

### Q 2.7.3 豊受大神宮って、どういう神社なんですか。

豊受大神宮は、豊受大神という女神を祭神とする神社です。外宮と呼ばれることもあります。豊受大神は、皇大神宮の祭神である天照大神に食物を捧げる役目を担っている女神です。

史実ではありませんが、豊受大神宮が804年（延暦23年）に朝廷に提出した「止由気宮儀式帳」と呼ばれる報告書によれば、豊受大神宮は、雄略天皇（大泊瀬幼武）の夢枕に立った天照大神が、「丹波の国（京都府北部）から、御饌津神（食物を主宰する神）として豊受大神を迎えてほしい」と告げたことによって創建されたと伝えられています。

### Q 2.7.4 唯一神明造って何ですか。

「唯一神明造」というのは、皇大神宮と豊受大神宮の正殿<sup>15</sup>の建築様式のことです。

社殿の建築様式のうちで、切妻造（Q 1.4.10 参照）平入（Q 1.4.11 参照）で、棟持柱（妻よりも外側に立つ、棟を支える柱）があり、千木（Q 1.4.12 参照）が屋根の部材の延長で、屋根に鯉木（Q 1.4.14 参照）を並べる、などの属性を持つものは、「神明造」と呼ばれます。

唯一神明造は、神明造であるための属性に加えて、さらに多くの属性を持つ建築様式です。神明造の社殿は全国の多くの神社で見られるものですが、唯一神明造の社殿は、皇大神宮と豊受大神宮の正殿のみです。

### Q 2.7.5 皇大神宮の正殿と豊受大神宮の正殿って、まったく同じ構造なんですか。

いいえ。皇大神宮の正殿と豊受大神宮の正殿との間には、千木（Q 1.4.12 参照）の形状や鯉木（Q 1.4.14 参照）の本数などの相違があります。

皇大神宮の正殿と豊受大神宮の正殿は、どちらも唯一神明造（Q 2.7.4 参照）ですが、その細部には次のような相違があります。

相違の一つは、千木の形状です。皇大神宮の正殿の千木が内削であるのに対して、豊受大神宮の正殿の千木は外削です（内削と外削については Q 1.4.13 を参照）。

また、鯉木の本数という相違もあります。皇大神宮の正殿の棟に並べられた鯉木の本数が10本であるのに対して、豊受大神宮の正殿の鯉木は9本です。

さらに、「居玉」と呼ばれるものの個数という相違もあります。居玉というのは、正殿の外周に取り付けられた高欄（欄干の一種）に載せられた球形の飾りのことです。皇大神宮の正殿の高欄に載せられた居玉の個数が33顆<sup>16</sup>であるのに対して、豊受大神宮の正殿の居玉は31顆です。

### Q 2.7.6 齋宮って何ですか。

「齋宮」<sup>17</sup>というの、伊勢神宮に奉仕した未婚の皇女（天皇の娘）のことです。「齋王」<sup>18</sup>と呼ばれることもあります。

初代の齋宮は、八咫鏡を笠縫邑に移したと『日本書紀』が語っている豊鋤入姫命（Q 2.7.2 参照）だとされています。そして、後醍醐天皇（尊治）の皇女である祥子が第72代の齋宮とな

<sup>15</sup>伊勢神宮では、本殿のことを「正殿」と呼ぶ。読み方は「しょうでん」。

<sup>16</sup>「顆」は、粒状のものや丸いものを数えるときに使われる助数詞。

<sup>17</sup>「齋宮」には、「いつきのみや」という読み方もある。

<sup>18</sup>「齋王」には、「いつきのみこ」という読み方もある。

りましたが、それ以降は、兵乱のために齋宮の制度は廃絶しました。

#### Q 2.7.7 式年遷宮って何ですか。

「式年遷宮<sup>しきねんせんぐう</sup>」というのは、定められた年数ごとに、神社の社殿を建て替えて、神体を新しい社殿に遷す、という行事のことです。

「式年」というのは定められた年数のことで、「遷宮」というのは社殿から社殿へ神体を移動させることです。神社の社殿を建て替えることは、「造替<sup>ぞうたい</sup>」と呼ばれます。

伊勢神宮では、20年という年数ごとに式年遷宮が実施されます。

伊勢神宮の式年遷宮の制度は、天武天皇（大海人）によって定められたものです（天武天皇については、Q 4.1.2で詳述します）。第1回の式年遷宮は、皇大神宮が690年に、豊受大神宮が692年に実施されました。その後、室町時代に中断があったものの、それ以降は中断することなく現在まで続いています。

#### Q 2.7.8 心御柱って何ですか。

「心御柱<sup>しんのみはしら</sup>」というのは、皇大神宮と豊受大神宮のそれぞれの正殿の床下に立てられた、ヒノキでできた角柱のことです。「忌柱<sup>いみはしら</sup>」、「天御柱<sup>あめのみはしら</sup>」、「天御量柱<sup>あめのみはかりのはしら</sup>」などと呼ばれることもあります。

心御柱は、12センチ角で長さが1.5メートル<sup>19</sup>、正殿の床下の中央に立てられています。床下にあるわけですが、建物を支えているわけではなく、ただ単に立っただけです。

伊勢神宮において、心御柱は、きわめて神聖なものとみなされています。

#### Q 2.7.9 日別朝夕大御饌祭って何ですか。

「日別朝夕大御饌祭<sup>ひごとあさゆつおおみけさい</sup>」というのは、毎日、朝と夕方に豊受大神宮で執行されている、神々に神饌<sup>しんせん</sup>を奉る祭祀のことです。

日別朝夕大御饌祭において神々に奉られる神饌は、「大御饌<sup>おおみけ</sup>」と呼ばれます。この神饌は、忌火屋殿<sup>いんびやでん</sup>という建物で調理されたのち、御饌殿<sup>みけでん</sup>という建物に運ばれ、そこで、天照大神や豊受大神を始めとする伊勢神宮の神々に奉られます。

御饌殿は、豊受大神宮を囲む板垣の内側にあつて、その位置は正殿の北東です。そして忌火屋殿は、板垣の外側にあります。

神々に大御饌が奉られる時刻は、4月から9月までは午前8時と午後4時で、10月から3月までは午前9時と午後3時です。

#### Q 2.7.10 三節祭って何ですか。

「三節祭<sup>みふしのまつり</sup>」<sup>20</sup>というのは、伊勢神宮で執行される祭祀のうちで、最も重要な三つの祭祀のことです。

三節祭を構成する三つの祭祀は、10月の神嘗祭<sup>かんなめさい</sup>、そして6月と12月の月次祭<sup>つきなみのまつり</sup><sup>21</sup>です。

#### Q 2.7.11 由貴大御饌って何ですか。

「由貴大御饌<sup>ゆきのおおみけ</sup>」というのは、三節祭<sup>みふしのまつり</sup>において心御柱<sup>しんのみはしら</sup>（Q 2.7.8 参照）に供えられる神饌のことです。

Q 2.7.9で述べたように、日別朝夕大御饌祭<sup>ひごとあさゆつおおみけさい</sup>で神々に奉られる神饌は「大御饌<sup>おおみけ</sup>」と呼ばれるわけですが、三節祭で心御柱に供えられる神饌は、それとは区別して、「由貴大御饌」と呼ばれます。

#### Q 2.7.12 神嘗祭って、どういう祭祀なんですか。

<sup>19</sup>[武澤,2013], p. 270。

<sup>20</sup>「三節祭」には、「さんせつさい」という読み方もある。

<sup>21</sup>「月次祭」には、「つきなみさい」という読み方もある。

「<sup>かんなめさい</sup>神嘗祭」というのは、伊勢神宮で10月15日から17日にかけて執行される、<sup>しんこく</sup>新穀（その年に初めて収穫された穀物）で作られた<sup>しんせん みき しんの みはしら</sup>神饌や神酒を<sup>しんのみはしら</sup>心御柱（Q 2.7.8 参照）に奉る祭祀のことです。

神嘗祭は、<sup>みふしのまつり</sup>三節祭（Q 2.7.10 参照）を構成する三つの祭祀のうちで最も重要な祭祀です。

神嘗祭は、豊受大神宮では15日から16日にかけて、皇大神宮では16日から17日にかけて執行されます。

Q 2.7.11 で述べたように、三節祭で心御柱に奉られる神饌は、「<sup>ゆきのおおみけ</sup>由貴大御饌」と呼ばれます。神嘗祭では、由貴大御饌は、午後10時と翌日の午前2時の2回、心御柱に供えられます。午後10時に供えられる由貴大御饌は「<sup>ゆきのゆうへのおおみけ</sup>由貴夕大御饌」と呼ばれ、翌日の午前2時に供えられる由貴大御饌は「<sup>ゆきのあしたのおおみけ</sup>由貴朝大御饌」と呼ばれます。

神嘗祭が10月に執行されるようになったのは、日本で太陽暦が導入された1873年（明治6年）以降のことです。それ以前は、神嘗祭は9月15日から17日にかけて執行されていました。

1871年（明治4年）からは、9月17日に、皇居の賢所でも<sup>かんなめさいかしどころ</sup>神嘗祭賢所の儀という祭祀が天皇によって執行されるようになりました。この祭祀も、太陽暦が導入されたのちは10月17日に執行されています。

#### Q 2.7.13 抜穂って何ですか。

「<sup>ぬいぼ</sup>抜穂」<sup>22</sup>というの、穀物の穂を地面から抜き取ること、または抜き取った穂のことです。神嘗祭で心御柱に供えられる由貴大御饌は、伊勢神宮に奉られた新穀から作られます。奉られる新穀は、刈り取ったものではなく、抜穂です。

伊勢神宮に奉られた抜穂は、皇大神宮と豊受大神宮のそれぞれを囲む玉垣（垣根）に、穂を下にして懸けられます。この状態の抜穂は、「<sup>かけちから</sup>懸穂」と呼ばれます。

## 2.8 宮中祭祀

### Q 2.8.1 祭祀王って何ですか。

「祭祀王」というのは、政治的な統治者であると同時に、宗教的な祭祀者でもある人物のことです。

天皇は、大和政権の時代から、祭祀王という性格を持っていました。この性格は歴史を通じて変わることなく継承され、現在の象徴天皇制のもとでも、祭祀の執行は、天皇の職務のうちで大きな比重を占めています。

### Q 2.8.2 宮中祭祀って何ですか。

「宮中祭祀」というのは、皇居の中や天皇の墓所などで執行される祭祀のことです。

現行の憲法である日本国憲法は政教分離を定めていますので、皇室といえども、宗教的な祭祀を公務として執行することはできません。ですから、宮中祭祀は、公務ではなく皇室の私的な行為だとされています。

### Q 2.8.3 掌典職って何ですか。

「<sup>しやうてんしよく</sup>掌典職」というのは、宮中祭祀に携わる、皇室の私的な職員のことです。

掌典職のうちで、男性の職員は「<sup>しやうてん</sup>掌典」と呼ばれ、女性の職員は「<sup>ないしやうてん</sup>内掌典」と呼ばれます。また、掌典職の長は「掌典長」と呼ばれます。

### Q 2.8.4 親祭って何ですか。

「<sup>しんさい</sup>親祭」というのは、天皇が自ら祭祀を執行することです。

<sup>22</sup>「抜穂」には、「ぬきぼ」または「ぬきほ」という読み方もある。

宮中祭祀のうちで親祭されるものは、「大祭」と呼ばれます。それに対して、天皇も拝礼するが、祭祀を執行するのは掌典長である宮中祭祀は、「小祭」と呼ばれます。また、祝詞を奏したり神饌を供えたりしない宮中祭祀は「行事」と呼ばれます。

大祭、小祭、行事という宮中祭祀の区別は、1908年（明治41年）に制定された「皇室祭祀令」という法律で定められていたものです。この法律は1947年（昭和22年）に廃止されましたが、宮中祭祀は現在も、この法律に準拠して執行されています。

#### Q 2.8.5 宮中祭祀の大祭って、どんなものがあるんですか。

現在、宮中祭祀の大祭としては、次のようなものがあります。

|                         |   |
|-------------------------|---|
| げんしさい<br>元始祭            | 1月3日に宮中三殿で執行される、皇位の始まりを祝福する祭祀。始まったのは1873年（明治6年）。  |
| せんていさい<br>先帝祭           | 直前の代の天皇を慰霊する、その天皇の命日に皇霊殿で執行される祭祀。現在は昭和天皇（裕仁）の命日である1月7日に「昭和天皇祭」が執行されている。   |
| こうれいさい<br>皇霊祭           | 春分の日と秋分の日に皇霊殿で執行される、天皇の先祖を慰霊する祭祀。春分の日祭祀は「春季皇霊祭」、秋分の日祭祀は「秋季皇霊祭」と呼ばれる。始まったのは1878年（明治11年）の秋分の日。  |
| しんでんさい<br>神殿祭           | 春分の日と秋分の日に神殿で執行される、天神地祇に感謝を捧げる祭祀。春分の日祭祀は「春季神殿祭」、秋分の日祭祀は「秋季神殿祭」と呼ばれる。始まったのは1878年（明治11年）の秋分の日。  |
| じんむてんのうさい<br>神武天皇祭      | 神武天皇（彦火火出見）の命日とされる4月3日に皇霊殿で執行される祭祀。始まったのは1870年（明治3年）。   |
| かんなめさいかしどころ<br>神嘗祭 賢所の儀 | 神嘗祭は、伊勢神宮で10月15日から17日にかけて執行される、新穀（その年に収穫した穀物）を神に奉る祭祀（Q 2.7.12 参照）。神嘗祭賢所の儀は、10月17日に賢所で執行される、稲を奉る祭祀。神嘗祭自体は古くから続いている祭祀であるが、賢所の儀が始まったのは1871年（明治4年）。 |
| にいなめさい<br>新嘗祭           | 11月23日に執行される、天皇が神嘉殿に神を招き、新穀で作られた神饌や神酒を奉り、また自身もそれらを飲食する祭祀。第2.9節で詳述する。  |

#### Q 2.8.6 宮中祭祀の小祭って、どんなものがあるんですか。

現在、宮中祭祀の小祭としては、次のようなものがあります。

|                    |  |
|--------------------|--|
| さいたんさい<br>歳旦祭      | 元旦の早朝に宮中三殿で執行される、神々に加護を祈願する祭祀。かつては「年頭祭」と呼ばれて正月の三箇日に執行されていたが、1909年（明治42年）からは天皇が拝礼するのは元旦のみとなった。元旦の午前5時半に、天皇は、神嘉殿の南庭で四方の神々を遥拝する「四方拝」と呼ばれる儀式を執行し、そのち歳旦祭の拝礼をする。 |
| としごいのまつり<br>祈年祭    | 2月17日に宮中三殿で執行される、その年の五穀豊穰を祈願する祭祀。7世紀後半に始まったが、1467年（応仁元年）に始まった応仁の乱のときに廃絶され、1869年（明治2年）2月28日に再興。翌年からは2月4日に執行されていたが、1914年（大正3年）から2月17日となった。                   |
| かしどころみかくら<br>賢所御神楽 | 12月中旬に神楽舎で奉仕される、天照大神に御神楽（歌と舞）を捧げる祭祀。始まったのは1002年（長保4年）。当初は隔年で奉仕されていたが、1077年（承暦元年）から毎年の奉仕となった。   |

- 天長祭** <sup>てんちようせい</sup> 天皇の誕生日に宮中三殿で執行される祭祀。戦前は、天皇誕生日は「天長節」と呼ばれ、天長祭も「天長節祭」と呼ばれた。始まったのは1870年（明治3年）。現在は12月23日に執行されている。
- 先帝前三代例祭** <sup>せんていぜんさんだいれいさい</sup> 2代前から4代前までの天皇を慰霊する、それぞれの天皇の命日に皇霊殿で執行される祭祀。始まったのは1878年（明治11年）。現在は、12月25日に「大正天皇例祭」、7月30日に「明治天皇例祭」、1月30日に「孝明天皇例祭」が執行されている。

#### Q 2.8.7 天皇は、どんな装束を着て宮中祭祀を執行するんですか。

天皇が宮中祭祀を執行するときに着用するのは、多くの場合、「黄櫨染の御袍」と呼ばれる装束です。

多くの宮中祭祀において、天皇と皇太子は、「袍」と呼ばれる上着を着用します。ただし、天皇と皇太子とでは、袍の色が異なります。

黄櫨染の御袍は、黄櫨を原料とする黄褐色の染料で染められています。黄櫨というのはハゼノキというウルシ科の樹木のことで、黄櫨染というのは、その染料の色のことです。また、黄櫨染の御袍には、桐、竹、鳳凰、麒麟が文様として織り込まれています<sup>23</sup>。

ちなみに、多くの宮中祭祀において皇太子が着用する装束は、「黄丹の袍」と呼ばれます。この袍は、ベニバナの花とクちなシの果実を原料とする、黄色を帯びた赤色の染料で染められています。黄丹というのは、その染料の色のことです。また、黄丹の袍には、鴛鴦が文様として織り込まれています。

#### Q 2.8.8 警蹕って何ですか。

「警蹕」<sup>けいひつ</sup><sup>24</sup>というのは、天皇が出入りするとき、貴人が通行するとき、祭祀のときなどに、人々に注意を促すために声を掛けること、またはその声のことです。

## 2.9 新嘗祭

#### Q 2.9.1 新嘗って何ですか。

「新嘗」というのは、新穀（その年に初めて収穫された穀物）を神に供える、という意味の漢語です。

「嘗」<sup>じょう</sup><sup>25</sup>という漢字には、「舌でなめる」という意味もありますが、穀物を祖先の霊に供える秋の祭り、という意味もあります。同様の冬の祭りは「蒸」と呼ばれ、それらを合わせた「嘗蒸」という熟語もあります。

日本語では通常、「新嘗」は、「にいなえ」または「にいなめ」と訓読されます。「にいなえ」は、「新の饗」が短縮されたもので、「饗」というのは、客人をもてなすためのご馳走のことです。「にいなめ」は、「にいなえ」がさらに変化したものと考えられます。

#### Q 2.9.2 新嘗祭って何ですか。

「新嘗祭」というのは、新穀で作られた神饌や神酒を神に奉る祭祀のことです。

新嘗祭は、全国各地の多くの神社で執行されている祭祀です。そして皇居でも、この祭祀が天皇によって親祭されています。本書では、「新嘗祭」という言葉を、特に断らない限り、皇居で執行される新嘗祭に限定して使うことにします。

<sup>23</sup> 鳳凰と麒麟は、中国においてめでたいとされる空想上の動物。鳳凰は鳥で、麒麟は鹿に似た動物。

<sup>24</sup> 「警蹕」には、「けいひち」という読み方もある。

<sup>25</sup> 「嘗」は、漢音が「ジョウ」で、呉音が「ジョウ」。

## Q 2.9.3 卯の日って、どういう日なんですか。

「卯の日」というのは、十二支が卯である日のことです。

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥という12の動物は、「十二支」と呼ばれます。そして、年、月、日には、十二支のそれぞれが順番に割り当てられます。たとえば、2017年（平成29年）には酉が割り当てられていて、その年の1月には丑が割り当てられていて<sup>26</sup>、その月の1日には子（こ）が割り当てられています。

十二支のそれぞれは、1か月のうちに2回しか割り当てがない場合と、3回目の割り当てがある場合とがあります。2回しか割り当てがない月については、第1の日を「上の○の日」、第2の日を「下の○の日」と呼びます。それに対して、3回目の割り当てがある月については、第1の日は同じですが、第2の日を「中の○の日」、第3の日を「下の○の日」と呼びます。たとえば、未（み）の日が2回ある月については、第1の未の日を「上の未の日」、第2の未の日を「下の未の日」と呼ぶのに対して、未の日が3回ある月については、第2の未の日を「中の未の日」、第3の未の日を「下の未の日」と呼びます。

## Q 2.9.4 新嘗祭が執行される祭日って、何月何日ですか。

新嘗祭が執行される祭日は、毎年、11月23日です（ただし、この祭祀が終了するのは翌日の午前1時ごろ）。また、新嘗祭の前日の22日には、「鎮魂の儀」と呼ばれる祭祀が執行されます（この祭祀については、第2.10節で説明します）。

新嘗祭が11月23日に執行されるようになったのは、日本で太陽暦が導入された1873年（明治6年）以降のことです。それ以前は、11月の第2の卯の日（卯の日が11月に2回ある場合は下の卯の日、3回ある場合は中の卯の日。Q 2.9.3 参照）に執行されていました。23日が祭日になった理由は、1873年11月の第2の卯の日が23日だったからです。

## Q 2.9.5 新嘗祭って、何時ごろに執行されるんですか。

新嘗祭は、同じ祭祀を2回繰り返して執行します。1回目は午後6時から午後8時ごろまでで、2回目は午後11時から翌日の午前1時ごろまでです。

午後6時から午後8時ごろまでの祭祀は「夕の儀」と呼ばれ、午後11時から翌日の午前1時ごろまでの祭祀は「暁の儀」と呼ばれます。

## Q 2.9.6 新嘗祭って、皇居の中のどこで執行されるんですか。

新嘗祭が執行される場所は、神嘉殿（Q 2.2.7 参照）です。

神嘉殿は、新嘗祭のみのために存在する建物で、新嘗祭のとき以外、その中には何もありません。

## Q 2.9.7 新嘗祭を執行するために、神嘉殿の中ではどんな準備が必要なんですか。

新嘗祭のために神嘉殿の中に準備されるもののうちで重要なものとしては、神がそこで寝る寝座、神が着座する神座、そして天皇が着座する御座があります。神がそこで寝る寝座が「第一神座」と呼ばれ、神が着座する神座が「第二神座」と呼ばれることもあります。

寝座は、長方形の敷物を何重にも重ねたもので、その上に衾（掛け布団）が掛けられます。寝座は長辺が南北方向を向くように敷かれ、枕は南側に置かれます。神座を構成している敷物は、北側が段になっていて、そこに一足の沓（靴）が置かれます。寝座に置かれる枕は「坂枕」と呼ばれる、断面が直角三角形の三角柱を横に寝かせた形のもので、

神座は縁が柿色の短帖（長さの短い敷物）、御座は縁が白色の半帖（半分の長さの敷物）です。神座と御座は、寝座の東側に、三尺ほどを隔てて向かい合わせに敷かれます。また、御座は伊勢神宮の方角（現在の皇居の場合は南西）に向けて、神座はその逆方向に向けて敷かれますので、枕が南を向いている寝座に対しては斜めの方角を向くこととなります。

<sup>26</sup>1年 は12か月なので、月に対する十二支の割り当てはどの年も同じ。



Q 2.9.8 新嘗祭で神に供えられる神饌って、どこで調理されるんですか。

新嘗祭で神に供えられる神饌を調理する場所は、膳舎（Q 2.2.7 参照）です。

宮中祭祀において神に供えられる神饌は、通常は御饌殿で調理されるのですが、新嘗祭だけは例外で、御饌殿ではなく、膳舎が使われます。

Q 2.9.9 新嘗祭では、どんな神饌が神に供えられるんですか。

新嘗祭では、御飯、魚介類、果物、汁物が神饌として神に供えられます。

神に供えられる御飯には4種類のものがあります。米と粟のそれぞれによる、蒸した御飯と炊いた御飯という4種類です。蒸した御飯は「強飯と呼ばれ、炊いた御飯は「御粥」と呼ばれます。使われる米と粟は、全国の農家が献納した新穀です。また、皇居内の水田（Q 2.2.3 参照）で収穫された米も使われます。

魚介類は、甘塩（塩気の薄い塩）で締めた「鮮物」と呼ばれるものと、乾燥させた「干物」と呼ばれるものに分類されます。

鮮物は、鯛、烏賊、鮑、鮭の4種類で、いずれも三枚に下ろして、背部を短冊の形に切って、「鮮物筥」と呼ばれる四つの筥に一品ずつ納められます。干物は、干鯛、堅魚、蒸鮑、干鰯の4種類で、「干物筥」と呼ばれる四つの筥に一品ずつ納められます。

果物は、干柿、搗栗、生栗、干棗の4種類で、「御菓子筥」と呼ばれる四つの筥に一品ずつ納められます。

汁物としては、鮑の汁漬（煮付け）、海藻（ワカメ）の汁漬、鮑の羹（吸物）、海松（緑藻類の海藻）の羹が供えられます。

Q 2.9.10 新嘗祭では、どんな神酒が神に供えられるんですか。

新嘗祭では、白酒と黒酒が神酒として神に供えられます。

白酒というのは甘酒のことで、黒酒というのは、臭木という樹木の焼灰を白酒に混ぜたものことです。

Q 2.9.11 神饌行立って何ですか。

「神饌行立」というのは、掌典などが列を作って神饌や神酒などを運ぶことです。

新嘗祭の場合、神饌が調理される場所は膳舎ですので、膳舎を出発して神嘉殿に至る神饌行立が実施されます。

神饌行立のとき、先頭の掌典は、「オーシー」という警蹕（Q 2.8.8 参照）を唱えます。そうすると、それを合図にして、楽師たちが神楽歌を奏します。天皇は、神楽歌が始まったのち、御座に着座して、新嘗祭を執行します。

Q 2.9.12 天皇は、どんな装束を着て新嘗祭を執行するんですか。

新嘗祭のときに天皇が着用するのは、純白の生絹（練っていない生糸の織物）のできた装束です。

Q 2.8.7 で述べたように、多くの場合に天皇が宮中祭祀で着用する装束は、「黄櫨染の御袍」と呼ばれるものです。しかし、新嘗祭ではこの装束は着用しません。

Q 2.9.13 天皇は、新嘗祭でどんなことをするんですか。

天皇が新嘗祭ですることのうちで中心となるのは、「御親供」と呼ばれることと、「御直会」と呼ばれることです。

「御親供」というのは、天皇が自ら神饌を神に供えることです。天皇は、御座（Q 2.9.7 参照）

に正座して、ピンセットのような形をした竹製の箸を使って、「窪手」と呼ばれる筥に納められた神饌を、「枚手」と呼ばれる取り分け皿に盛り付けます。窪手と枚手はどちらも、柏の葉を何枚も重ねて、細い竹で結ぶことによって作られています。御親供が終わると、天皇は、「御告文」と呼ばれる言葉を述べます。

「御直会」というのは、天皇が神に供えた神饌のうちの米の御飯と粟の御飯、そして白酒と黒酒を、天皇自身が飲食することです。天皇は、御直会に先立って、拍手を三度打って、称唯をします。「称唯」というのは、「オー」という低い声で、目上の者に対して返事をするのです。

#### Q 2.9.14 新嘗祭の祭神って、誰ですか。

新嘗祭の祭神は、天照大神と天神地祇であると考えられています。

ただし、新嘗祭の祭神が天照大神と天神地祇であると考えられるようになったのは、古代天皇制が確立したのちのことです。それ以前は、「産霊」と呼ばれる、天地の万物を産む神、あるいは、「穀霊」と呼ばれる、穀物の中に宿る神が、新嘗祭の祭神だったのではないかと考えられています<sup>27</sup>。

## 2.10 鎮魂の儀

### Q 2.10.1 鎮魂って何ですか。

「鎮魂」<sup>28</sup>というの、魂を体内に安定させ、さらにその活力を振り起こすことです。

古代の日本人は、人間の魂は、身体から遊離したり、活力を失ったりしやすい、という認識を持っていました。鎮魂の背景には、このような認識があると考えられます。

### Q 2.10.2 鎮魂の儀って何ですか。

「鎮魂の儀」というのは、新嘗祭の前日（賀の日、現在は11月22日）に執行される、天皇、皇后、皇太子、皇太子妃について、彼らに対する鎮魂をする祭祀のことです。「鎮魂祭」と呼ばれることもあります。

### Q 2.10.3 鎮魂の儀って、何時ごろに執行されるんですか。

鎮魂の儀は、午後5時に始まります。終了するのは午後7時ごろです。

### Q 2.10.4 八神って何ですか。

「八神」というのは、天皇を守護するとされる八柱の神々のことです。

八神を構成している八柱の神々は、神産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大宮売神、御食津神、事代主神です。

### Q 2.10.5 鎮魂の儀って、どこで執行されるんですか。

鎮魂の儀が執行される場所は、綾綺殿（Q 2.2.7 参照）です。

綾綺殿は、天皇と皇后が着替えをするための建物ですので、そこには神が常に祀られているわけではありません。ですから、鎮魂の儀を執行するときには、その冒頭で神々を招いて、最後にそれらの神々を送ります。鎮魂の儀のために招かれる神は、八神（Q 2.10.4 参照）と大直日神です。大直日神は、凶事を吉事に転ずるとされる神です。

皇居が京都にあったときには、鎮魂の儀は、「小御所」と呼ばれる建物で執行されていました。

<sup>27</sup> [村上, 1977], p. 19.

<sup>28</sup> 「鎮魂」には、「みたまふり」という読み方もある。

Q 2.10.6 鎮魂の儀には、天皇、皇后、皇太子、皇太子妃も奉仕するんですか。

いいえ。鎮魂の儀に奉仕するのは、掌典、内掌典、そして楽師（宮内庁式部職楽部の職員。音楽を奏でたり舞を舞ったりする）です。皇族はこの祭祀には奉仕しません。

しかし、鎮魂の儀というのは、天皇、皇后、皇太子、皇太子妃に対する鎮魂を目的とするものですから、この祭祀では、彼らの身代わりとなる物品が重要な役割を果たします。その物品というのは、「御衣」と呼ばれる着物と、「御玉緒」と呼ばれる糸です。

Q 2.10.7 八代物って何ですか。

「八代物」というのは、鎮魂の儀において神々に供えられる、神饌以外の 8 種類の物品のことです。

八代物は、太刀が一口、弓が一張、矢が二隻、鈴が二十口、鉄製の鐺（揺り動かすと音を発する器具）が二十口、太い糸で織った絹の布が一疋、木綿が五斤、麻が十斤と定められています。

Q 2.10.8 鎮魂の儀って、どんなことをする祭祀なんですか。

鎮魂の儀は、次のような次第で執行されます。

- (1) 修祓をする。
- (2) 神々（八神（Q 2.10.4 参照）と大直日神（Q 2.10.5 参照））を招く。
- (3) 神饌と八代物（Q 2.10.7 参照）を神々に供える。
- (4) 掌典長が祝詞を奏する。
- (5) 「ケーヒー」という警蹕（Q 2.8.8 参照）とともに、天皇の御衣が入った箱と御玉緒が入った箱を綾綺殿に運んで来て、綾綺殿の東端に置かれた案の上に安置する。
- (6) 掌典たちが八開手を打つ（八回の拍手を四回繰り返す）。
- (7) 楽師による「鎮魂歌」という歌が流れる中で、「糸結の儀」と「御衣振動の儀」と呼ばれる儀式を執行する。糸結びの儀については Q 2.10.9 で、御衣振動の儀については Q 2.10.10 で説明する。
- (8) 警蹕とともに、御衣が入った箱と御玉緒が入った箱を綾綺殿から運び出す。
- (9) 皇后、皇太子、皇太子妃のおのおのについても、その御衣と御玉緒を綾綺殿に運んで来て、同じ儀式で鎮魂をする。
- (10) 楽師が「大直日歌」という歌と「倭舞」という舞（大和地方の舞）を奏する。
- (11) 神々を送る。

Q 2.10.9 糸結びの儀って、どんな儀式なんですか。

糸結の儀は、掌典が御玉緒を 10 回結ぶという儀式です。

鎮魂の儀のとき、綾綺殿の前庭には、「宇気槽」と呼ばれるヒノキ製の中空の箱が置かれています。糸結びの儀のときには、一人の内掌典が鉾を手にとって、その上に昇ります。糸を結ぶ掌典は、糸を一回結ぶたびに、案を打ちます。すると、その合図によって内掌典は手に持った鉾で宇気槽を衝きます。

内掌典が宇気槽の上に立って鉾でそれを衝くという糸結びの儀における所作は、天照大神が天の岩屋に籠ったときに、天鈿女命という女神が天の岩屋の前で踊ったという記紀神話のエピソード（Q 2.4.4 参照）に由来するとされています。

糸結びの儀は、身体から遊離しようとする魂を体内に安定させるための呪術的な儀式です。

Q 2.10.10 御衣振動の儀って、どんな儀式なんですか。

御衣振動の儀は、掌典が御衣を 10 回左右にゆらゆらと振り動かすという儀式です。

御衣振動の儀は、魂の活力を振り起こすための呪術的な儀式です。

## 第3章 概要

### 3.1 皇位継承儀礼

#### Q 3.1.1 皇位継承儀礼って何ですか。

「皇位継承儀礼」というのは、皇位の継承に伴う各種の儀礼のことです。「即位儀礼」と呼ばれることもあります。

天皇が退位または崩御した場合には、その後継者が次の代の天皇に即位することになります。天皇の即位、すなわち皇位の継承は、さまざまな儀礼を伴います。それらの儀礼は、「皇位継承儀礼」と総称されます。

皇位継承儀礼は、次の3種類のものに分類することができます。

- 踐祚せんそに関する儀礼
- 即位礼
- 大嘗祭だいじょうさい

踐祚とは何かということについては、Q 3.1.2 で説明します。

#### Q 3.1.2 踐祚って何ですか。

「踐祚」というのは、天皇の後継者が天皇の地位を先代の天皇から継承することです。

古代においては踐祚が同時に即位でもあったのですが、桓武天皇（山部）のときから、踐祚と即位は別の日に儀礼が実施されることになりました。桓武天皇は、781年（天応元年）4月5日に踐祚して、その10日後の4月15日に即位しています。

1889年（明治22年）に制定された旧皇室典範は、第10条で、「天皇崩スルトキ八皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」と定めていましたが、現行の皇室典範（Q 2.1.10 参照）は、第4条で、「天皇が崩じたときは、皇嗣が、直ちに即位する」と定めていて、「踐祚」という言葉を使っていません。つまり、現行の皇室典範は、踐祚を含む広い意味で「即位」という言葉を使っているということです。

しかし、踐祚の儀礼と、狭い意味での即位の儀礼とを別の日に実施するという慣例は、現在も守られています。1989年（昭和64年）1月7日に昭和天皇（裕仁）が崩御したとき、その直後に実施されたのは踐祚の儀礼のみで、狭い意味での即位の儀礼が実施されたのは1990年（平成2年）11月12日のことでした。

#### Q 3.1.3 踐祚に関連する儀礼には、どんなものがあるんですか。

踐祚に関連する儀礼としては、次のようなものがあります。

剣璽等承継の儀けんじとうしょうけいぎ

Q 3.1.4 で説明する。

賢所の儀かしどころぎ

賢所（Q 2.2.6 参照）で掌典長（Q 2.8.3 参照）が天皇の踐祚を天照大神に報告する祭祀。

皇霊殿神殿に奉告の儀ほうこくぎ

皇霊殿と神殿のそれぞれ（Q 2.2.5 参照）で、掌典長が天皇の踐祚をそれぞれの社殿の祭神に報告する祭祀。

即位後朝見の儀ちようけんぎ

Q 3.1.5 で説明する。

#### Q 3.1.4 剣璽等承継の儀って、どういう儀礼なんですか。

剣璽等承継の儀は、天皇が退位または崩御した場合に、その直後に実施される、天皇の後継者が、草薙剣（Q 2.6.4 参照）、八尺瓊勾玉（Q 2.6.5 参照）、御璽、国璽を受け継ぐ、という儀礼です。

御璽ぎよじというのは、「天皇御璽」と刻まれた印章のことで、法律、条約、信任状などの公文書に捺されるものです。そして国璽こくじというのは、「大日本国璽」と刻まれた印章のことで、勲記（叙勲者に授与される証書）に捺されるものです。

1989年(昭和64年)1月7日午前6時33分に昭和天皇(裕仁)が崩御したときの剣璽等承継の儀は、その日の午前10時から皇居の正殿の松の間(Q 2.2.4 参照)で実施されました。

Q 3.1.5 即位後朝見の儀って、どういう儀礼なんですか。

即位後朝見の儀は、踐祚した天皇が三権の長や地方自治体の代表などに対して「お言葉」を述べ、それに対して総理大臣が「奉答文」を述べる、という儀礼です。

今上天皇(明仁)が踐祚したのちの即位後朝見の儀は、1989年(平成元年)1月9日午前11時から皇居宮殿の松の間で実施されました。「奉答文」を述べた当時の総理大臣は、竹下登でした。

Q 3.1.6 即位礼って、どういう儀礼なんですか。

即位礼は、天皇が自身の即位を国の内外に宣言するという儀礼です。現行の皇室典範では「即位の礼」と呼ばれています。

即位礼は、次の儀礼から構成されます。

|                 |   |
|-----------------|---|
| 即位礼当日賢所大前の儀     | 即位礼正殿の儀が実施される日の朝に、天皇が賢所で天照大神に御告文を奏するという儀礼。                            |
| 即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀 | 即位礼正殿の儀が実施される日の朝に、天皇が皇霊殿と神殿のそれぞれで神々に御告文を奏するという儀礼。                     |
| 即位礼正殿の儀         | Q 3.1.7 で説明する。  |
| 祝賀御列の儀          | 即位礼正殿の儀を終えた天皇と皇后が、沿道の人々からの祝意を受けながら自動車で移動するという儀礼。今上天皇の即位礼のときに初めて実施された。 |
| 饗宴の儀            | 天皇と皇后が外国の元首などを招いて開催する饗宴。今上天皇の即位礼のときは、即位礼正殿の儀の当日から4日間にわたって実施された。       |

Q 3.1.7 即位礼正殿の儀って、どういう儀礼なんですか。

即位礼正殿の儀は、皇居の正殿の松の間において、天皇が自身の即位を国の内外に宣言し、それに対して総理大臣が「寿詞」(天皇に対する祝いの言葉)を述べる、という儀礼です。

今上天皇が即位したときの即位礼正殿の儀は、1990年(平成2年)11月12日に皇居の正殿で実施されました。このときの天皇の装束は、黄櫨染の御袍(Q 2.8.7 参照)でした。「寿詞」を述べた当時の総理大臣は、海部俊樹でした。

即位を国の内外に宣言する儀礼が東京の皇居で実施されるのは、今上天皇のときが初めてのことで、それ以前は、京都にある「紫宸殿」という建物で実施されていました。「即位礼正殿の儀」というこの儀礼の名称も、今上天皇のときに初めて使われたもので、この儀礼が紫宸殿で実施されていたときは、「紫宸殿の儀」と呼ばれていました。

Q 3.1.8 高御座って何ですか。

「高御座」というのは、即位礼正殿の儀で天皇がその中に着座する、八角形の建物のような形状を持つ座席のことです。

即位礼正殿の儀では、高御座の向かって右側に、「御帳台」と呼ばれる、高御座と同じような形状を持つ座席が設置され、そこには皇后が着座します。

今上天皇が即位したときの即位礼正殿の儀で使われた高御座と御帳台は、京都から運ばれてきたもので、大正天皇(嘉仁)と昭和天皇(裕仁)が即位したときの紫宸殿の儀でも使われたものでした。

## 3.2 大嘗祭とは何か

### Q 3.2.1 大嘗祭って何ですか。

「大嘗祭」<sup>だいじょうさい</sup><sup>1</sup>というのは、皇位継承儀礼を構成する儀礼の一つとして、天皇が即位したのちに最初に執行する新嘗祭（第2.9節参照）のことです。「大嘗会」<sup>だいじょうえ</sup>、「踐祚大嘗祭」<sup>せんそ</sup>などと呼ばれることもあります。

Q 3.1.1 で述べたように、皇位の継承に伴う各種の儀礼は、「皇位継承儀礼」と呼ばれます。大嘗祭というのは、皇位継承儀礼の一環として執行される新嘗祭のことですから、その祭祀の内容は、基本的には例年の新嘗祭と同じです。ただし、大嘗祭は、例年の新嘗祭よりも大きな規模で実施されます。

大嘗祭は、さまざまな儀礼から構成されます（大嘗祭を構成する儀礼については、Q 3.2.4 で詳述します）。「大嘗祭」という言葉は、それらの儀礼のうちで最も重要なものである「大嘗宮」<sup>だいじょうきゅう</sup>の儀」と呼ばれる祭祀のみを指して使われることもあります。すなわち、「大嘗祭」という言葉には、大嘗宮の儀という狭い意味と、それを含む各種の儀礼の総称という広い意味があるということです。

古い時代においては、「大嘗祭」という言葉は、「宮中での新嘗祭」という意味で使われていて、皇位継承儀礼としての大嘗祭は「踐祚大嘗祭」と呼ばれていました<sup>2</sup>。例年の新嘗祭を「新嘗祭」、皇位継承儀礼としての新嘗祭を「大嘗祭」と呼ぶ、という言葉の使い分けが成立したのは、日本が律令制度を導入した、大化改新から奈良時代に至るところであろうと考えられています<sup>3</sup>。

### Q 3.2.2 齋田って何ですか。

「齋田」<sup>さいでん</sup>というのは、神に供える神饌を作るための稲を栽培する耕地のことです。

大嘗祭で神に供える神饌を作るための稲は、齋田として定められた耕地において栽培されます。大嘗祭のための齋田については、第3.3節で、もう少し詳しく説明することにしたいと思います。

### Q 3.2.3 大嘗宮って何ですか。

「大嘗宮」<sup>だいじょうきゅう</sup>というのは、大嘗祭を構成する儀礼のうちで最も重要なものである「大嘗宮」<sup>だいじょうきゅう</sup>の儀」と呼ばれる祭祀を執行するための、様々な建物から構成される建物群のことです。

Q 2.9.6 で述べたように、新嘗祭は「神嘉殿」<sup>しんかでん</sup>と呼ばれる建物（Q 2.2.7 参照）で執行される祭祀ですが、大嘗祭が執行される場所は、神嘉殿ではなく、大嘗祭のためだけに設置される、「大嘗宮」と呼ばれる仮設の建物群です。大嘗宮については、第3.4節で、もう少し詳しく説明することにしたいと思います。

### Q 3.2.4 大嘗祭って、どんな儀礼から構成されるんですか。

大嘗祭を構成する儀礼のうちで主要なものとしては、次のようなものがあります。

|                                   |  |
|-----------------------------------|--|
| さいでんてんてい<br>齋田点定の儀                | 占いによって齋田の場所を定める儀礼。Q 3.3.2 で詳述する。   |
| だいじょうきゅうじちんさい<br>大嘗宮地鎮祭           | 大嘗宮を建てる土地の神を祀る祭祀。  |
| さいでんぬいぼ<br>齋田抜穂の儀                 | 齋田から稲穂を抜き取る儀礼。Q 3.3.6 で詳述する。   |
| だいじょうさいぜんいちじつみたましずめ<br>大嘗祭前一日鎮魂の儀 | 大嘗宮の儀の前日に執行される、天皇、皇后、皇太子、皇太子妃について、彼らに対する鎮魂 <sup>みたましずめ</sup> をする祭祀。内容は、新嘗祭の前日に執行される鎮魂 <sup>みたましずめ</sup> の儀（第2.10節参照）と同じ。 |
| だいじょうきゅう<br>大嘗宮の儀                 | 天皇が大嘗宮において御親供 <sup>ごしんく</sup> と御直会 <sup>おんなおらい</sup> をする祭祀（御親供と御直会   |

<sup>1</sup> 「大嘗祭」には、「おおなめまつり」、「おおにえのまつり」、「おおんべのまつり」などの読み方もある。

<sup>2</sup> [真弓,1990], pp. 98–99.

<sup>3</sup> [田中,1975a], pp. 19–24.

についてはQ 2.9.13を参照)。「大嘗祭」という言葉は、この祭祀のみを指す狭い意味で使われることもある。第3.5節で詳述する。

#### 大嘗の儀

大嘗祭に参列した人々が、新穀から作られた酒や料理を、天皇とともに飲食する儀礼。今上天皇(明仁)が即位したときは、1990年(平成2年)11月24日に1回目と2回目、25日に3回目の大嘗の儀が、皇居宮殿の豊明殿(Q 2.2.4参照)で実施された。

#### Q 3.2.5 諒闇って何ですか。

「諒闇」というのは、天皇が父または母を亡くした場合に喪に服す、1年間の期間のことです。

#### Q 3.2.6 大嘗祭って、いつ執行されるんですか。

大嘗祭は、原則的には、践祚が7月以前ならばその年に執行され、8月以降ならば翌年に執行されます。ただし、それが諒闇(Q 3.2.5参照)の期間中ならば、諒闇が明けたのちに執行されます。

今上天皇(明仁)が践祚したのは1989年(昭和64年)1月7日でしたが、この践祚は、今上天皇の父である昭和天皇(裕仁)の崩御によるものでしたので、大嘗祭が執行されたのは、諒闇が明けたのちの1990年(平成2年)でした。

### 3.3 斎田

#### Q 3.3.1 悠紀とか主基とって、何のことですか。

「悠紀」と「主基」というのは、大嘗祭の斎田(Q 3.2.2参照)が位置する二つの地方のそれぞれのことです。

大嘗祭で神に供える神饌を作るための稲は、「悠紀」と「主基」と呼ばれる二つの異なる地方のそれぞれに位置する斎田で栽培されます。歴史的には、悠紀は都よりも東の地域から選ばれ、主基は都よりも西の地域から選ばれるというのが原則でしたが、今上天皇(明仁)の大嘗祭からは、新潟県、長野県、静岡県(三県)で日本を東西に二分して、悠紀はそれらの三県を含む東の地域から選ばれ、主基は西の地域から選ばれることになりました。

#### Q 3.3.2 斎田点定の儀って、どういう儀礼なんですか。

斎田点定の儀は、大嘗祭で神に供える神饌を作るための稲を栽培する斎田の地方を、占いによって定める儀礼です。この儀礼は、「国郡卜定」と呼ばれることもあります。

斎田点定の儀によって定められる地方の範囲は、歴史的には郡でしたが、大正天皇(嘉仁)の大嘗祭からは道府県となりました。

ちなみに、大正天皇以降の斎田点定の儀によって定められた悠紀と主基は、次のとおりです。

|          | 主基  | 悠紀  |
|----------|-----|-----|
| 大正天皇(嘉仁) | 香川県 | 愛知県 |
| 昭和天皇(裕仁) | 福岡県 | 滋賀県 |
| 今上天皇(明仁) | 大分県 | 秋田県 |

今上天皇(明仁)の大嘗祭における斎田点定の儀は、1990年(平成2年)2月8日に、宮中三殿の神殿の前に仮設された幄舎(テントのような建物)で実施されました。

#### Q 3.3.3 斎田点定の儀では、占いの方法としてどんなものが使われるんですか。

斎田点定の儀において使われる占いの方法は、「龜卜」と呼ばれるものです。

亀トというのは、亀の甲羅を焼いて、その表面にできた亀裂によって神意を判断するという占いの方法のことで、齋田点定の儀では、上溝桜（古名は波々迦）という桜の一種を燃やして、それに亀の甲羅をかざすことによって齋田を占います。

#### Q 3.3.4 抜穂使って何ですか。

「抜穂使<sup>ぬいぼのつかい</sup>」というのは、齋田抜穂の儀<sup>さいてんぬいぼぎ</sup>を監督させるために天皇が悠紀と主基のそれぞれに派遣する使者のことで、齋田抜穂の儀については、Q 3.3.6 で説明します。

#### Q 3.3.5 大田主って何ですか。

「大田主<sup>おおたぬし</sup>」というのは、大嘗祭で神に供える神饌を作るための稲を栽培する齋田の所有者のことです。

#### Q 3.3.6 齋田抜穂の儀って、どういう儀礼なんですか。

齋田抜穂の儀<sup>さいてんぬいぼぎ</sup>は、齋田から抜穂（Q 2.7.13 参照）をするという儀礼です。

齋田抜穂の儀に際しては、「齋場<sup>さいじょう</sup>」と呼ばれる、儀礼のための施設が仮設されます。齋場の建物については、「黒木<sup>くろき</sup>」と呼ばれる、皮を削らない丸木の材木を使って建てられるという伝統がありました。今上天皇（明仁<sup>あきひと</sup>）の大嘗祭では、天幕が使われました。

齋場に建てられる建物の一つは「八神殿<sup>はっしんでん</sup>」とよばれ、そこでは神が祀られます。八神殿の祭神は、「御膳八神<sup>みかしわではっしん</sup>」または「御饌八神<sup>みけはっしん</sup>」と呼ばれる、御歳神<sup>みとしのかみ</sup>、高御魂神<sup>たかみむすびのかみ</sup>、庭高日神<sup>にわたかつひのかみ</sup>、大御食神<sup>おおみけつかみ</sup>、大宮女神<sup>おおみやのめのかみ</sup>、事代主神<sup>ことしろぬしのかみ</sup>、阿須波神<sup>あすはのかみ</sup>、波比伎神<sup>はひきのかみ</sup>という8柱の神々です。

齋田抜穂の儀の内容は、次のようなものです。

- (1) 抜穂使<sup>ぬいぼのつかい</sup>が八神殿の前で祝詞を奏する。
- (2) 抜穂使<sup>おおたぬし</sup>が大田主に抜穂を命じる。
- (3) 大田主が、「奉耕者<sup>ほうこうしゃ</sup>」と呼ばれる人々を率いて齋田で抜穂をする。
- (4) 齋場の中央に置かれた案の上に、大田主が抜穂を載せる。
- (5) 抜穂使が抜穂を検分する。
- (6) 「稲実殿<sup>いなのみとの</sup>」と呼ばれる建物に抜穂を収める。

今上天皇（明仁<sup>あきひと</sup>）の大嘗祭における齋田抜穂の儀は、悠紀（秋田県）では1990年（平成2年）9月28日に、主基（大分県）では1990年（平成2年）10月10日に実施されました。

### 3.4 大嘗宮

#### Q 3.4.1 大嘗宮を構成してる建物って、どんなものがあるんですか。

Q 3.2.3 で述べたように、大嘗宮<sup>だいじょうきゅう</sup>というのは様々な建物から構成される建物群ですが、それらのうちで最も重要なものは、次の三つです。

悠紀殿<sup>ゆきでん</sup> 「悠紀殿供饌の儀<sup>ゆきでんきょうせんぎ</sup>」と呼ばれる祭祀を執行するための建物。

主基殿<sup>すきでん</sup> 「主基殿供饌の儀<sup>すきでんきょうせんぎ</sup>」と呼ばれる祭祀を執行するための建物。

廻立殿<sup>かいりゅうでん</sup> 「廻立殿の儀<sup>かいりゅうでんぎ</sup>」と呼ばれる祭祀を執行するための建物。廻立殿の儀についてはQ 3.5.4 で詳述する。

悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀は、ともに、大嘗宮<sup>だいじょうきゅう</sup>の儀を構成している一部分です。大嘗宮の儀については、第3.5節で詳述します。

<sup>4</sup> 「抜穂」には、「ぬきぼ」または「ぬきほ」という読み方もある。



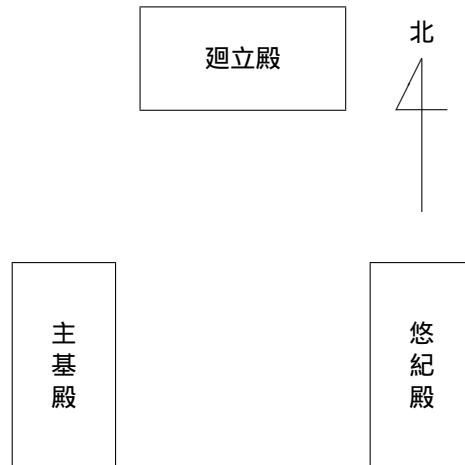


図 3.1: 悠紀殿と主基殿と廻立殿の位置関係

Q 3.4.2 悠紀殿と主基殿と廻立殿って、どんな位置関係で建てられるんですか。

悠紀殿と主基殿は、東西方向に並べて建てられます。悠紀殿は東で、主基殿は西です。廻立殿は、それらの中間点の真北に建てられます。したがって、それらの三つの建物の位置関係は、図 3.1 のようになります。

ただし、江戸時代の一時期には、廻立殿は、悠紀殿や主基殿の東北の位置に建てられました。また、明治天皇（睦仁）の大嘗祭では、悠紀殿が西に、主基殿が東に建てられました<sup>5</sup>。

Q 3.4.3 大嘗宮にも鳥居はありますか。

はい。大嘗宮には、少なくとも 5 か所に鳥居（Q 1.4.15 参照）が建てられます。

悠紀殿と主基殿は、柴垣によって長方形の形に囲まれます。また、悠紀殿と主基殿の間を通る南北の線上にも柴垣が建てられます。長方形の各辺の中央と、南北の線の中央には門が設けられ、それらの門には鳥居が建てられます。

なお、「大嘗宮」という言葉は、「悠紀殿と主基殿を囲む柴垣の内部」という狭い意味で使われることもあります。

Q 3.4.4 悠紀殿や主基殿や廻立殿って、どんな形式の建物なんですか。

悠紀殿、主基殿、廻立殿は、いずれも切妻造の屋根を持つ建物で、入口は南側にあります。ただし、悠紀殿と主基殿が妻入であるのに対して、廻立殿は平入です（妻入と平入については Q 1.4.11 を参照）。

悠紀殿と主基殿には、屋根に千木（Q 1.4.12 参照）が取り付けられます。千木の形状は、悠紀殿は内削で、主基殿は外削です（内削と外削については Q 1.4.13 を参照）。

悠紀殿と主基殿の屋根には、さらに鰹木（Q 1.4.14 参照）も並べられます。鰹木の本数は、悠紀殿も主基殿も 8 本です。ただし、北端と南端の 2 本を除いた 6 本は、2 本ずつまとめて 3 か所に置かれます。

Q 3.4.5 悠紀殿や主基殿や廻立殿って、どんな材料で建てられるんですか。

悠紀殿、主基殿、廻立殿は、柱などの構造材として、黒木（皮を削らない丸木の材木）が使われます。また、屋根は茅で葺かれ、壁や天井や床には畳表が張られます。

Q 3.4.6 大嘗宮って、どこに建てられるんですか。

大嘗宮が建てられる場所は、皇居の敷地の中です。

今上天皇（明仁）の大嘗祭では、大嘗宮は皇居東御苑（Q 2.2.1、Q 2.2.2 参照）に建てられま

<sup>5</sup>[田中,1975a], p. 121.

した。

#### Q 3.4.7 悠紀殿と主基殿の内部って、どういう構造なんですか。

悠紀殿と主基殿の内部は、どちらも同じ構造で、「外陣」または「堂」と呼ばれる南側の部分と、「内陣」または「室」と呼ばれる北側の部分から構成されます。

悠紀殿と主基殿における天皇による祭祀は、内陣の中で執行されます。

#### Q 3.4.8 廻立殿の内部って、どういう構造なんですか。

廻立殿の内部は、東西に並ぶ三つの部屋から構成されます。天皇が襖のために使う湯槽が置かれる「御湯殿」と呼ばれる部屋が西側にあり、天皇が祭祀のための装束に着替えるための部屋が中央にあり、皇后が祭祀のための装束に着替えるための部屋が東側にあります<sup>6</sup>。

ただし、歴史的には、廻立殿の内部は東西の二つの部屋のみから構成されていました。西側の部屋は「御所」と呼ばれ、東側の部屋は「御湯殿」と呼ばれます<sup>7</sup>。西側の部屋には畳が敷かれ、東側の部屋には竹の簀子が敷かれました<sup>8</sup>。

#### Q 3.4.9 大嘗宮って、着工するのはいつごろなんですか。

今上天皇（明仁）の大嘗祭の場合、大嘗宮の造営に着工したのは、大嘗祭の年の8月でした。大嘗宮の造営については、歴史的には、大嘗宮の儀の7日前に着工して、5日間で竣工させなければならない、と定められていました。しかし、この規定は、時代が下るにつれて守られなくなって現在に至っています。

### 3.5 大嘗宮の儀

#### Q 3.5.1 大嘗宮の儀って、どんな祭祀なんですか。

大嘗宮の儀は、天皇が大嘗宮において御親供と御直会をするという祭祀で、大嘗祭を構成する祭祀のうちで最も重要なものです。「大嘗祭」という言葉は、この祭祀のみを指す狭い意味で使われることもあります。

例年の新嘗祭において、天皇は、神嘉殿（Q 2.2.7 参照）という建物の中で、「御親供」と呼ばれることと、「御直会」と呼ばれることをします。Q 2.9.13 で述べたように、御親供というのは天皇が自ら神饌を神に供えることで、御直会というのは、天皇が神に供えた神饌のうちの米の御飯と粟の御飯、そして白酒と黒酒を、天皇自身が飲食することです。大嘗宮の儀は、神嘉殿ではなく大嘗宮で執行されるというような各種の相違があるものの、祭祀の内容は例年の新嘗祭と同じであると考えられています。

#### Q 3.5.2 大嘗宮の儀って、どんな祭祀から構成されてるんですか。

大嘗宮の儀は、次の二つの祭祀から構成されます。

**悠紀殿 供饌の儀** 天皇が悠紀殿において御親供と御直会をする祭祀（御親供と御直会については Q 2.9.13 を参照）。供えられる神饌には、悠紀の斎田で作られた稲が使われる。

**主基殿 供饌の儀** 天皇が主基殿において御親供と御直会をする祭祀。供えられる神饌には、主基の斎田で作られた稲が使われる。

これらの二つの祭祀は、執行される時刻と場所、そして演奏される歌などを除いて、その内容は同じものです。

<sup>6</sup>[鎌田,2011], p. 183, p. 217.

<sup>7</sup>[真弓,1988], p. 84.

<sup>8</sup>[三浦周行,1985], p. 159.

Q 3.5.3 悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀って、それぞれ何時に執行されるんですか。

今上天皇（明仁）の大嘗祭では、悠紀殿供饌の儀は午後7時ごろに始まって午後9時ごろに終わりました。主基殿供饌の儀は、その翌日の午前1時ごろに始まって午前3時ごろに終わりました<sup>9</sup>。

伝統的には、悠紀殿供饌の儀が執行される時刻は午後9時ごろから午後11時ごろまでで、主基殿供饌の儀が執行される時刻はその翌日の午前3時ごろから午前5時ごろまででした<sup>10</sup>。

Q 3.5.4 廻立殿の儀って、どんな祭祀なんですか。

廻立殿の儀<sup>かいりゅうでんぎ</sup>というのは、廻立殿の御湯殿<sup>おゆどの</sup>（Q 3.4.8 参照）において天皇が禊をする祭祀のことです。

天皇は、悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀のそれぞれに先立って、廻立殿の御湯殿に置かれた湯槽を使って禊をします。この禊は、小忌御湯<sup>おみのおゆ</sup>と呼ばれます。天皇は、この禊が終わったのち、大嘗宮の儀のための装束を着て、悠紀殿または主基殿へ向かいます。このときに天皇が着用するのは、新嘗祭の場合と同様に、純白の生絹<sup>すずし</sup>でできた装束です（Q 2.9.12 参照）。

また、廻立殿の儀では、皇后も、廻立殿の中で祭祀のための装束に着替えます。このときに皇后が着る装束も、天皇と同様に純白のものです。

Q 3.5.5 天の羽衣って何ですか。

「天の羽衣<sup>あめはごろも</sup>」というのは、天皇が小忌御湯<sup>おみのおゆ</sup>をするときに着用する湯帷子<sup>ゆかたびら</sup>（入浴のときまたは入浴後に着る単<sup>ひとえ</sup>の着物）のことです。

小忌御湯のとき、天皇は、天の羽衣を着用したまま湯につかり、湯の中でそれを脱ぎ、そして湯から上がります。

Q 3.5.6 葉薦って何ですか。

「葉薦<sup>はごも</sup>」というのは、真菰<sup>まごも</sup>というイネ科の植物の葉を編むことによって作られた、目のあらいむしろのことです。

天皇は、廻立殿から悠紀殿または主基殿へ移動するとき、通路に敷かれた葉薦の上を裸足で歩きます。葉薦は、天皇の移動に伴って敷かれていき、天皇が通り過ぎると、即座に巻き上げられます。すなわち、葉薦は天皇のための専用の道となるわけです。

Q 3.5.7 廻立殿の儀が終わったのち、皇后も悠紀殿または主基殿へ向かうんですか。

いいえ。廻立殿の儀が終わったのちに皇后が向かうのは、悠紀殿と主基殿のそれぞれの南側に建てられた、「帳殿<sup>ちやうでん</sup>」と呼ばれる建物です。

皇后は、帳殿の中で拝礼をしたのち、神饌行立<sup>しんせんぎょうりゅう</sup>（Q 2.9.11 参照）が始まるよりも前に帳殿から退出します。

Q 3.5.8 稲舂歌って何ですか。

「稲舂歌<sup>いなつきうた</sup>」というのは、天皇が廻立殿の儀を執行しているときに演奏される歌のことです。

稲舂歌は、悠紀殿と主基殿のそれぞれに付属する、「膳屋<sup>かしわや</sup>」と呼ばれる建物の中で、楽師たちによって演奏されます。そしてそのとき、同じ建物の中で、采女<sup>うねめ</sup>と呼ばれる女性が臼を杵<sup>きね</sup>で舂きます。

稲舂歌の歌詞は、悠紀と主基のそれぞれの地名を詠み込んだ和歌で、大嘗祭ごとに新たに詠まれることになっています。

Q 3.5.9 庭積の机代物って何ですか。

<sup>9</sup>[鎌田,2011], p. 193-214.

<sup>10</sup>[真弓,1988], pp. 87-96, [吉野,2000], pp. 49-51, [高森,1990], pp. 156-157.

「庭積の机代物」というのは、大嘗祭において献上される各都道府県の特産品のことです。

庭積の机代物がそのように呼ばれるのは、悠紀殿と主基殿のそれぞれの南庭に建てられた「庭積の帳殿」と呼ばれる建物の中に置かれた机の上に、献上された特産品が並べられるからです。

庭積の机代物が大嘗祭で献上されるというのは、明治天皇（睦仁）の大嘗祭のときに初めて実施されたことで、それ以降の大嘗祭でも、その先例が踏襲されています。

#### Q 3.5.10 国栖の古風って何ですか。

「国栖の古風」というのは、国栖という山奥の村落に住む人々が応神天皇（誉田別）に酒を献上したときに歌った歌のことです。

国栖の人々が応神天皇に酒を献上したというエピソードは、『日本書紀』に記載されています。

それによれば、応神天皇が吉野の離宮に赴いたとき、国櫛人が醴酒という酒を献上して、

カシノフニ、ヨクスヲツクリ、ヨクスニ、カメルオホミキ、ウマラニ、キコシモチヲセ、マロガチ。

（現代語訳）榎の林で横臼を造り、その横臼に醸した大御酒を、おいしく召上ね、わが父よ。<sup>11</sup>

という歌を歌ったとされています。

国栖の古風は、大嘗宮の儀において、天皇が悠紀殿または主基殿に到着したのち、楽師たちによって演奏されます。

#### Q 3.5.11 風俗歌って何ですか。

「風俗歌」というのは、大嘗宮の儀において、国栖の古風が演奏されたのちに演奏される歌のことです。

風俗歌の歌詞は、稻舂歌（Q 3.5.8 参照）と同様に、悠紀と主基のそれぞれの地名を詠み込んだ和歌で、大嘗祭ごとに新たに詠まれることになっています。悠紀殿供饌の儀では悠紀の風俗歌が演奏され、主基殿供饌の儀では主基の風俗歌が演奏されます。

### 3.6 大嘗宮の儀の祭神

#### Q 3.6.1 大嘗宮の儀って、誰を祭神とする祭祀なんですか。

通説では、大嘗宮の儀の祭神は、天照大神（Q 2.4.1 参照）と天神地祇（Q 1.5.9 参照）であると考えられています。

#### Q 3.6.2 大嘗宮の儀の祭神が天照大神と天神地祇だという説って、どんな根拠があるんですか。

大嘗宮の儀の祭神が天照大神（Q 2.4.1 参照）と天神地祇であるという説の根拠は、その祭祀において天皇が奏する祝詞が、それらの神々に呼びかける形式のものになっているということです。たとえば、1738年（元文3年）に作られた大嘗祭の祝詞は、次のように述べています。

伊世の五十鈴川の河上に湯津磐村の如く鎮りまします天照大神を初奉り、天つ神くにつ神八十万の神のあら御玉、和御玉三はしらことに申して申さく（下略）<sup>12</sup>

#### Q 3.6.3 大嘗宮の儀の祭神についての説で、通説以外のものって、どんなものがあるんですか。

大嘗宮の儀の祭神についての説で、通説以外のものとしては、天照大神のみを祭神とする説や、御膳八神を祭神とする説などがあります。

天照大神のみを祭神とする説については Q 3.6.4 で、御膳八神を祭神とする説については Q 3.6.5 で説明します。

<sup>11</sup>[宇治谷,1988], p. 218.

<sup>12</sup>[真弓,1989], pp. 126-127

Q 3.6.4 大嘗宮の儀の祭神について唱えられてる、天照大神のみを祭神とする説って、どういうものなんですか。

大嘗宮の儀の祭神について唱えられている、天照大神のみを祭神とする説というのは、天神地祇は大嘗宮の儀の祭神ではなく、祭神は天照大神のみであるとする説のことです。

室町時代中期の古典学者である一条兼良<sup>13</sup>は、大嘗宮の儀について、天照大神に神饌を供えたと述べていて、彼女以外の神々には言及していません<sup>14</sup>。

また、高森明勅<sup>15</sup>は、大嘗宮の儀のももとの祭神は天照大神のみで、天神地祇が加えられたのは後鳥羽天皇（尊成）の大嘗祭からであろうと述べています<sup>15</sup>。

Q 3.6.5 大嘗宮の儀の祭神について唱えられてる、御膳八神を祭神とする説って、どういうものなんですか。

大嘗宮の儀の祭神について唱えられている、御膳八神を祭神とする説というのは、大嘗宮の儀の祭神は天照大神でも天神地祇でもなく、御膳八神であるとする説のことです。

御膳八神というのは、Q 3.3.6 で述べたように、齋田拔穂の儀のために建てられる、「八神殿」と呼ばれる建物で祀られる 8 柱の神々のことです。

松前健<sup>16</sup>は、「大嘗祭と記紀神話」という論文の中で、大嘗祭の祭神について次のように述べています。

私はこれについては、『踐祚大嘗祭式』にみられる、齋郡の卜定田のかたわらにある齋場、および在京の齋場に設けられた二か処の八神殿の神がこれであろうと思っている。<sup>16</sup>

Q 2.9.13 で説明したように、天皇は新嘗祭の御親供で、「枚手」と呼ばれる取り分け皿に神饌を盛り付けるわけですが、この点は、大嘗祭の御親供でも同じです。

天皇が神饌を盛り付ける枚手の枚数は、10 枚です。したがって、天皇が神饌を供える対象として、10 柱の神々が意識されていると考えることも可能です。

御膳八神を祭神とする説の変種として、大嘗宮の儀の祭神は、天照大神、豊受大神（Q 2.7.3）、そして御膳八神、という 10 柱の神々である、という説があります<sup>17</sup>。この説は、天皇が神饌を盛り付ける皿の枚数を説明するために考案されたものです。

Q 3.6.6 悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀って、祭神は同じなんですか。

悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀のそれぞれの祭神については、同じであるという説も、異なるという説もあります。

悠紀殿供饌の儀と主基殿供饌の儀とでは祭神が異なるという説としては、悠紀殿供饌の儀の祭神は天神で、主基殿供饌の儀の祭神は地祇であるとする説（天神と地祇については Q 1.5.8 を参照）や、悠紀殿供饌の儀の祭神は天照大神で、主基殿供饌の儀の祭神は天神地祇であるとする説などがあります<sup>18</sup>。

## 第 4 章 歴史

### 4.1 成立

Q 4.1.1 即位したときに大嘗祭を執行した最初の天皇って、誰なんですか。

通説では、即位したときに大嘗祭を執行した最初の天皇は、673 年に即位した天武天皇（大海人）であると考えられています。

<sup>13</sup>「兼良」には、「かねよし」という読み方もある。

<sup>14</sup>[真弓,1989], p. 126。

<sup>15</sup>[高森,1990], pp. 236-242。

<sup>16</sup>[松前,1979], pp. 141-142。

<sup>17</sup>[真弓,1989], p. 130、[真弓,1990], pp. 180-182。

<sup>18</sup>[真弓,1989], pp. 127-130、[真弓,1990], pp. 177-178。

天武天皇よりも前の時代においても、新嘗祭は、天皇によって執行される例年の祭祀でした。しかし、その時代においては、まだ、即位した天皇が最初に執行する新嘗祭は、それ以外の年の新嘗祭と、規模において差があったわけではありませんでした。例年の新嘗祭よりも大きな規模で執行されたと、史料によって裏付けられる最初の事例が、天武天皇による大嘗祭です。

#### Q 4.1.2 天武天皇って、どんな天皇なんですか。

天武天皇（大海人）は、律令に基づく中央集権的な政治体制の構築に尽力した天皇です。

第2.3節で述べたように、奈良時代よりも前の時代には、「大臣」と呼ばれる職位の者が日本の統治権を持っていましたが、「大化改新」と呼ばれる改革ののち、中国の皇帝の制度を模倣した、律令に基づく中央集権的な政治体制に移行しました。

天武天皇は、大化の改新において中心的な役割を果たした天智天皇（天命 開別）の弟です。天皇に即位したのち、律令に基づく中央集権的な政治体制を構築するという天智天皇の事業を継続しました。

また、Q 1.5.2 で述べたように、『古事記』と『日本書紀』という二篇の歴史書は、天武天皇の命令によって編纂されたものです。

また、Q 2.7.7 で述べたように、20年ごとに式年遷宮を実施するという伊勢神宮の制度を定めたのも、天武天皇です。

天武天皇の時代の日本は、政治体制だけではなく、文化の面においても中国から大きな影響を受けています。「道教」と呼ばれる中国の土着的な宗教も、この時代の日本の文化に大きな影響を与えた中国の文化の一つです。天武天皇に対しては、この諡号のほかに、「天 淳中原 瀛 真人」という、もう一つの諡号が与えられています。この諡号の中に含まれている「瀛」と「真人」は、ともに道教において使われている言葉です。

道教においては、中国の東の海に、「三神山」と呼ばれる、蓬莱、方丈、瀛洲という、仙人が住む三つの山があると考えられています。天武天皇の諡号に含まれている「瀛」というのは、三神山の一つである瀛洲のことです。

そして、天武天皇の諡号に含まれている「真人」というのは、道教において、神界の官僚という意味で使われる言葉です<sup>1</sup>。

#### Q 4.1.3 大嘗祭を執行した最初の天皇についての通説以外の説って、どんなものがあるんですか。

大嘗祭を執行した最初の天皇についての通説以外の説としては、たとえば、それは天武天皇（大海人）ではなく持統天皇（鸕野讃良<sup>2</sup>）であるという、高森明勅の説があります<sup>3</sup>。

#### Q 4.1.4 持統天皇って、どんな天皇なんですか。

持統天皇（鸕野讃良）は、天武天皇（大海人）の没後、律令に基づく中央集権的な政治体制を構築するという彼の遺志を継いだ天皇です。

持統天皇は、天智天皇（天命 開別）の娘です。彼女の叔父である大海人皇子（のちの天武天皇）と結婚し、皇后として天皇の政務を助けました。そして、天武天皇が崩御した4年後の690年、天皇に即位しました。

持統天皇の事業としてよく知られているのは、藤原京の造営です。藤原京は、「大和三山」と呼ばれる、畝傍山、耳成山、香具山という三つの山に囲まれた地域に造営された都です。藤原京が都として使用された期間は、694年に持統天皇がそこに遷都してから、元明天皇（阿閉）が710年（和銅3年）に平城京に遷都するまでの16年間です。藤原京は、「都城制」と呼ばれる中国の都市の類型を参考にして造営された都としては、日本で最初のもです。

<sup>1</sup>[マスベロ,2000], p. 141、[高橋徹,1994], p. 370。

<sup>2</sup>「鸕」の文字は、正しくは[盧+鳥]。UnicodeはU+9E15。

<sup>3</sup>[高森,1990], pp. 105-118。

また、持統天皇は、優れた歌人でもありました。彼女が詠んだ歌としては、『小倉百人一首』に採られている、

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山<sup>4</sup>

という歌がよく知られています。

Q 4.1.5 高森明勅は、どういう根拠で、大嘗祭を執行した最初の天皇は天武天皇じゃなくて持統天皇だ、という説を唱えてるんですか。

高森明勅が唱えている、大嘗祭を執行した最初の天皇は天武天皇（大海人）ではなく持統天皇（鵜野讃良）であるという説の根拠は、新嘗祭と大嘗祭との間の対照性というものが、天武天皇の時代にはまだ成立していなかったということです。

高森は、新嘗祭と大嘗祭との間の対照性について、次のように述べています。

新嘗祭が神祇官・宮内省中心の奉仕による、朝廷の統治機構の内部で完結する神事であるのに対し、大嘗祭は、もつばら地方在住の民の奉仕を主体とする祭儀であつた。<sup>5</sup>

したがって、高森の説においては、たとえ天皇が最初に執行する新嘗祭のほうが例年の新嘗祭よりも規模が大きかったとしても、奉仕する者が地方の民であるか中央の官吏であるかという対照性が成立していない限り、それはまだ大嘗祭の成立とは言えない、ということになります。ところが天武天皇の時代には、大嘗祭だけではなく、新嘗祭も、悠紀と主基を卜定して、地方の民の奉仕によって執行されていました。したがって、彼の時代においては、まだ、新嘗祭と大嘗祭との間の対照性は成立していなかったということになります。

新嘗祭と大嘗祭との間の対照性は、飛鳥浄御原令という法典が、新嘗祭は中央の官吏が、大嘗祭は地方の官吏が奉仕せよ、と定めたことにもなって成立しました。

飛鳥浄御原令は、天武天皇の命令によって681年に編纂が開始された法典で、彼が崩御したのちの689年に施行されました。この法典は現存していませんが、757年（天平宝字元年）に施行された養老律令から、その内容を推測することができます。

持統天皇が大嘗祭を執行したのは、彼女が即位した翌年の691年です。したがって、彼女の大嘗祭が、飛鳥浄御原令の規定に基づく最初の大嘗祭ということになります。

大嘗祭を執行した最初の天皇については、高森だけではなく、岡田精司も、次のように述べています。

筆者は王位就任儀礼としての大嘗祭は、浄御原令で制定され、持統天皇の大嘗祭が最初のものと考えている。<sup>6</sup>

## 4.2 中断

Q 4.2.1 大嘗祭って、最初に執行した天皇から現在の天皇まで、すべての天皇がそれを執行したんですか。

いいえ。大嘗祭の歴史には、それが中断した次のような期間があります。

- 1221年（承久3年）に践祚した仲恭天皇（懐成）の時代。
- 1339年（延元4年）に践祚した後村上天皇（義良）、1368年（正平23年）に践祚した長慶天皇（寛成）、1383年（弘和3年）に即位した後龜山天皇（熙成）の時代。
- 1500年（明応9年）に践祚した後柏原天皇（勝仁）から、1663年（寛文3年）に践祚した霊元天皇（識仁）までの時代。
- 1709年（宝永6年）に践祚した中御門天皇（慶仁）の時代。

<sup>4</sup> 『万葉集』の原歌は、「春過ぎて夏来たるらし白栲の衣乾したり天の香具山」。

<sup>5</sup> [高森,1990], p. 112.

<sup>6</sup> [岡田精司,1979], p. 256.

## Q 4.2.2 仲恭天皇って、どうして大嘗祭を執行しなかったんですか。

仲<sup>ちゅうきやう</sup>恭<sup>かねなり</sup>天皇(懐成)が大嘗祭を執行しなかった理由は、大嘗祭を執行する前に退位したからです。

仲恭天皇の退位の背景には、「承<sup>じやうきやう</sup>久の乱」と呼ばれる、朝廷と鎌倉幕府との間の内乱があります。

承久の乱は、1221年(承久3年)5月15日に、後鳥羽上皇<sup>ご と ぼ じやうこう たかひら</sup>後鳥羽上皇(尊成)が、鎌倉幕府の執権を務めていた北条義時<sup>ほうじやうよしとき</sup>を討討せよという命令を下したことに始まります。仲恭天皇が踐祚したのは、それに先立つ4月20日のことで、彼はこのとき3歳でした。

討討の命令が下された1か月後、承久の乱は、鎌倉幕府が勝利して終結しました。幕府は、朝廷の首謀者を処罰し、仲恭天皇に退位を迫りました。天皇が退位したのは、7月9日のことです。

仲恭天皇は大嘗祭を執行しないうちに退位しましたので、彼は、「半帝<sup>はんてい</sup>」と呼ばれることもあります<sup>7</sup>。

## Q 4.2.3 後村上天皇と長慶天皇と後龜山天皇って、どうして大嘗祭を執行しなかったんですか。

後村上天皇<sup>ごむらかみ</sup>(義良)、長慶天皇<sup>のりなが</sup>(寛成)、後龜山天皇<sup>ちやうけい</sup>(熙成)が大嘗祭を執行しなかった理由は、内乱の影響下にあったからです。

1333年(元弘3年)から1392年(元中9年)までの間、朝廷は、京都に皇居を置く「北朝<sup>ほくちやう</sup>」と、吉野などに皇居を置く「南朝<sup>なんちやう</sup>」に分裂していました。ですので、この時代は、南北朝時代と呼ばれます。

南北朝時代は、北朝を擁立する室町幕府と、南朝を支援する勢力との間で、激しい内乱が続いた時代でした。この時代においては、南朝の天皇は大嘗祭を執行することができませんでした。後村上天皇と長慶天皇と後龜山天皇は、この時代に即位した南朝の天皇です。

天皇が大嘗祭を執行するためには、巨額の費用が必要となります。そのための費用は、鎌倉時代の中頃までは朝廷自身が全国から徴収していたのですが、やがて、幕府がそれを徴収して、幕府の援助によって大嘗祭が執行されるようになります<sup>8</sup>。南北朝時代の南朝の天皇が大嘗祭を執行することができなかったのは、南朝と室町幕府とが敵対関係にあったために、大嘗祭への援助が得られなかったからです。

## Q 4.2.4 南北朝時代の北朝の天皇って、大嘗祭を執行したんですか。

はい。南北朝時代の北朝では5名の天皇が即位していますが、彼らのうちで大嘗祭を執行しなかったのは1名だけで、その天皇以外は、大嘗祭を執行しています。

南北朝時代の北朝の天皇のうちで例外的に大嘗祭を執行しなかった1名というのは、1348年(貞和4年)に即位した崇光天皇<sup>すこう</sup>(興仁)です。

崇光天皇の大嘗祭は、1349年(貞和5年)に執行される予定になっていて、そのための準備が進められていたのですが、執行の直前に中止されることになりました。中止の理由については、崇光天皇が南朝寄りの姿勢だったことが室町幕府を刺激したためではないかと考えられています<sup>9</sup>。

## Q 4.2.5 後柏原天皇から靈元天皇までの時代の天皇って、どうして大嘗祭を執行しなかったんですか。

後柏原天皇<sup>ごかしわばら</sup>(勝仁)から靈元天皇<sup>れいげん</sup>(識仁)までの天皇が大嘗祭を執行しなかった理由は、その時代においては幕府が大嘗祭を援助しなかったからです。

1467年(応仁元年)、室町幕府の相続問題などを原因として、「応仁の乱<sup>おうにん</sup>」<sup>10</sup>と呼ばれる戦乱が発生しました。1477年(文明9年)まで続いたこの戦乱の結果、幕府の権威は失墜し、「戦国

<sup>7</sup>[真弓,1988], pp. 198-199, [松本郁代,2017], pp. 61-62.

<sup>8</sup>[日本文化研究所,1990], p. 144.

<sup>9</sup>[真弓,1990], pp. 190-191.

<sup>10</sup>応仁の乱は、「応仁・文明の乱」と呼ばれることもある。



大名」と呼ばれる領主が日本の各地を統治する時代が始まりました。応仁の乱から、織田信長と豊臣秀吉によって統一政権が樹立されるまでの時代は、「戦国時代」と呼ばれます。

Q 4.2.3 で述べたように、天皇が大嘗祭を執行するためには巨額の費用が必要となるのですが、鎌倉時代の中頃から、その費用は幕府によって全国から徴収されるようになります。ところが、戦国時代においては、幕府の権威が失墜して、費用の徴収ができなくなります。戦国時代に即位した天皇が大嘗祭を執行しなかったのは、このような理由によるものです。

Q 4.2.6 戦国時代が終わって、統一政権が成立した時点で、大嘗祭も再興したんですか。

いいえ。戦国時代が終わったのちの大嘗祭の再興は、統一政権が成立した直後のことではなく、それから約 100 年が過ぎたのちのことです。

全国を統一することによって戦国時代を終わらせた豊臣秀吉の時代には、大嘗祭はまだ再興されず、そののちに江戸幕府を開いた徳川家康の時代にも、再興は果たされませんでした。

大嘗祭が再興されたのは、1680 年（延宝 8 年）に征夷大將軍を継承した徳川綱吉の時代のことです。1687 年（貞享 4 年）に践祚した東山天皇（朝仁）は、践祚と同じ年に、江戸幕府の援助によって大嘗祭を執行しました。大嘗祭は、後土御門天皇（成仁）が 1466 年（文正元年）に執行して以来、221 年にわたって中断していたこととなります。

江戸幕府は、東山天皇の大嘗祭に対して、「諸事の事軽く御再興然るべく候」という条件を付けましたので、彼が執行した大嘗祭は、本来のものよりも簡略化されたものでした<sup>11</sup>。

大嘗祭が本格的に再興されるのは、1716 年（享保元年）に征夷大將軍を継承した徳川吉宗の時代のことです。1735 年（享保 20 年）に践祚した桜町天皇（昭仁）は、吉宗からの全面的な援助を得て、1738 年（元文 3 年）に本格的な大嘗祭を執行しました。

Q 4.2.7 中御門天皇って、どうして大嘗祭を執行しなかったんですか。

中御門天皇（慶仁）が大嘗祭を執行しなかった理由は、それを執行する機会を逸したからであろうと考えられています。

中御門天皇は、大嘗祭を再興した東山天皇（朝仁）の次の代の天皇です。彼は、1709 年（宝永 6 年）6 月に 9 歳で践祚しました。その年の 12 月に父親の東山上皇が崩御し、諒闇中の 1710 年（宝永 7 年）11 月に即位式を挙行したのですが、大嘗祭を執行する機会を逸したまま、1735 年（享保 20 年）に桜町天皇（昭仁）が践祚することになります<sup>12</sup>。

## 4.3 登極令

Q 4.3.1 皇室令って何ですか。

「皇室令」というのは、旧皇室典範による法制度のもとで制定された、皇室に関する法律のことです。

現行の皇室典範は、国会が改正することのできる通常法律ですが、それに対して、1889 年（明治 22 年）に制定された旧皇室典範は、憲法と同列の最高法規で、帝国議会にはそれを改正する権限がありませんでした。皇室令も、旧皇室典範と同様に、国会の関与を経ることなく制定または改正された法律です。

旧皇室典範は、1947 年（昭和 22 年）5 月 2 日に廃止されました。すべての皇室令も、同じ日に廃止されています。

Q 4.3.2 登極令って何ですか。

登極令は、皇位継承儀礼と元号について定めた、皇室令に属する法律です。

<sup>11</sup>[真弓,1990], p. 191、[松本郁代,2017], pp. 63–64、[高森,1990], pp. 251–252。

<sup>12</sup>[松本郁代,2017], p. 64。

漢語において、天命を受けて人民を治める者は、「天子」と呼ばれます。「登極」というのは、天子の位に登るという意味の漢語です。この場合の「極」というのは、天子の位を象徴する北極星のことです。

登極令は、皇室令の第1号として、1909年（明治42年）2月11日に公布されて、同じ年の3月3日に施行されました。そして、他の皇室令と同様に、1947年（昭和22年）5月2日に廃止されました。

Q 4.3.3 登極令って、大嘗祭についても何かを定めてるんですか。

はい。登極令は、踐祚、元号、即位礼について定めるとともに、大嘗祭についての規定も含まれています。

登極令は、第1条から第18条までの条文と、「附式」と呼ばれる、儀式の式次第から構成されています。

登極令の条文は、第1条から第3条までは踐祚と元号についての規定で、第4条から第18条までは即位礼と大嘗祭についての規定です。ただし、登極令では、即位礼は「即位ノ礼」と呼ばれています。

附式は、第1編と第2編から構成されていて、第1編は踐祚の式の式次第で、第2編は即位礼と大嘗祭の式次第です。

Q 4.3.4 登極令が施行されていた期間中って、大嘗祭もそれが規定したとおりに実施されたんですか。

はい。登極令が施行されていた期間中は、大嘗祭も、それが規定したとおりに実施されました。

登極令の規定に基づいて実施された大嘗祭は、それが施行されていた期間中に即位した大正天皇（嘉仁）と昭和天皇（裕仁）の2回です。

Q 4.3.5 今上天皇の大嘗祭も、登極令の規定のとおり実施されたんですか。

いいえ。今上天皇（明仁）の大嘗祭は、登極令も参考にされていますが、それが規定したとおりに実施されたわけではありません。

Q 4.3.2 で述べたように、皇室令の一つである登極令は、1947年（昭和22年）5月2日に廃止されました。ですから、1990年（平成2年）に実施された今上天皇の大嘗祭は、登極令に束縛されることなく実施されました。

たとえば、登極令の規定と、今上天皇の大嘗祭とでは、悠紀と主基の境界線が異なります。登極令の第8条は、悠紀と主基について次のように定めていました。

大嘗祭ノ齋田八京都以東以南ヲ悠紀ノ地方トシ京都以西以北ヲ主基ノ地方トシ其ノ地方八之ヲ勅定ス

それに対して、今上天皇の大嘗祭では、3.3 で述べたように、新潟県、長野県、静岡県の三県を含む東の地域が悠紀、その三県よりも西の地域が主基とされました。

Q 4.3.6 今上天皇の大嘗祭って、登極令以外に、どんな資料を参考にして実施されたんですか。

今上天皇（明仁）の大嘗祭を実施する上で参考にされた資料としては、登極令のほかに、次のようなものがあります。

『延喜式』 醍醐天皇（敦仁）が905年（延喜5年）に編纂を命じて、927年（延長5年）に完成し、967年（康保4年）に施行された、律令の施行細則を集大成した法典。全50巻で、大嘗祭については巻七「踐祚大嘗祭」で規定されている。

『西宮記』 946年（天慶9年）に踐祚した村上天皇（成明）の時代の儀式について源高明が記した書物。書名には、「せいぎゅうき」、「さいぐうき」という読み方もある。

『北山抄』 藤原公任が朝廷の儀式や政務に関する行事について記した書物。11世紀初頭に成立したと推定されている。

『江家次第』<sup>ごうけしだい</sup> 藤原師通<sup>ふじわらのもろみち</sup>の依頼を受けた大江匡房<sup>おおえのまさふさ</sup>が編纂した儀式書。編纂の時期は、11世紀末から12世紀初頭と考えられている。

#### 4.4 御禊

Q 4.4.1 行幸ってなんですか。

「行幸<sup>ぎょうこう</sup>」というのは、天皇が皇居から別のところへ移動することです。

Q 4.4.2 頓宮って何ですか。

「頓宮<sup>とんぐう</sup>」というのは、天皇が行幸したときに設営される仮の宮殿のことです。「行宮<sup>あんぐう</sup>」や「行在所<sup>あんざいしょ</sup>」と呼ばれることもあります。

Q 4.4.3 御禊って何ですか。

「御禊<sup>ごけい</sup>」というのは、大嘗祭の前月に、河原に設営された頓宮に天皇が行幸して、そこで禊<sup>みそぎ</sup>（Q 1.3.5 参照）をすることです。

天皇は、「鳳輦<sup>ほうれん</sup>」と呼ばれる、屋根の上に金銅の鳳凰を載せた輿<sup>こし</sup>に乗って河原へ行幸します。そして、朝廷に仕える官吏たちも、天皇に随行します。

Q 4.4.4 御禊って、現在の大嘗祭でも実施されてるんですか。

はい。現在の大嘗祭でも、御禊は実施されています。ただし、現在は皇居の中で御禊が実施されていますので、河原への行幸は実施されていません。

御禊のための行幸が最後に実施されたのは、後土御門天皇<sup>ごつちみかど</sup>（成仁<sup>なるひと</sup>）が大嘗祭を執行した1466年（文正元年）のことです。その翌年に始まった応仁<sup>おうにん</sup>の乱の結果、幕府の権威は失墜し、Q 4.2.5で述べたように、朝廷は、大嘗祭を執行するための幕府からの援助を得ることができなくなります。

応仁<sup>おうにん</sup>の乱の時代から中断していた大嘗祭は、Q 4.2.6で述べたように、1687年（貞享4年）に践祚した東山<sup>ひがしやま</sup>天皇<sup>あきひと</sup>（朝仁<sup>あさひと</sup>）のときに、江戸幕府の援助によって再興されるわけですが、しかし、このときから御禊は、河原ではなく、皇居の中で実施されるようになりました<sup>13</sup>。

大正天皇<sup>よしひと</sup>（嘉仁<sup>あきひと</sup>）と昭和天皇<sup>ひろひと</sup>（裕仁<sup>あつひと</sup>）は、京都にある「小御所<sup>こごしよ</sup>」と呼ばれる建物の中で御禊を実施しました。

今上天皇<sup>あきひと</sup>（明仁<sup>あきひと</sup>）は、1990年（平成2年）11月20日（大嘗宮の儀の2日前）に、皇居宮殿の竹の間（Q 2.2.4 参照）で御禊を実施しました<sup>14</sup>。

Q 4.4.5 御禊って、最初に大嘗祭を執行した天武天皇のときから実施されてたんですか。

天武天皇<sup>てんむ</sup>（大海人<sup>おおあま</sup>）が御禊を実施したかどうかは、史料が存在しないため、不明です。

御禊がいつから始まったのかということについて明らかにする史料は、存在しません。史料に記載された最も古い御禊は、806年（大同元年）に践祚した平城天皇<sup>へいぜい</sup>（安殿<sup>あて</sup>）のものです<sup>15</sup>。

Q 4.4.6 御禊って、どこで実施されたんですか。

833年（天長10年）に践祚した仁明天皇<sup>にんみょう</sup>（正良<sup>まさら</sup>）以降の御禊は、そのほとんどが鴨川<sup>かもがわ</sup>で実施されました。

鴨川は、京都の市街地を北から南へ流れる川で、平安時代から江戸時代の終わりまで、皇居はこの川の西側に位置していました。

<sup>13</sup>[三浦周行,1985], p. 149、[高森,1990], pp. 250-253、[吉野,2000], p. 30。

<sup>14</sup>[鎌田,2011], p. 161。

<sup>15</sup>[田中,1975a], p. 179。

仁明天皇よりも前の時代には、御禊の場所は一定ではありませんでした。806年（大同元年）に践祚した平城天皇（安殿）は807年（大同2年）に葛野川（現在の太田川）の嵐山以南）で実施し（その年は大嘗祭が執行されませんでしたので、808年（大同3年）にふたたび大津で実施）、809年（大同4年）に践祚した嵯峨天皇（神野）は810年（弘仁元年）に松崎川（鴨川の上流）で実施し、823年（弘仁14年）に践祚した淳和天皇（大伴）は同じ年に佐比川（鴨川が桂川に合流する地点の付近）で実施しています<sup>16</sup>。

仁明天皇以降の天皇で、鴨川以外の場所で御禊が実施された例としては、1016年（長和5年）に践祚した後一条天皇（敦成）が同じ年に「東河」（おそらく現在の堀川）で実施したという記録があります<sup>17</sup>。

仁明天皇よりも前の時代において御禊の場所が一定ではなかった理由としては、その時代には御禊の場所が卜定によって定められていたからであろうと考えられています<sup>18</sup>。

#### Q 4.4.7 御禊のために設営される頓宮って、どんなものだったんですか。

天皇が御禊のために行幸する頓宮は、南北に流れる川の西側に設営され、4棟の仮屋から構成されます。

御禊のための頓宮を構成している4棟のうちの2棟は、「御禊幄」と呼ばれ、それらは川のそばに東西に並べて設営されました。そして残りの2棟は、「御膳幄」と呼ばれ、川から少し離れた位置に、やはり東西に並べて設営されました。

天皇が実際に御禊を実施するのは、東西に並んだ2棟の御禊幄のうちの東の仮屋、つまり、最も川に近い位置に建てられた仮屋の中です。

東の御禊幄は、仮屋の中にさらに仮屋があるという二重の構造になっていて、内側の仮屋は、「百子帳」と呼ばれます。天皇は、この内側の仮屋の中で御禊を実施します。

#### Q 4.4.8 百子帳って、どんなものだったんですか。

百子帳は、檳榔で屋根を葺き、周囲に帷を垂らした仮屋です。

「檳榔」は、蒲葵というヤシ科の樹木を意味する古い言葉です。

「帷」というのは、室内の一部分を他の部分から隔てるために上から垂れ下げる布のことで、百子帳に使われる帷は、「菊塵立涌雲綾」という模様のある布でできています。百子帳の周囲は帷によって囲まれているのですが、東に面した帷だけは、巻き上げられています。また、西側だけは縫い目がなく、天皇は、その方角から百子帳に入ります。

百子帳の中には、長筵（丈の長い筵）が敷き詰められ、その上に絨毯のような紫の敷物が敷かれ、その上に、「大床子」と呼ばれる脚のある座席が、2脚、置かれます。大床子の一つは天皇が座るためのもので、もう一つは剣を置くためのものです。

天皇は、百子帳に入ると、まず大床子に着座して、そこで手水（手を水で洗い清めること）をします。

2脚の大床子の東側には、大床子ではない平敷の座席があります。天皇は、大床子からこの座席に移動して、御禊を実施します。

#### Q 4.4.9 贖物って何ですか。

「贖物」というのは、穢れ（Q 1.3.4 参照）を持っている人間が、自身の穢れを落とすために、自身の穢れをそれに移す物体のことです。「撫物」と呼ばれることもあります。

禊というのは、Q 1.3.5 で述べたように、穢れを洗い流すために水または湯で沐浴することですが、御禊においては、沐浴ではなく、贖物に呼気を吹きかけるという方法で穢れを落とします。

<sup>16</sup>[田中,1975a], p. 181、[吉野,2000], p. 29。

<sup>17</sup>[田中,1975a], p. 181。

<sup>18</sup>[田中,1975a], pp. 181-182。

天皇は、酉の刻（午後5時から7時まで）に百子帳に入って、大床子に着座したのち、平敷の座席に移ります。そして、東側から百子帳に入った御巫（神に奉仕する童女）から贖物を受け取って、それに呼気を吹きかけたのち、御巫にそれを返します。

御禊で使われる贖物は、3個の土器のそれぞれに、二筋の解縄、散米、人形を盛ったものです<sup>19</sup>。解縄というのは「大被詞」という祝詞の一節ごとに解いていく縄のことで、散米というのは神前に撒き散らされる米のことで、人形というのは人間の形を持つ紙または薄い板のことで

Q 4.4.10 御禊のための行幸って、一般人も見物できたんですか。

はい。御禊のために天皇が頓宮へ向かう行幸は、一般人が見物することも可能でした。御禊のための行幸は、その沿道に棧敷が設けられ、一般人を含む多くの見物人で賑わいました。天皇に随行する官吏たちも、そして見物人たちも、服装の華麗さを競い合ったと伝えられています<sup>20</sup>。

## 4.5 標山

Q 4.5.1 斎場って何ですか。

「斎場」というのは、大嘗宮の儀で神に供えられる神饌を準備するための建物のことです。神饌は、大嘗宮の儀が執行される当日の巳の刻（午前10時）に、斎場から大嘗宮へ運ばれます。この移動は、多数の人間から構成される行列を伴います。

Q 4.5.2 標山って何ですか。

「標山」<sup>21</sup>というの、神饌を斎場から大嘗宮へ運ぶ行列で曳かれる、山の形をした飾り物のことです。神饌は、悠紀の行列と主基の行列に分かれて運ばれます。標山は、それぞれの行列で一基ずつ曳かれました。

Q 4.5.3 行列を作って斎場から大嘗宮へ神饌を運ぶっていう行事は、現在の大嘗祭でも実施されてるんですか。

いいえ。斎場から大嘗宮へ神饌を運ぶという行事は、現在の大嘗祭では実施されていません。Q 4.2.6 で述べたように、1687年（貞享4年）に践祚した東山天皇（朝仁）のときに、応仁の乱の時代から中断していた大嘗祭が、江戸幕府の援助によって再興されるわけですが、しかし、行列を作って斎場から大嘗宮へ神饌を運ぶという行事は、再興されませんでした<sup>22</sup>。

したがって、現在の大嘗祭では、神饌を運ぶ行列で標山が曳かれるということはありません。

Q 4.5.4 標山って、どんなものだったんですか。

標山は、山の形の模型の上に樹木を立てて、その山や樹木にさまざまな装飾品を取り付けたものです。

833年（天長10年）に践祚した仁明天皇（正良）の大嘗祭で曳かれた標山については、それがどのようなものだったかということが、『続日本後紀』という歴史書に記載されています。

それによると、仁明天皇の大嘗祭で曳かれた悠紀の標山は、山の上に梧桐<sup>23</sup>を立てて、その上に二匹の鳳凰が集い、木の中から五色の雲が出て、「悠紀近江」<sup>24</sup>という四字が雲の上に掲げられ、その上に日像と半月像がある、というものでした<sup>25</sup>。

<sup>19</sup> [吉野,2000], p. 40、[真弓,1988], p. 62。

<sup>20</sup> [田中,1975a], pp. 182-184。

<sup>21</sup> 「標山」には、「ひょうのやま」、「しめのやま」という読み方もある。また、標山は、「標の山」と表記されることもある。

<sup>22</sup> [高森,1990], pp. 250-251。

<sup>23</sup> アオギリ科の落葉高木。

<sup>24</sup> 近江は現在の滋賀県。

<sup>25</sup> [三浦周行,1985], p. 168、[真弓,1988], p. 82

標山は、もともとは、悠紀と主基のそれぞれの<sup>こくし</sup>国司（地方官）が大嘗宮の前で立つ位置を示すために立てられた札だったものが、しだいに装飾が施されるようになって形成されたものです<sup>26</sup>。

## 第5章 太一

### 5.1 陰陽五行思想

Q 5.1.1 陰陽五行思想って何ですか。

「<sup>いんようごぎょう</sup>陰陽五行思想」というのは、宇宙の万物の変転を説く、古代中国の世界観のことです。「陰陽五行説」と呼ばれることもあります。

陰陽五行思想は、陰陽説と五行説から構成されます。

Q 5.1.2 陰陽説って、どんな世界観なんですか。

「<sup>いんよう</sup>陰陽説」というのは、陰と陽という二つの要素の離合集散によって、宇宙に生成する現象を説明しようとする世界観のことです。

中国の春秋戦国時代（紀元前 770 から紀元前 221 まで）に登場した数々の学者たちやその学派は、「<sup>しよしひやつか</sup>諸子百家」と呼ばれます。諸子百家を構成する学派には、<sup>いんようか</sup>陰陽家、<sup>じゆか</sup>儒家、<sup>どうか</sup>道家、<sup>ほっか</sup>墨家、<sup>ほうか</sup>法家、<sup>めいか</sup>名家などがあります。陰陽説は、諸子百家を構成する学派の一つである陰陽家の学者たちが唱えた説です。

Q 5.1.3 五行説って、どんな世界観なんですか。

「<sup>ごぎょう</sup>五行説」というのは、<sup>もく</sup>木、<sup>か</sup>火、<sup>ど</sup>土、<sup>きん</sup>金、<sup>すい</sup>水という、万物を構成する五つの要素の盛衰によって、宇宙に生成する現象を説明しようとする世界観のことです。

陰陽五行思想においては、木と火は陽に属し、金と水は陰に属し、土は陽と陰の中間にあると考えられています。

Q 5.1.4 太極って何ですか。

「<sup>たいきよく</sup>太極」というのは、宇宙が生成される以前の、陰と陽がまだ分かれていなかった状態のことです。「<sup>こんどん</sup>混沌」と呼ばれることもあります。

Q 5.1.5 太一って何ですか。

「<sup>たいいつ</sup>太一」というのは、古代の中国において宇宙の最高の統治者とされた神のことです。

Q 2.3.2 で述べたように、太一は、<sup>てんのう</sup>「天皇」、<sup>てんのうたいてい</sup>「天皇大帝」、<sup>てんてい</sup>「天帝」などと呼ばれることもあります。

太一は、太極と北極星<sup>1</sup>を神霊化したものです<sup>2</sup>。

Q 5.1.6 紫微垣って何ですか。

「<sup>しびえん</sup>紫微垣」というのは、太一とその太子と后が住んでいる住居のことです。

太一は北極星に住んでいるとされ、彼の太子や后は、その周囲にある星々に住んでいるとされます<sup>3</sup>。

Q 5.1.7 北斗七星って何ですか。

<sup>26</sup>[三浦周行,1985], p. 167.

<sup>1</sup>小熊座の α 星。「<sup>ほくしん</sup>北辰」と呼ばれることもある。

<sup>2</sup>[吉野,2014], pp. 43–46.

<sup>3</sup>[吉野,1998], p. 25.

「北斗七星」というのは、大熊座にある、線でつなぐと柄杓（斗）の形になる七つの星のことです。「北斗星」または「北斗」と呼ばれることもあります。

北斗七星は、天の北極から30度しか離れていませんので、日周運動によって北極星の周囲を回転しているように見えます。ですから、古代の中国では、北斗七星というのは太一が宇宙を移動するために乗る車であると考えられていました<sup>4</sup>。

#### Q 5.1.8 南斗六星って何ですか。

「南斗六星」というのは、射手座にある、線でつなぐと柄杓（斗）の形になる六つの星のことです。「南斗」と呼ばれることもあります。

古代の中国では、南斗六星は天廟であると考えられていました<sup>5</sup>。「廟」というのは祖先の霊を祀るところのことで、「天廟」というのは君主の廟のことです。

#### Q 5.1.9 十干って何ですか。

「十干」というのは、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸という10個のもののことです。

十干は、五行のそれぞれを兄（陽）と弟（陰）に配当したものです。たとえば、甲は木の兄、乙は木の弟、丙は火の兄、丁は火の弟を意味します。十干のそれぞれをあらわす漢字は、この意味に対応する訓読みで読まれることもあります。すなわち、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸というのが十干の訓読みです。

年、月、日には、十干のそれぞれが順番に配当されます。たとえば、2017年（平成29年）には丁が配当されていて、その年の1月には辛が配当されていて、その月の1日には戊が配当されています。

#### Q 5.1.10 十二支って何ですか。

「十二支」というのは、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥という12の動物のことです。

十干と同じように、十二支も、年、月、日に対して順番に配当されます。たとえば、2017年（平成29年）には酉が配当されていて、その年の1月には丑が配当されていて、その月の1日には子が配当されています。

十二支は、方角に対しても配当されています。方角に対する十二支の配当は、360度を12等分して、北を中心とする30度が子、東を中心とする30度が卯、南を中心とする30度が午、西を中心とする30度が酉となっています。

さらに、十二支は、時刻に対しても配当されています。時刻に対する十二支の配当は、1日を12等分して、午前0時を中心とする2時間が子、午前6時を中心とする2時間が卯、正午を中心とする2時間が午、午後6時を中心とする2時間が酉となっています。

十二支のそれぞれをあらわす漢字は、音読みで読まれることもあります。それぞれの漢字の音読みは、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥です。

#### Q 5.1.11 干支って何ですか。

「干支」<sup>6</sup>というの、十干と十二支を組み合わせたもののことです。

たとえば、2017年（平成29年）に配当されている十干と十二支は、十干が丁で十二支が酉ですので、その年の干支は「丁酉」と表記されて、音読みでは「ていゆう」、訓読みでは「ひのととり」と読まれます。

干支の訓読みは、常に、十干の訓読みと十二支の訓読みの組み合わせです。それに対して、干支の音読みには不規則なものがあります。「甲子」は、「こうし」と読まれることもありますが、「かつし」というのが普通の読み方です。また、「乙」の訓読みは、単独では「おつ」ですが、干

<sup>4</sup>[吉野,1998], p. 26。

<sup>5</sup>[吉野,2000], p. 96。

<sup>6</sup>「干支」には、「えと」という読み方もある。

支では「いつ」と読まれます。ただし、「乙丑」と「乙巳」の二つについては、「いっちゅう」と「いっし」というように、「つ」が促音になります。

十干と十二支はどちらも偶数個ですので、偶数番目と偶数番目、奇数番目と奇数番目という組み合わせしか生じません。ですから、干支の個数は120個ではなく60個です。

日本や中国で起きた事件の中には、その事件が起きた年の干支で呼ばれるものがいくつもあります。たとえば、672年の壬申じんしんの年に日本で起きた内乱は「壬申の乱」と呼ばれますし、1911年の辛亥しんがいの年に中国で起きた革命は「辛亥革命」と呼ばれます。

## 5.2 習合

### Q 5.2.1 習合って何ですか。

「習合しゅうごう」というのは、複数の異なる宗教が融合する現象のことです。英語では syncretism と呼ばれます。

たとえば、明治よりも前の時代の日本においては、純粋な神道や純粋な仏教だけではなく、それらが融合した宗教も盛んでした。神道と仏教が融合する現象は、「神仏習合しんぶつ」と呼ばれます。

「習合」という言葉は、複数の異なる神々の同一視を指して使われることもあります。たとえば、日本において「大黒だいこく」と呼ばれる神は、「マハーカーラ」と呼ばれる古代インドの神と、記紀神話に登場する大国主命おおくにぬしのみこととを同一視した神ですが、この同一視は、「マハーカーラと大国主命との習合」と言われます。

### Q 5.2.2 神道って、古代の日本人が信仰していた宗教と同じものなんですか。

いいえ。神道は、古代の日本人が信仰していた宗教と陰陽五行思想とが習合したものです。

『日本書紀』の冒頭には、原初において存在していた混沌としたものが二つに分かれて天と地ができ、という記述が置かれています。この創世神話は、太極が陰と陽に分かれることによって宇宙が生成されたという陰陽説からの影響のもとに書かれたものです。

### Q 5.2.3 吉野裕子って、どういう人なんですか。

吉野裕子よしのひろこは、民俗学者です。

吉野裕子は、1916年（大正6年）に東京に生まれ、2008年（平成20年）に亡くなりました。1934年（昭和9年）に女子学習院を、1954年（昭和29年）に津田塾大学を卒業し、1975年（昭和50年）から1987年（昭和62年）まで、学習院女子短期大学で講師を務めました。1977年（昭和52年）3月に、「陰陽五行思想からみた日本の祭」で東京教育大学（現在の筑波大学）から文学博士の学位を授与されました<sup>7</sup>。

### Q 5.2.4 古代の日本人が信仰していた宗教と陰陽五行思想とが習合した宗教が神道だとすると、太一も神道の祭祀の対象になってるといえることですか。

はい。太一たいいつ（Q 5.1.5 参照）は、神道において祭祀の対象となっている神々のうちの一柱です。

日本の各地にある、「北辰社ほくしんしゃ」あるいは「妙見社みょうけんしゃ」と呼ばれる社殿は、心霊化した北極星、すなわち太一を祭神とするものです。

また、太一を含む複数の神々が習合した神が、神道における祭祀の対象となることもあります。吉野裕子（Q 5.2.3 参照）は、皇大神宮の祭神は天照大神と太一とが習合した神であり<sup>8</sup>、大嘗祭の祭神は天照大神と太一と天皇霊が習合した神である<sup>9</sup>、という説を唱えています。

皇大神宮の祭神についての吉野説については第5.3節で、大嘗祭の祭神についての吉野説については第5.4節で説明することにしたいと思います。

<sup>7</sup>[吉野,1983], p. 300.

<sup>8</sup>[吉野,2000], pp. 66–68, [吉野,2014], pp. 100–113.

<sup>9</sup>[吉野,2000], pp. 170–172.



## 5.3 皇大神宮における習合

Q 5.3.1 吉野裕子は、皇大神宮の祭神について、どんな説を唱えてるんですか。

吉野裕子は、皇大神宮（Q 2.7.2 参照）の祭神は、天照大神（Q 2.4.1 参照）と太一（Q 5.1.5 参照）が習合した神である、という説を唱えています<sup>10</sup>。

Q 5.3.2 吉野裕子は、どういう根拠で、皇大神宮の祭神は天照大神と太一が習合した神だという説を唱えてるんですか。

皇大神宮の祭神は天照大神と太一が習合した神である、と吉野裕子が唱えている根拠は、「太一」または「大一」と書かれたものが皇大神宮に関連する祭祀において使用されているということです。

Q 2.7.1 で述べたように、伊勢神宮というのは 125 社の神社から構成されている神社群のことですが、それらの神社は、正宮、別宮、摂社、末社、所管社、別宮所管社に分類されます。別宮は、正宮である皇大神宮と豊受大神宮の次に重要視される神社で、皇大神宮の別宮が 10 社、豊受大神宮の別宮が 4 社あります。

志摩郡磯部町にある伊雑宮は、天照大神を祭神とする神社で、皇大神宮の別宮のうちの一社です（「伊雑宮」の正しい読み方は「いざわのみや」ですが、「いぞうのみや」と呼び習わされています<sup>11</sup>）。

伊雑宮では、毎年 6 月 24 日に、「御田植神事」と呼ばれる祭祀が執行されます。この祭祀においては、「大鷲」と呼ばれるものが水田の畦に立てられます。これは、長さが 9 メートルほどの青竹の先端に巨大な団扇と扇を取り付けたものです。団扇には日月が描かれ、扇には、舟の絵とともに「太一」という 2 文字が墨書されます<sup>12</sup>。

御田植神事において、大鷲は、水田に向かって倒され、団扇と扇は、近郷の青年たちによって千切り取られます。断片となった団扇と扇は、航海の安全、豊漁、五穀豊穰にご利益のある神体として祀られます。つまり、大鷲に取り付けられた団扇と扇は、天照大神が宿っている神体であり、断片となったのちもそれらにはご利益があると考えられている、ということです。その神体の一つに「太一」という文字が書かれているということは、天照大神と太一とが習合していることの反映であると考えられます。

皇大神宮に関連する祭祀において「太一」または「大一」という名前が見られる事例は、伊雑宮の御田植神事のみではありません。

Q 2.7.7 で述べたように、伊勢神宮では、20 年ごとに式年遷宮が実施されます。そのための用材を伐採する山は、「御杣山」と呼ばれます。御杣山では、用材の伐採に先立って、「御杣始祭」と呼ばれる祭祀が執行されます。この祭祀の場所には、「大一」と書かれた幟が立てられます<sup>13</sup>。

Q 5.3.3 吉野裕子は、豊受大神宮の祭神についても、何か独自の説を唱えてるんですか。

はい。吉野裕子は、豊受大神宮（Q 2.7.3 参照）の祭神は、豊受大神と北斗七星が習合した神であるという説を唱えています。

Q 5.1.7 で述べたように、古代の中国では、北斗七星というのは太一が宇宙を移動するために乗る車であると考えられていました。吉野裕子は、豊受大神宮が創建された理由は、天照大神と習合している太一が宇宙に乗り出すための車を提供するためであると述べています<sup>14</sup>。

Q 5.3.4 吉野裕子は、どういう根拠で、豊受大神宮の祭神は豊受大神と北斗七星が習合した神だという説を唱えてるんですか。

豊受大神宮の祭神は豊受大神と北斗七星が習合した神である、と吉野裕子が唱えている根拠は、式年遷宮のときに豊受大神宮で使われる装束に車の紋様が使われるということです。

<sup>10</sup>[吉野,2000], pp. 66–68、[吉野,2014], pp. 100–113。

<sup>11</sup>[神宮司庁,1988], p. 120。

<sup>12</sup>[神宮司庁,1988], p. 121、[吉野,2000], p. 62、[吉野,2014], p. 109 に写真が掲載されている。

<sup>13</sup>[神宮司庁,1988], p. 161、[所,1993], p. 162 に写真が掲載されている。

<sup>14</sup>[吉野,2000], p. 75。

式年遷宮においては、社殿が新しく造営されるのみではなく、さまざまな装束も新調されます。それらの装束の一つとして、「御被」と呼ばれる、神体を覆う錦の装束があります。豊受大神宮の御被は、「刺車文錦の御被」と呼ばれるもので、車の紋様を持つ錦で作られています<sup>15</sup>。古代の中国では、北斗七星というのは太一が宇宙を移動するために乗る車であると考えられていたわけですから、豊受大神宮の御被に紋様として描かれている車は、豊受大神宮の祭神として豊受大神と習合している北斗七星を象徴するものであると考えられます。

ちなみに、皇大神宮の御被は、「屋形文錦の御被」と呼ばれるもので、家屋の紋様を持つ錦で作られています<sup>16</sup>。

#### Q 5.3.5 神御衣祭って何ですか。

神御衣祭は、皇大神宮で毎年、5月14日と10月14日に執行される祭祀です（太陽暦が導入されるよりも前は4月14日と9月14日）、「神衣祭」と表記されることもあります<sup>17</sup>。

神が着る衣服、または神に奉る衣服は、「神御衣」と呼ばれます。神御衣祭は、松阪市にある機殿神社の八尋殿で織られた和妙（絹）と荒妙（麻）の神御衣を皇大神宮の祭神に奉る祭祀です。

神御衣祭が執行される場所は、皇大神宮の正宮と荒祭宮の二箇所です。荒祭宮は、正宮の背後にある、皇大神宮の別宮の一つで、祭神は天照大神の荒御魂です。「荒御魂」というのは、神霊を構成している二つの側面のうちの、積極的、進取的、活動的な側面のことで、もう一つの側面は「和御魂」と呼ばれます<sup>18</sup>。

#### Q 5.3.6 吉野裕子は、伊勢神宮と南斗六星との関係についても、何か独自の説を唱えてるんですか。

はい。吉野裕子は、皇大神宮で執行される神御衣祭（Q 5.3.5 参照）は、南斗六星の神迎えと神送りの祭祀である、という説を唱えています<sup>19</sup>。

南斗六星は、射手座という南天の星座にある六つの星ですので、北半球では、それを見ることが出来る季節が限定されます。それが午前0時に南中するのは、夏至のころです。

Q 5.3.5 で述べたように、神御衣祭は1年に2回、5月14日と10月14日に執行される祭祀です。吉野裕子は、5月の神御衣祭は南斗六星の神迎えの祭祀で、10月の神御衣祭は南斗六星の神送りの祭祀ではないかと述べています。

#### Q 5.3.7 吉野裕子は、北斗七星と南斗六星が伊勢神宮で祭祀の対象になってる理由については、どんなふう考えてるんですか。

吉野裕子は、北斗七星と南斗六星が伊勢神宮で祭祀の対象になっている理由は、それらが神饌を皇大神宮の祭神に届けるために使われる食器として意識されていたからではないかと考えています<sup>20</sup>。

Q 2.7.12 で述べたように、伊勢神宮では毎年10月に、新穀で作られた神饌や神酒を心御柱に奉る、「神嘗祭」という祭祀が執行されます。神饌は、午後10時と翌日の午前2時の2回、心御柱に供えられます。午後10時の神饌は「由貴夕大御饌」と呼ばれ、翌日の午前2時に供えられる神饌は「由貴朝大御饌」と呼ばれます<sup>21</sup>。

吉野裕子は、由貴夕大御饌は北斗七星によって祭神に届けられ、由貴朝大御饌は南斗六星によって祭神に届けられると述べています<sup>22</sup>。

<sup>15</sup> [吉野,2000], p. 70, [所,1993], p. 176 に写真が掲載されている。

<sup>16</sup> [吉野,2000], p. 69 に写真が掲載されている。

<sup>17</sup> 吉野裕子の著作でも「神衣祭」と表記されている。

<sup>18</sup> [神宮司庁,1988], p. 25。

<sup>19</sup> [吉野,2000], pp. 93-117。

<sup>20</sup> [吉野,2000], p. 126。

<sup>21</sup> 吉野裕子の著作では、夕大御饌は「宵大御饌」、朝大御饌は「暁大御饌」と書かれている。

<sup>22</sup> [吉野,2000], p. 159。

## 5.4 大嘗祭における習合

## Q 5.4.1 天皇霊って何ですか。

「天皇霊」というのは、天皇が持っていると言われる神霊のことです。

『日本書紀』の中では、天皇霊を意味する言葉がしばしば使われています。たとえば、「天皇之霊」、「天皇之神霊」、「聖帝之神霊」、「天皇威霊」、「天皇威」、「天皇之威」、「天皇之徳」、「頼於天皇」、「頼天皇」、「皇祖之霊」、「皇霊之威」、「皇威」、「天之霊」などです<sup>23</sup>。一例だけですが、「天皇霊」という表記も敏達天皇紀で使われています。

『日本書紀』の垂仁天皇紀には、垂仁天皇(活目入彦五十狭茅)の命を受けた田道間守が、常世国<sup>24</sup>から「非時の香菓」<sup>25</sup>を持ち帰ったというエピソードが記載されています。田道間守は10年後に日本に戻って来たのですが、そのときには垂仁天皇はすでに崩御していました。そのときに田道間守が語った言葉の中に、次のような一節があります。

豈期、独凌峻瀾。更向本土乎。然頼聖帝之神霊。僅得還来。

すなわち、「本土に再び戻れるとは思ひもかけなかったことです。しかし聖帝の神霊の加護により、やっと帰ることができました」<sup>26</sup>と述べているわけです。この例では、天皇霊は、天皇の臣下を守護する神霊として言及されていますが、天皇と敵対する集団に対する軍事的な威力を発揮する神霊として言及されている例もあります。

## Q 5.4.2 吉野裕子は、大嘗祭の祭神について、どんな説を唱えてるんですか。

吉野裕子は、大嘗祭の祭神は、天照大神(Q 2.4.1 参照)と太一(Q 5.1.5 参照)と天皇霊(Q 5.4.1 参照)が習合した神である、という説を唱えています<sup>27</sup>。

## Q 5.4.3 吉野裕子は、どういう根拠で、大嘗祭の祭神は天照大神と太一と天皇霊が習合した神だという説を唱えてるんですか。

大嘗祭の祭神は天照大神と太一と天皇霊が習合した神である、と吉野裕子が唱えている根拠は、大嘗祭と伊勢神宮の祭祀の形態が一致しているということ、および、大嘗祭というのは天皇が天皇霊を相続する祭祀であるということです。

吉野裕子によれば、大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、三つの重大な共通点があります。それは、祭祀時刻、祭祀方位、そして名称です。祭祀時刻についてはQ 5.4.4で、祭祀方位についてはQ 5.4.5で、名称についてはQ 5.4.6で説明することにしたいと思います。

## Q 5.4.4 大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、祭祀時刻について、どんな共通点があるんですか。

大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、午前0時をはさんで、その前と後に同じ祭祀を執行するという共通点があります。

Q 3.5.1で述べたように、大嘗祭における最も重要な祭祀は、「大嘗宮の儀」と呼ばれるものです。この祭祀は、Q 3.5.2で述べたように、「悠紀殿供饌の儀」と「主基殿供饌の儀」と呼ばれる二つの祭祀から構成されます。そして、それらの二つの祭祀が執行される時刻は、Q 3.5.3で述べたように、伝統的には、悠紀殿供饌の儀は午後9時ごろから午後11時ごろまでで、主基殿供饌の儀はその翌日の午前3時ごろから午前5時ごろまでです。

Q 2.7.12で述べたように、伊勢神宮では、10月15日から17日にかけて、新穀で作られた神饌や神酒を心御柱に奉る、「神嘗祭」と呼ばれる祭祀が執行されます。この祭祀では、「由貴大御饌」と呼ばれる神饌が、午後10時と翌日の午前2時の2回、心御柱に供えられます。

このように、大嘗宮の儀と神嘗祭との間には、午前0時をはさんで、その前と後に同じ祭祀を執行するという共通点があります。

<sup>23</sup>[佐々木,2010], p. 81.

<sup>24</sup>古代の日本人が海の彼方にあると想定した国。

<sup>25</sup>橘の古名。

<sup>26</sup>[宇治谷,1988], p. 151.

<sup>27</sup>[吉野,2000], pp. 170-172.

Q 5.1.10 で述べたように、十二支の子は、時刻としては午前0時を中心とする2時間に配当されています。ですから、大嘗宮の儀と神嘗祭は、子の刻をはさんで、その前と後に同じ祭祀を執行するということになります。

そして、十二支の子は、方角としては北を中心とする30度に配当されています。したがって、十二支の子は、北極星を神霊化した太一を象徴していると考えられます。

Q 5.4.5 大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、祭祀方位について、どんな共通点があるんですか。

大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、祭祀のための三つの建物の位置関係が、一つの建物を中心として67度の角度で他の二つの建物が建てられるという共通点があります。

Q 3.4.1 で述べたように、大嘗宮を構成している建物群のうちで最も重要なものは、「悠紀殿」、<sup>ゆきでん</sup>「主基殿」、<sup>すきでん</sup>「廻立殿」、<sup>かいりゅうでん</sup>と呼ばれる三つのものです。そして、Q 3.4.2 で述べたように、悠紀殿と主基殿は東西方向に並べて建てられ、廻立殿はそれらの中間点の真北に建てられます。

Q 2.7.4 の脚注で述べたように、伊勢神宮では、本殿のことを「正殿」、<sup>しょうでん</sup>と呼びます。皇大神宮の正殿の背後には、「宝殿」、<sup>ほうでん</sup>と呼ばれる二つの建物が東西方向に並べて建てられ、東の宝殿は「東宝殿」、西の宝殿は「西宝殿」と呼ばれます。

吉野裕子によれば、大嘗宮の廻立殿を中心とする悠紀殿と主基殿の角度と、皇大神宮の正殿を中心とする東宝殿と西宝殿の角度は、ともに67度です。この67度という角度は、北極星を中心とする北斗七星と南斗六星の角度と同じです。したがって、大嘗祭においては、廻立殿が太一、悠紀殿が北斗七星、主基殿が南斗六星の造型であり、伊勢神宮の祭祀においては、皇大神宮の正殿が太一、東宝殿が北斗七星、西宝殿が南斗六星の造型であると思われる、と吉野は述べています<sup>28</sup>。

Q 5.4.6 大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、名称について、どんな共通点があるんですか。

大嘗祭と伊勢神宮の祭祀とのあいだには、それにかかわる重要なものを指す言葉として「ユキ」という言葉が使われているという共通点があります。

Q 3.3.1 で述べたように、大嘗祭で神に供える神饌を作るための稲は、「悠紀」と「主基」と呼ばれる二つの異なる地方のそれぞれに位置する斎田で栽培されます。そして、悠紀で栽培された稲から作られた神饌を神に供える祭祀を執行する建物は「悠紀殿」、<sup>ゆきでん</sup>と呼ばれ、主基で栽培された稲から作られた神饌を神に供える祭祀を執行する建物は「主基殿」、<sup>すきでん</sup>と呼ばれます。

Q 2.7.10 で述べたように、伊勢神宮で10月に執行される神嘗祭、6月と12月に執行される<sup>つきなみのまつり</sup>月次祭という三つの祭祀は、「三節祭」、<sup>みつしのみまつり</sup>と呼ばれます。三節祭においては、Q 2.7.11 で述べたように、「由貴大御饌」、<sup>ゆきのおおみけ</sup>と呼ばれる神饌が、<sup>しんのみはしら</sup>心御柱に供えられます。

このように、大嘗祭と伊勢神宮の祭祀のあいだには、大嘗祭において神饌を作るための稲を栽培する地方の一つと、伊勢神宮の三節祭において心御柱に供えられる神饌が、どちらも「ユキ」と呼ばれるという、名称についての共通点があります。

Q 5.4.7 吉野裕子は、天皇霊というのはどんなものだと考えていたんですか。

吉野裕子は、<sup>てんのうれい</sup>天皇霊というのは、永遠不滅で恒常である宇宙そのものであると考えていたようです。

Q 5.4.4 で述べたように、大嘗祭と伊勢神宮の祭祀の時刻には、ともに十二支の子が深くかかわっています。吉野裕子によれば、十二支の子は、永遠不滅で恒常である宇宙そのものの象徴です<sup>29</sup>。天皇霊が宇宙そのものであるとすれば、それにかかわる祭祀の時刻において、それを象徴する十二支の子が重要な意味を持つことは、必然的だと言えます。

<sup>28</sup>[吉野,2000], pp. 160-163, pp. 136-140.

<sup>29</sup>[吉野,1998], p. 200.

## 第6章 天皇霊

### 6.1 「大嘗祭の本義」

#### Q 6.1.1 折口信夫って、どういう人なんですか。

折口信夫は、国文学者、民俗学者、歌人、詩人です。歌人、詩人としての雅号は、釈道空<sup>しやくちようくう</sup>です。折口信夫は、1887年（明治20年）に大阪に生まれ、1953年（昭和28年）に亡くなりました。国学院大学を卒業し、1919年（大正8年）に国学院大学の講師となり、のちに教授となりました。彼の業績は、「折口学」と称されます。主著は『古代研究』という論文集です。その他の著書として、『春のことぶれ』、『海山のあひだ』、『倭おぐな<sup>やまと</sup>』という歌集、『古代感愛集<sup>かんない</sup>』という詩集、『死者の書』という小説などがあります。

#### Q 6.1.2 「大嘗祭の本義」って何ですか。

「大嘗祭の本義<sup>ほんぎ</sup>」は、折口信夫が大嘗祭について論述した論文です。

この論文が最初に収録された書物は、1930年（昭和5年）に大岡山書店から刊行された『古代研究・民俗学篇二』という論文集です。

「大嘗祭の本義」は、その冒頭で次のように述べています。

最初には、演題を「民俗学より見たる大嘗祭」としてみたが、それでは、大嘗祭が軽い意義になりはせぬか、と心配して、それで「大嘗祭の本義」とした。<sup>1</sup>

この記述から、この論文は、同じ題名の講演に基づいて書かれたものであろうと推定されます。また、この論文の末尾では、次のように述べられています。

今年の十一月に行われる大嘗祭は、宮内省の方々も緊張して、できるだけ古の形をとる、といてられるから、有り難い大嘗祭を拜めることと思う。<sup>2</sup>

この記述から、この論文の元となった講演は、昭和天皇（裕仁<sup>ひろひと</sup>）が大嘗祭を執行した1928年（昭和3年）の1月から11月までの間に実施されたと考えられます。いつどこで実施された講演なのかということについては明らかではありませんが、中公クラシックス版『古代研究』の解題によれば、6月29日と30日の2日間にわたって「東筑摩郡教育会中央部支会」で実施されたものであるというのが有力な説です<sup>3</sup>。

「大嘗祭の本義」という題名を持つ論文としては、『古代研究』に収録されているもののほかに、「昭和三年十月九 拾日稿」と表紙に記された草稿が残されています。本書では、この草稿を、「大嘗祭の本義（別稿）」と呼ぶことにします。

#### Q 6.1.3 「大嘗祭の本義」って、どういう内容の論文なんですか。

「大嘗祭の本義」に書かれているのは、折口信夫が民俗学の立場から考察した大嘗祭の意味です。

「大嘗祭の本義」には、大嘗祭について様々なことが書かれていますが、それらのうちで後世に与えた影響が最も大きいものは、大嘗祭と天皇霊（Q 5.4.1 参照）との関係についての記述です。

折口信夫は天皇霊というものをどのようなものだと考えていたのかということについては、第6.2節で説明することにしたと思います。

折口信夫は、「大嘗祭の本義」の中で、天皇は大嘗祭において自身の身体に天皇霊を付着させる、という説を唱えています。この説については、第6.3節で説明することにしたと思います。

#### Q 6.1.4 「大嘗祭の本義（別稿）」って、どういう内容の論文なんですか。

「大嘗祭の本義（別稿）」の内容は、「大嘗祭の本義」と同様に、折口信夫が民俗学の立場から考察した大嘗祭の意味です。

大嘗祭と天皇霊（Q 5.4.1 参照）との関係についての考察は、「大嘗祭の本義（別稿）」にも含まれています。

<sup>1</sup>折口,2003], p. 123.

<sup>2</sup>折口,2003], p. 192.

<sup>3</sup>折口,2003], pp. 357–361.

Q 6.1.5 大嘗祭に関する折口信夫の説って、定説なんですか。

いいえ。大嘗祭に関する折口信夫の説は、定説になっているとは言えません。

大嘗祭に関する折口信夫の説は、実証性が乏しいものですので、それが正しいかどうかということについては、現在もなお、議論が続いています。

大嘗祭に関する折口信夫の説に対する批判的な見解については、第6.4節で紹介することにしたと思います。

## 6.2 天皇霊についての折口説

Q 6.2.1 外来魂って何ですか。

「外来魂」というのは、人間の外から来て、人間の身体に入った靈魂のことです。

折口信夫は「大嘗祭の本義」の中で、冬祭りの「ふゆ」には「触れる」という意味があり、古代信仰においては、冬祭りというのは人間が外来魂を身体に付着させる祭りだったと述べています<sup>4</sup>。

Q 6.2.2 マナって何ですか。

「マナ」(mana) は、原始的な宗教における超自然的で非人格的な力を意味する、宗教学で使われる言葉です。

マナは、ポリネシアやメラネシアの宗教において観察される観念です。ポリネシアの宗教においては、マナは、神々(「アツア」(atua) と呼ばれる)と人間との親族関係に由来するもので、部族の首長はそれを体現していると考えられています。

折口信夫は「大嘗祭の本義」の中で、外来魂について次のように述べています。

此魂は、外から来るもので、西洋で謂ふ処の まなあ である。<sup>5</sup>

ここで述べられている「まなあ」というのは、マナのことであろうと考えられています。すなわち、折口は、外来魂というのはマナであると考えていたということです。

Q 6.2.3 折口信夫は、天皇霊というのはどういうものだと考えてたんですか。

折口信夫は、天皇霊というのは、天皇の身体に入った外来魂だと考えていました。

Q 5.4.1 で述べたように、『日本書紀』の中では、天皇霊を意味する言葉がしばしば使われています。しかし、それらの記述から、天皇霊というのは天皇の内部で発生したものなのか、それとも天皇の外部に存在していたものが天皇に入ったものなのか、ということを読み取ることはできません。この問題について、折口信夫は、「大嘗祭の本義」の中で次のように述べています。

此 すめみまの命 に、天皇霊が這入つて、そこで、天子様はえらい御方となられるのである。<sup>6</sup>

この記述の中で使われている「天子様」という言葉は、天皇を意味しています。そして、「すめみまの命」という言葉については、この記述の直前で次のように説明されています。

恐れ多い事であるが、昔は、天子様の御身体は、魂の容れ物である、と考へられて居た。天子様の御身体の事を すめみまのみこと と申し上げて居た。みま は本来、肉体を申し上げる名称で、御身体といふ事である。尊い御子孫の意味であるとされたのは、後の考へ方である。すめ は、神聖を表す詞で、すめ神のすめ と同様である。<sup>7</sup>

Q 6.2.4 折口信夫は、天皇霊はそれぞれの天皇ごとに異なるものが存在すると考えてたんですか。

いいえ。折口信夫は、天皇霊はただ一つだけが存在していて、歴代の天皇の肉体に入った天皇霊は、どれも同じものだと考えていました。

天皇霊は一つなのか、それとも天皇ごとに異なるものが存在するのか、という問題について、折口信夫は「大嘗祭の本義」の中で次のように述べています。

<sup>4</sup>[折口,1979], pp. 216–217.

<sup>5</sup>[折口,1979], p. 217.

<sup>6</sup>[折口,1979], p. 220.

<sup>7</sup>[折口,1979], p. 220.

此 すめみまの命 である御身体即、肉体は、生死があるが、此肉体を充す処の魂は、終始一貫して不変である。故に譬ひ、肉体は変わっても、此魂が這入ると、全く同一な天子様となるのである。<sup>8</sup>

Q 6.2.5 折口信夫は、初めて天皇霊を持つことになったのは神武天皇だと考えてたんですか。

いいえ。折口信夫は、初めて天皇霊を持つことになったのは、記紀神話において初代の天皇とされている神武天皇（彦火火出見）ではなく、彼の曾祖父に当る瓊瓊杵尊だと考えていました。瓊瓊杵尊は、Q 2.5.2 で述べたように、記紀神話の天孫降臨のエピソードに登場する、高天原から葦原の中つ国に降臨した神で、天照大神の孫に当る神です。

折口信夫は、天皇霊について、「大嘗祭の本義」の中で次のように述べています。

古代日本の考へ方によれば、血統上では、先帝から今上天皇が、皇位を継承した事になるが、信仰上からは、先帝も今上も皆同一で、等しく天照大神の御孫で居られる。御身体は御一代毎に変わるが、魂は不変である。すめみまの命 という詞は、決して、天照大神の末の子孫の方々といふ意味ではなく、御孫といふ事である。天照大神との御関係は、にぎの尊 も、神武天皇も、今上天皇も同一である。<sup>9</sup>

この記述から、折口信夫は、初めて天皇霊を持つことになったのは瓊瓊杵尊であると考えていたということが分かります。

### 6.3 真床覆衾についての折口説

Q 6.3.1 折口信夫は、天皇霊というのは、いつ天皇の身体に付着すると考えてたんですか。

折口信夫は、天皇霊は大嘗宮の儀のときに天皇の身体に付着すると考えていました。

折口信夫は、「大嘗祭の本義」の中で次のように述べています。

大嘗祭の時の、悠紀・主基両殿の中には、ちゃんと御寝所が設けられてあつて、蓐・衾がある。褥を置いて、掛け布団や、枕も備へられてある。此は、日の皇子となられる御方が、資格完成の為に、此御寝所に引き籠つて、深い御物忌みをなされる場所である。実に、重大なる鎮魂の行事である。此处に設けられて居る衾は、魂が身体へ這入るまで、引き籠つて居る為のものである。<sup>10</sup>

折口信夫は、「鎮魂」という言葉にはいくつかの意味があるが、その第一義は外来魂を身に付けることだと述べています<sup>11</sup>。ここでは、「鎮魂」という言葉が、その第一義で使われていると思われる。

この引用文から分かるように、折口信夫は、悠紀殿と主基殿のそれぞれで執行される、天皇が衾（掛け布団）に引き籠るといふ祭祀のときに、天皇霊という外来魂が天皇の身体に付着するのだ、と考えていました。

Q 6.3.2 大嘗宮の儀で天皇が掛け布団に引き籠るっていう祭祀は、本当にあるんですか。

それは不明です。大嘗宮の儀において天皇が衾（掛け布団）に引き籠るといふ祭祀がある、ということ裏付ける確実な資料は存在しません。

ですから、天皇霊が天皇の身体に付着するのは、大嘗宮の儀において天皇が衾に引き籠っているときである、という折口信夫の主張は、あくまで仮説であつて、資料によって裏付けられていないわけではありません。

ただし、悠紀殿と主基殿のそれぞれには寝所が設けられている、という点については事実です。

Q 2.9.7 で述べたように、新嘗祭においては、それが執行される神嘉殿の中に、「寝座」と呼ばれる、長方形の敷物を何重にも重ねたものが準備されて、その上に衾が掛けられます。大嘗祭というのは規模の大きな新嘗祭ですから、悠紀殿と主基殿のそれぞれにも寝座が準備されます。

<sup>8</sup> [折口,1979], p. 220.

<sup>9</sup> [折口,1979], pp. 221-222.

<sup>10</sup> [折口,1979], p. 221.

<sup>11</sup> [折口,1979], pp. 216-218.

Q 6.3.3 折口信夫が、初めて天皇霊を持つことになったのは瓊瓊杵尊であると考えていたということと、天皇は掛け布団に引き籠ることによって天皇霊を身体に付着させると考えていたこととの間には、何か関係があるんですか。

はい。折口信夫が、初めて天皇霊を持つことになったのは瓊瓊杵尊であると考えていたということと、天皇は衾ふすまに引き籠ることによって天皇霊を身体に付着させると考えていたこととの間には、何らかの関係があると思われます。

折口信夫は、「大嘗祭の本義」の中で次のように述べています。

日本紀の神代の巻を見ると、此布団の事を、真床襲衾マドコオフスマと申して居る。彼のにゝぎの尊が天降りせられる時には、此を被つて居られた。此真床襲衾マドコオフスマこそ、大嘗祭の褥裳を考へるよすがともなり、皇太子ヒツギノミコの物忌みの生活を考へるよすがともなる。物忌みの期間中、外の日を避ける為にかぶるものが、真床襲衾である。此を取り除いた時に、完全な天子様となるのである。  
12

ここで折口信夫が「真床襲衾マドコオフスマ」と述べているのは、表記と読み方が少し違いますが、Q 2.5.5で説明した「真床覆衾まどこあうふすま」のことです。つまり、『日本書紀』が語る神話において、高皇産霊尊が葦原の中つ国に瓊瓊杵尊を降臨させるときに彼をそれで覆ったとされる掛け布団のことです。

折口信夫は、真床覆衾まどこあうふすまに覆われることが、天皇が天皇霊を身体に付着させるために必要だと考えていました。ですから、悠紀殿と主基殿のそれぞれに準備される衾を真床覆衾とみなして、天皇は、その中に引き籠ることによって天皇霊を身体に付着させるのだと考えたのです。

したがって、『日本書紀』で語られている、高皇産霊尊が瓊瓊杵尊を真床覆衾で覆ったというエピソードが、初めて天皇霊を持つことになったのは瓊瓊杵尊であると折口信夫が考えていたことの背景にあると考えられます。

## 6.4 折口説に対する批判

Q 6.4.1 真床覆衾に関する折口信夫の説って、定説になってるんですか。

いいえ。真床覆衾まどこあうふすまに関する折口信夫の説は、それを擁護している学者もいますが、それに対して異を唱えている学者もいますので、定説になっているとまでは言えません。

Q 6.4.2 真床覆衾に関する折口信夫の説を擁護してる学者って、その説をどんなふうに擁護してるんですか。

真床覆衾に関する折口信夫の説を擁護している学者が指摘していることは、天皇霊の受け渡しには何らかの呪術的な儀式があるのではないかということ、そして、瓊瓊杵尊の降臨と大嘗祭との間にある、寝具という共通点です。

折口信夫の説を擁護している学者の一人である津田博幸は、次のように述べています。

大嘗祭の寝具 = 真床襲衾 = 天皇霊のたまふりとする折口説には批判もある。今のところ筆者にはこの折口説を立証するだけの準備はないが、これを簡単に捨て去るわけにはゆかないと思う。これまで縷々述べ来たように、天皇家の血のカリスマを保証する魂を先帝から新帝へ受け渡す呪術的な儀式が存しても不思議はないと思うからである。ニニギノミコは真床襲衾に包まれて「伊都能知和岐知和岐弓」地上へ降りてきた。この伝承の示唆するところをもう一度考え直してみる必要があるのではないか。<sup>13</sup>

ちなみに、この引用文の中に引用されている「伊都能知和岐知和岐弓」という言葉は、「いつのちわきちわきて」と読みます。「神威をもって道をかき分けかき分けて<sup>14</sup>」という意味です。これは、『古事記』に書かれている言葉で、瓊瓊杵尊が降臨する様子について語ったものです。

Q 6.4.3 真床覆衾に関する折口信夫の説に異を唱えてる学者って、その説にどんなふうに異を唱えてるんですか。

<sup>12</sup>[折口,1979], p. 222。「よすが」に付せられた傍点を省略した。

<sup>13</sup>[津田,1986b], pp. 7-8。

<sup>14</sup>[次田,1977], p. 178。



真床覆衾に関する折口信夫の説に異を唱えている学者が指摘していることは、大嘗宮の中に準備される寝具は大嘗祭の祭神がそこで休むためのものであって、天皇がそこに引き籠るという儀式はないということです。

折口信夫の説に異を唱えている学者の一人である岡田<sup>しょうじ</sup> 莊司は、次のように述べています。

嘗殿内に設けられた神座（寝具をおいた寝座）は客人として迎えられた神祖（天照大神）がお休みになされるために、見立てられた「神聖な場」であり、ここには天皇といえども近寄ることは許されなかったであろう。<sup>15</sup>

Q 6.4.4 大嘗宮の中に準備された寝具に天皇が引き籠るという儀式はないという説には、どんな根拠があるんですか。

大嘗宮の中に準備された寝具に天皇が引き籠るという儀式はないという説の根拠としては、大嘗宮の儀の所作について述べられた記録に、そのような儀式への言及がないということが指摘されています。

岡田<sup>しょうじ</sup> 莊司は、大嘗宮の中に準備された寝具に天皇が引き籠るという儀式はないという自身の説の根拠として、藤原<sup>ふじわらのただむね</sup> 忠通が書いた『大嘗会卯日御記』という記録の中に、寝座での所作が何も書かれていないということを指摘しています<sup>16</sup>。

藤原忠通は、崇徳天皇（<sup>あきひと</sup> 顕仁）と近衛天皇（<sup>このゑ</sup> 体仁）の摂政を務めた人で、『大嘗会卯日御記』は、1123年（保安4年）に執行された崇徳天皇の大嘗祭について彼が記録したものです。

大嘗宮の儀を天皇以外の者が代行するということはできないのですが、崇徳天皇が大嘗宮の儀を執行したとき、天皇の年齢は4歳でしたので、摂政である忠通が天皇の近くに控えて、大部分の所作を代行せざるを得ませんでした。したがって、『大嘗会卯日御記』には、大嘗宮の儀の所作が詳細に記録されています。それにもかかわらず、寝具が準備されている神座での所作については、何も書かれていません。

Q 6.4.5 大嘗宮の中に準備される寝具は大嘗祭の祭神がそこで休むためのものだという説には、どういう根拠があるんですか。

大嘗宮の中に準備される寝具は大嘗祭の祭神がそこで休むためのものだという説を裏付ける確実な資料は、存在しません。

したがって、大嘗宮の中に準備される寝具は大嘗祭の祭神がそこで休むためのものだという説も、真床覆衾に関する折口信夫の説と同様に、あくまで仮説です。

## 参考文献

[赤坂,1989] 赤坂憲雄、「天皇と王権」、『別冊宝島』、第94号、「もっと知りたいあなたのための天皇制・入門」、JICC出版局、1989年6月、pp. 9-32。

[赤坂,2007] 赤坂憲雄、『象徴天皇という物語』、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2007、ISBN 978-4-480-09099-7。

[浅野,2006] 浅野裕一、『古代中国の宇宙論』、岩波書店、2006、ISBN 978-4-00-022863-3。

[石井,2011] 石井良助、『天皇：天皇の生成および不親政の伝統』、講談社学術文庫、講談社、2011、ISBN 978-4-06-292059-9。

[伊藤,2012] 伊藤聡、『神道とは何か：神と仏の日本史』、中公新書、2158、中央公論新社、2012、ISBN 978-4-12-102158-8。

[稲田智宏,2007] 稲田智宏、『三種の神器：謎めく天皇家の秘宝』、学研新書、001、学習研究社、2007、ISBN 978-4-05-403469-3。

[井上亮,2013] 井上亮、『天皇と葬儀：日本人の死生観』、新潮選書、新潮社、2013、ISBN 978-4-10-603737-5。

[井上光貞,1965] 井上光貞、『神話から歴史へ』、日本の歴史、1、中央公論社、1965。

[入江,1979] 入江相政（編）、『宮中歳時記』、TBSブリタニカ、1979。

<sup>15</sup>[岡田<sup>しょうじ</sup> 莊司,1990], p. 49。

<sup>16</sup>[岡田<sup>しょうじ</sup> 莊司,1990], pp. 32-33。

- [岩谷,1988] 岩谷利夫、『大嘗祭の今日的意義』、錦正社、1988、ISBN 978-4-7646-0209-0。
- [宇治谷,1988] 『日本書紀』、上巻、宇治谷孟(訳)、講談社学術文庫、講談社、1988、ISBN 978-4-06-158833-2。
- [遠藤,2016] 遠藤慶太、『六国史：日本書紀に始まる古代の「正史」』、中公新書、2362、中央公論新社、2016、ISBN 978-4-12-102362-9。
- [呉,2004] 呉善花、『女帝論：「天皇制度」の源流を訪ねて』、PHP 研究所、2004、ISBN 978-4-569-63648-1。
- [大山,2017] 大山誠一、『神話と天皇』、平凡社、2017、ISBN 978-4-582-46910-3。
- [岡田莊司,1990] 岡田莊司、『大嘗の祭り』、学生社、1990、ISBN 978-4-311-20160-8。
- [岡田精司,1979] 岡田精司、「解説」、岡田精司(編)、『大嘗祭と新嘗』、学生社、1979、pp. 255-268。
- [岡田芳朗,2006] 岡田芳朗、伊東和彦、後藤晶男、松井吉昭、『暦を知る事典』、東京堂出版、2006、ISBN 978-4-490-10686-2。
- [岡田芳朗,2015] 岡田芳朗、『改訂新版・旧暦読本：日本の暮らしを愉しむ「こよみ」の知恵』、創元社、2015、ISBN 978-4-422-23037-5。
- [長部,1996] 長部日出雄、『天皇はどこから来たか』、新潮文庫、6663、新潮社、1996、ISBN 978-4-10-132402-9。
- [長部,2008] 長部日出雄、『「古事記」の真実』、文春新書、649、文芸春秋、2008、ISBN 978-4-16-660649-8。
- [折口,1979] 折口信夫、「大嘗祭の本義」、岡田精司(編)、『大嘗祭と新嘗』、学生社、1979、pp. 205-254。
- [折口,2003] 折口信夫、『古代研究 II：祝詞の発生』、中公クラシックス、J13、中央公論新社、2003、ISBN 978-4-12-160045-5。
- [折口,2011] 折口信夫(著)、安藤礼二(編)、『折口信夫天皇論集』、講談社文芸文庫、講談社、2011、ISBN 978-4-06-290123-9。
- [笠原,2008] 笠原英彦、『象徴天皇制と皇位継承』、ちくま新書、719、筑摩書房、2008、ISBN 978-4-480-06417-2。
- [鎌田,2007] 鎌田純一、『神道概説』、学生社、2007、ISBN 978-4-311-20312-1。
- [鎌田,2011] 鎌田純一、『平成大礼要話：即位礼・大嘗祭』、錦正社、2011、ISBN 978-4-7646-0262-5。
- [工藤,2006] 工藤隆、『古事記の起源：新しい古代像をもとめて』、中公新書、1878、中央公論新社、2006、ISBN 978-4-12-101878-6。
- [工藤,2017] 工藤隆、『大嘗祭：天皇制と日本文化の源流』、中公新書、2462、中央公論新社、2017、ISBN 978-4-12-102462-6。
- [久能,2013] 久能靖、『カラー図説・天皇の祈りと宮中祭祀』、勉誠出版、2013、ISBN 978-4-585-23022-9。
- [窪,1986] 窪徳忠、『道教の神々』、平河出版社、1986、ISBN 978-4-89203-098-7。
- [倉西,2004] 倉西裕子、『「記紀」はいかにして成立したか：「天」の史書と「地」の史書』、講談社選書メチエ、301、講談社、2004、ISBN 978-4-06-258301-5。
- [小島,2018] 小島毅、『天皇と儒教思想：伝統はいかに創られたのか?』、光文社新書、948、光文社、2018、ISBN 978-4-334-04354-4。
- [御大礼記録,1916] 『御大礼記録』、朝日新聞社、1916。
- [児玉,1993] 児玉幸多(編)、『天皇』、日本史小百科、東京堂出版、1993、ISBN 978-4-490-20207-6。
- [小林,2016] 小林正弥、『神社と政治』、角川新書、KADOKAWA、2016、ISBN 978-4-04-082095-8。
- [小堀,1986] 小堀桂一郎、『今上天皇論』、教文選書、日本教文社、1986、ISBN 978-4-531-01504-7。

- [小松,2007] 小松和彦、『妖怪学新考：妖怪からみる日本人の心』、洋泉社 MC 新書、018、洋泉社、2007、ISBN 978-4-86248-180-1。
- [小谷野,2010] 小谷野敦、『天皇制批判の常識』、新書 y、231、洋泉社、2010、ISBN 978-4-86248-517-5。
- [斎藤,2009] 斎藤吉久、『天皇の祈りはなぜ簡略化されたか：宮中祭祀の危機』、並木書房、2009、ISBN 978-4-89063-239-8。
- [阪本,2011] 阪本是丸、石井研士（編）、『プレステップ神道学』、PRE-STEP、09、弘文堂、2011、ISBN 978-4-335-00079-9。
- [佐々木,2010] 佐々木聖使、『天皇霊と皇位継承儀礼』、新人物往来社、2010、ISBN 978-4-404-03817-3。
- [昭和時代研究会,1988] 昭和時代研究会（編）、『天皇・皇室を知っていますか』、KADOKAWA BOOKS、角川書店、1988、ISBN 978-4-04-706048-7。
- [神宮司庁,1988] 神宮司庁、『お伊勢まいり』、神宮司庁、1988。
- [新谷,2009] 新谷尚紀、『伊勢神宮と出雲大社：「日本」と「天皇」の誕生』、講談社選書メチエ、434、講談社、2009、ISBN 978-4-06-258434-0。
- [新谷,2013] 新谷尚紀、『伊勢神宮と三種の神器：古代日本の祭祀と天皇』、講談社選書メチエ、562、講談社、2013、ISBN 978-4-06-258565-1。
- [新谷,2018] 新谷尚紀、『神道入門：民俗伝承学から日本文化を読む』、ちくま新書、1330、筑摩書房、2018、ISBN 978-4-480-07122-4。
- [菅田,2009] 菅田正昭、『図解・神道がよくわかる：日々の暮らしに生きる神道の教えと行事』、日文新書、日本文芸社、2009、ISBN 978-4-537-25729-8。
- [鈴木,1993] 鈴木正幸、『皇室制度：明治から戦後まで』、岩波新書（新赤版）、289、岩波書店、1993、ISBN 978-4-00-430289-6。
- [稲田義行,2011] 稲田義行、『癒しと救いの五行大義』、現代書林、2011、ISBN 978-4-7745-1321-8。
- [稲田義行,2016] 稲田義行、『現代に息づく陰陽五行・増補改訂版』、日本実業出版社、2016、ISBN 978-4-534-05370-1。
- [千田,2005] 千田稔、『伊勢神宮：東アジアのアマテラス』、中公新書、1779、中央公論新社、2005、ISBN 978-4-12-101779-6。
- [千田,2013] 千田稔、『古事記の宇宙：神と自然』、中公新書、2211、中央公論新社、2013、ISBN 978-4-12-102211-0。
- [高取,1993] 高取正男、『神道の成立』、平凡社ライブラリー、5、平凡社、1993、ISBN 978-4-582-76005-7。
- [高橋徹,1994] 高橋徹、『古代日本と道教』、『別冊歴史読本』、第19巻第8号、特別増刊37、「道教」の大事典』、新人物往来社、1994年3月、pp. 368-371。
- [高橋紘,1987] 高橋紘、『象徴天皇』、岩波新書（黄版）、372、岩波書店、1987、ISBN 978-4-00-420372-8。
- [高橋紘,1998] 高橋紘、所功、『皇位継承』、文春新書、001、文芸春秋、1998、ISBN 978-4-16-660001-4。
- [高橋紘,2018] 高橋紘、所功、『皇位継承・増補改訂版』、文春新書、1163、文芸春秋、2018、ISBN 978-4-16-661163-8。
- [高森,1990] 高森明勅、『天皇と民の大嘗祭』、展転社、1990、ISBN 978-4-88656-054-4。
- [多木,2002] 多木浩二、『天皇の肖像』、岩波現代文庫、学術76、岩波書店、2002、ISBN 978-4-00-600076-9。
- [武澤,2011] 武澤秀一、『伊勢神宮の謎を解く：アマテラスと天皇の「発明」』、ちくま新書、895、筑摩書房、2011、ISBN 978-4-480-06599-5。
- [武澤,2013] 武澤秀一、『伊勢神宮と天皇の謎』、文春新書、908、文芸春秋、2013、ISBN 978-4-

- 16-660908-6。
- [武田,1995] 武田秀章、「皇位と皇位継承の基礎知識」、『歴史読本』、第40巻第3号、新人物往来社、1995年2月、pp. 135-145。
- [武光,2007] 武光誠、『天皇の日本史』、平凡社新書、372、平凡社、2007、ISBN 978-4-582-85372-8。
- [武光,2009] 武光誠、『一冊でつかむ天皇と古代信仰』、平凡社新書、462、平凡社、2009、ISBN 978-4-582-85462-6。
- [武光,2014] 武光誠、『神道——日本が誇る「仕組み」』、朝日新書、474、朝日新聞出版、2014、ISBN 978-4-02-273574-4。
- [武光,2017] 武光誠、『誰が天照大神を女神に変えたのか』、PHP新書、1075、PHP研究所、2017、ISBN 978-4-569-83247-0。
- [田中,1975a] 田中初夫、『践祚大嘗祭・研究篇』、木耳社、1975。
- [田中,1975b] 田中初夫、『践祚大嘗祭・資料篇』、木耳社、1975。
- [谷川,1990] 谷川健一、『大嘗祭の成立：民俗文化論からの展開』、小学館、1990、ISBN 978-4-09-626174-3。
- [田村,2009] 田村圓澄、『伊勢神宮の成立』、歴史文化セレクション、吉川弘文館、2009、ISBN 978-4-642-06351-7。
- [千葉,2011] 千葉慶、『アマテラスと天皇：政治シンボルの近代史』、歴史文化ライブラリー、334、吉川弘文館、2011、ISBN 978-4-642-05734-9。
- [茶谷,2017] 茶谷誠一、『象徴天皇制の成立：昭和天皇と宮中の「葛藤」』、NHKブックス、1244、NHK出版、2017、ISBN 978-4-14-091244-7。
- [次田,1977] 『古事記』、上巻、次田真幸（訳注）、講談社学術文庫、207、講談社、1977、ISBN 978-4-06-158207-1。
- [津田,1986a] 津田博幸、「天皇霊の考察その一：折口名彙研究を主軸として」、『三田國文』、第5号、慶應義塾大学国文学研究室、1986年6月、pp. 1-15。
- [津田,1986b] 津田博幸、「天皇霊の考察その二：記紀・続紀をめぐって」、『三田國文』、第6号、慶應義塾大学国文学研究室、1986年12月、pp. 1-8。
- [津田,1989] 津田博幸、「天皇がまとう魂」、『別冊宝島』、第94号、「もっと知りたいあなたのための天皇制・入門」、JICC出版局、1989年6月、pp. 132-151。
- [天文の事典,1987] 『平凡社版・天文の事典』、平凡社、1987、ISBN 978-4-582-11504-8。
- [所,1977] 所功、『日本の年号：揺れ動く元号問題の原点』、カルチャーブックス、13、雄山閣出版、1977。
- [所,1993] 所功、『伊勢神宮』、講談社学術文庫、講談社、1993、ISBN 978-4-06-159068-7。
- [所,2009] 所功、『天皇の「まつりごと」：象徴としての祭祀と公務』、生活人新書、291、日本放送出版協会、2009、ISBN 978-4-14-088291-7。
- [土肥,1988] 土肥昭夫、戸村政博（編）、『天皇の代替わりとわたしたち』、日本基督教団出版局、1988。
- [中澤,2010] 中澤伸弘、『宮中祭祀：連綿と続く天皇の祈り』、展転社、2010、ISBN 978-4-88656-346-0。
- [中島,1990] 中島三千男、「現代天皇制に関する二、三の問題」、『法律時報』、第62巻第12号、日本評論社、1990年6月、pp. 86-91。
- [中村,1989] 中村生雄、「大嘗祭：その空虚な秘密」、『仏教』、別冊2、法蔵館、1989年11月、pp. 48-58。
- [長山,2011] 長山靖生、『天皇はなぜ滅びないのか』、新潮選書、新潮社、2011、ISBN 978-4-10-603686-6。
- [日本文化研究所,1990] 日本文化研究所（編）『大嘗祭の思想と歴史』、日本文化研究所、1990。
- [野坂,1986] 野坂昭如、菅孝行、『天皇制にこだわる：天皇依存症の研究』、明石書店、1986。

- [平野,1987] 平野孝國、『大嘗祭の構造・第二版』、ペリかん社、1987。
- [平林,2015] 平林章仁、『天皇はいつから天皇になったか?』、祥伝社新書、423、祥伝社、2015、ISBN 978-4-396-11423-7。
- [福永,1982] 福永光司、『道教と日本文化』、人文書院、1982。
- [藤田覚,1994] 藤田覚、『幕末の天皇』、講談社選書メチエ、26、講談社、1994、ISBN 978-4-06-258026-7。
- [藤田省三,1966] 藤田省三、『天皇制国家の支配原理』、未来社、1966。
- [藤巻,2009] 藤巻一保、『天皇の秘教』、学習研究社、2009、ISBN 978-4-05-403972-8。
- [マスペロ,2000] アンリ・マスペロ、『道教』、川勝義雄(訳)、平凡社ライブラリー、321、平凡社、2000、ISBN 978-4-582-76321-8。
- [松前,1979] 松前健、『大嘗祭と記紀神話』、岡田精司(編)、『大嘗祭と新嘗』、学生社、1979、pp. 139-189。
- [松本郁代,2017] 松本郁代、『天皇の即位儀礼と神仏』、吉川弘文館、2017、ISBN 978-4-642-08321-8。
- [松本直樹,2016] 松本直樹、『神話で読みとく古代日本：古事記・日本書紀・風土記』、ちくま新書、1192、筑摩書房、2016、ISBN 978-4-480-06895-8。
- [真弓,1988] 真弓常忠、『大嘗祭』、国書刊行会、1988、ISBN 978-4-336-01543-3。
- [真弓,1989] 真弓常忠、『大嘗祭の世界』、学生社、1989、ISBN 978-4-311-20145-5。
- [真弓,1990] 真弓常忠、『日本の祭り和大嘗祭』、朱鷺書房、1990、ISBN 978-4-88602-125-0。
- [真弓,1997] 真弓常忠、『古代祭祀の構造と発達』、臨川書店、1997、ISBN 978-4-653-03306-6。
- [三浦周行,1985] 三浦周行、『復刻版・即位礼と大嘗祭』、神社新報社、1985、ISBN 978-4-915265-62-4。
- [三浦正幸,2013] 三浦正幸、『神社の本殿：建築にみる神の空間』、歴史文化ライブラリー、362、吉川弘文館、2013、ISBN 978-4-642-05762-2。
- [溝口,2009] 溝口睦子、『アマテラスの誕生：古代王権の源流を探る』、岩波新書(新赤版)、1171、岩波書店、2009、ISBN 978-4-00-431171-3。
- [三橋,2007] 三橋健、『神社の由来がわかる小事典』、PHP新書、469、PHP研究所、2007、ISBN 978-4-569-69396-5。
- [村上,1977] 村上重良、『天皇の祭祀』、岩波新書(青版)、993、岩波書店、1977、ISBN 978-4-00-412165-7。
- [村上,1988] 村上重良、『日本宗教事典』、講談社学術文庫、講談社、1988、ISBN 978-4-06-158837-0。
- [村上,1990] 村上重良、『天皇の即位と大嘗祭』、『紀要』、第1号、東京神学大学、1990年3月、pp. 80-100。
- [村上,2007] 村上重良、『天皇制国家と宗教』、講談社学術文庫、講談社、2007、ISBN 978-4-06-159832-4。
- [森田悌,1991] 森田悌、『大嘗祭・神今食の祭神』、『教科教育研究』、第27号、金沢大学教育学部、1991年7月、pp. 180-173。
- [森田登代子,2015] 森田登代子、『遊楽としての近世天皇即位式：庶民が見物した皇室儀式の世界』、ミネルヴァ書房、2015、ISBN 978-4-623-07189-0。
- [八木,2006] 八木秀次、『日本人なら知っておきたい! Q&A で分かる天皇制度』、扶桑社、2006、ISBN 978-4-594-05200-3。
- [山折,1993] 山折哲雄、『神と王権のコスモロジー』、吉川弘文館、1993、ISBN 978-4-642-07391-2。
- [山折,2010] 山折哲雄、『天皇の宮中祭祀と日本人：大嘗祭から謎解く日本の真相』、日本文芸社、2010、ISBN 978-4-537-25736-6。

- [山折,2014] 山折哲雄、『天皇と日本人：「皇室の危機」の本質はどこにあるのか』、大和書房、2014、ISBN 978-4-479-84079-4。
- [山下,2009] 山下紘一郎、『神樹と巫女と天皇：初期柳田国男を読み解く』、梟社、2009、ISBN 978-4-7877-6322-8。
- [吉野,1983] 吉野裕子、『陰陽五行と日本の民俗』、人文書院、1983、ISBN 978-4-409-54010-7。
- [吉野,1989] 吉野裕子、「「記紀」の中の陰陽五行思想」、『別冊歴史読本・事典シリーズ』、第2号、「『古事記』『日本書紀』総覧」、新人物往来社、1989年6月、pp. 134-138。
- [吉野,1998] 吉野裕子、『陰陽五行と日本の天皇』、人文書院、1998、ISBN 978-4-409-54053-4。
- [吉野,2000] 吉野裕子、『天皇の祭り：大嘗祭＝天皇即位式の構造』、講談社学術文庫、講談社、2000、ISBN 978-4-06-159455-5。
- [吉野,2014] 吉野裕子、『隠された神々：古代信仰と陰陽五行』、河出文庫、河出書房新社、2014、ISBN 978-4-309-41330-3。
- [吉野,2016] 吉野裕子、『日本古代呪術：陰陽五行と日本原始信仰』、講談社学術文庫、講談社、2016、ISBN 978-4-06-292359-0。
- [吉村,1998] 吉村武彦、『古代天皇の誕生』、角川選書、297、角川学芸出版、1998、ISBN 978-4-04-703297-2。
- [ルオフ,2009] ケネス・ルオフ、『国民の天皇：戦後日本の民主主義と天皇制』、木村剛久、福島睦男（訳）、岩波現代文庫、学術214、岩波書店、2009、ISBN 978-4-00-600214-5。
- [歴科協,2008] 歴史科学協議会（編）、『天皇・天皇制をよむ』、東京大学出版会、2008、ISBN 978-4-13-023054-4。
- [歴史読本,2009] 『歴史読本』編集部（編）、『総図解・よくわかる天皇家の歴史』、新人物往来社、2009、ISBN 978-4-404-03748-0。
- [和歌森,1973] 和歌森太郎、『天皇制の歴史心理』、弘文堂、1973。

## 索引

- 愛知県, 39  
 饗, 31  
 梧桐, 53  
 赤澤文治, 4  
 暁の儀, 32  
 贖物, 52  
 秋田県, 39  
 顕仁, 65  
 明仁, 37, 39-43, 50, 51  
 朝仁, 49, 51, 53  
 アジア太平洋戦争, 19, 20  
 脚摩乳, 22  
 葦原の中つ国, 12, 22  
 檳榔, 52  
 飛鳥浄御原令, 47  
 飛鳥時代, 9  
 阿須波神, 40  
 アツア, 62  
 敦仁, 26, 50  
 熱田神宮, 25  
 敦成, 52  
 安殿, 51, 52  
 阿倍, 19  
 阿閉, 11, 46  
 天つ神, 12  
 天照大神, 5, 17, 18, 21-26, 30, 34, 35, 37, 44, 45, 56-59, 63  
 天の岩屋, 21, 24, 25, 35  
 天香具山, 22, 24  
 天渟中原瀛真人, 46  
 天の安の河原, 22  
 天鈿女命, 22, 24, 35  
 天児屋命, 24  
 天の羽衣, 43  
 天之御中主神, 12  
 天御量柱, 28  
 天御柱, 28  
 天叢雲剣, 24  
 天命開別, 16, 46  
 嵐山, 52  
 荒妙, 58  
 荒祭宮, 58  
 荒御魂, 58  
 一書, 11  
 案, 7, 40  
 行宮, 51  
 行在所, 51  
 安徳天皇, 16, 25  
 生産日神, 34  
 活目入彦五十狭茅, 27, 59  
 伊弉諾尊, 12, 21  
 伊弉冉尊, 12, 21  
 伊雑宮, 57  
 石凝姥命, 24  
 称唯, 34  
 出雲, 11  
 出雲大社, 8  
 出雲の国, 22  
 出雲国風土記, 11  
 イスラーム, 4  
 伊勢神宮, 21, 25, 26, 30, 32, 46, 57, 58  
 市杵島姫命, 8  
 一条兼良, 45  
 厳島神社, 8  
 乙巳の変, 19  
 一世一元の制, 15  
 五部神, 23, 24  
 一拝, 7  
 糸結びの儀, 35  
 稻舂歌, 43, 44  
 稻実殿, 40  
 諱, 15  
 忌柱, 28  
 入母屋造, 9  
 磐座, 6  
 磐境, 6  
 忌火屋殿, 28  
 斎部氏, 24  
 陰陽家, 54  
 陰陽五行思想, 54, 56  
 陰陽五行説, 54  
 陰陽説, 54  
 宇気槽, 35  
 宇多天皇, 26  
 内削, 10, 27, 41  
 畝傍山, 46  
 采女, 43  
 鵜野讃良, 46, 47  
 梅の間, 17  
 上溝桜, 40  
 温明殿, 18  
 瀛洲, 46  
 江戸時代, 20, 41  
 江戸城, 16  
 江戸幕府, 16, 20, 49  
 『延喜式』, 50  
 延喜・天暦の治, 19

- 塩湯, 6
- 王, 13
- 皇子, 15
- 応神天皇, 21, 44
- 黄丹の袍, 31
- 応仁の乱, 30, 48, 51
- 応仁・文明の乱, 48
- 大海人, 10, 28, 45-47, 51
- 大堰川, 52
- 大分県, 39
- 大江匡房, 51
- 大臣, 19, 46
- おおきみ, 12, 18
- 大国主命, 5, 8, 56
- 大鷦鷯, 11, 16
- 大翳, 57
- 大田主, 40
- 大足彦忍代別, 25
- 大津, 52
- 男大迹, 16, 21
- 大伴, 52
- 大直日歌, 35
- 大直日神, 34, 35
- 大麻, 6
- 太安万侶, 11
- 大泊瀬幼武, 27
- 大祓詞, 53
- 大御饌, 28
- 大御食神, 40
- 大宮壳神, 34, 40
- 大神神社, 9
- 大本, 4
- 大八洲国, 12
- 岡田莊司, 65
- 岡田精司, 47
- 御粥, 33
- 興仁, 48
- 『小倉百人一首』, 47
- 諡, 16
- お言葉, 37
- 鴛鴦, 31
- 御田植神事, 57
- 織田信長, 49
- 御告文, 34, 37
- 鬼, 5
- 小泊瀬稚鷦鷯, 21
- 首, 19
- 小忌御湯, 43
- 御湯殿, 42, 43
- 折口学, 61
- 折口信夫, 61, 62
- 御菓子筥, 33
- 御衣, 35
- 御衣振動の儀, 35
- 御玉緒, 35
- 御直会, 33, 38, 42
- 御襖幄, 52
- 御膳幄, 52
- 怨霊, 5
- 穎(助数詞), 27
- 開化天皇, 21
- 改元, 15
- 海部俊樹, 37
- 外来魂, 62, 63
- 廻立殿, 40-43, 60
- 廻立殿の儀, 40, 43
- 鏡, 6
- 鏡作部, 24
- 香川県, 39
- 楽師, 35, 43, 44
- 香具山, 46, 47
- 神楽舎, 18, 30
- 懸税, 29
- 笠木, 10
- 笠縫邑, 27
- 賢所, 17, 26, 37
- 賢所の儀, 36
- 賢所奉安車, 26
- 賢所御神楽, 30
- 拍手, 7
- 膳舎, 18, 33
- 膳屋, 43
- 鯉木, 10, 27, 41
- 勝仁, 47, 48
- 桂川, 52
- 葛野川, 52
- ガネーシャ, 5
- 懐成, 47, 48
- 鎌倉幕府, 20, 48
- 神, 4, 5
- 神野, 52
- 神産日神, 34
- 神上がる, 13
- 神産巢日神, 12
- 鴨川, 51
- 茅, 41
- 干物, 33
- 干物筥, 33
- 川手文次郎, 4
- 漢, 18
- 官位, 20
- 歡喜天, 5
- 干支, 55
- 神嘗祭, 28-30, 58-60



- 神嘗祭賢所の儀, 29, 30  
元年, 15  
関白, 19  
神御衣祭, 58  
桓武天皇, 36
- 記紀, 10, 21  
記紀神話, 11  
菊塵立涌雲綾, 52  
北野天満宮, 5  
亀卜, 39  
旧皇室典範, 14, 36, 49  
『旧辞』, 10, 11  
宮城, 16  
宮中, 16  
宮中祭祀, 29  
宮中三殿, 17, 18, 39  
饗宴の儀, 37  
行幸, 51  
行事, 30  
京都, 48  
教派神道, 4  
御座, 32, 33  
御璽, 15, 36  
ギリシア神話, 10  
キリスト教, 4  
切妻造, 9, 27, 41  
麒麟, 31  
今上天皇, 16, 37, 39-43, 50, 51  
禁中, 16  
禁裏, 16
- 草薙剣, 24-26, 36  
奇稻田姫, 22  
国栖の古風, 44  
国樺人, 44  
クチナシ, 31  
沓, 32  
宮内省, 15  
宮内庁, 13, 15, 17  
宮内庁法, 13  
国つ神, 12  
窪手, 34  
黒酒, 33  
黒木, 40, 41  
黒住教, 4  
黒住宗忠, 4  
勲記, 36  
クンピーラ, 5
- 慶応, 15  
境外, 8  
景行天皇, 25
- 境内, 8  
継体天皇, 16, 21  
警蹕, 31, 35  
穢れ, 6  
外宮, 26, 27  
外陣, 42  
元号, 13, 15, 16, 20, 49, 50  
元号法, 14, 15  
剣璽, 24  
源氏, 25  
元始祭, 30  
剣璽等承継の儀, 36  
剣璽の間, 26  
遣唐使, 19  
建武の新政, 19  
元明天皇, 11, 46
- 後一条天皇, 52  
興, 18  
皇位, 13, 24  
皇位継承, 13-15  
皇位継承儀礼, 36, 38, 49  
皇居, 16, 25  
皇居宮殿, 17, 51  
皇居東御苑, 16, 41  
『江家次第』, 50  
孝謙天皇, 19  
皇后, 13, 17, 37, 42, 43  
皇嗣, 15  
皇室, 13  
皇室経済法, 13  
皇室祭祀令, 30  
皇室典範, 13, 14, 19, 36, 37, 49  
皇室令, 49  
香淳皇后, 17  
皇城, 16  
皇祖, 21  
楮, 6  
皇族, 13, 14  
皇太后, 13  
皇太子, 15, 26, 31  
皇大神宮, 21, 26, 28, 29, 56-58, 60  
皇帝, 13, 19, 46  
皇統, 13  
孝明天皇例祭, 31  
皇霊, 17  
皇霊祭, 30  
皇霊殿, 17, 37  
皇霊殿神殿に奉告の儀, 36  
黄櫨, 31  
黄櫨染, 31  
黄櫨染の御袍, 31, 33, 37  
後柏原天皇, 47, 48

- 後龜山天皇, 47, 48  
 五行, 55  
 五行説, 54  
 国郡卜定, 39  
 国璽, 15, 36  
 国事行為, 14  
 穀神, 22  
 国民, 20  
 穀霊, 34  
 御禊, 51, 52  
 小御所, 34, 51  
 醴酒, 44  
 『古事記』, 10, 11, 21-25, 46, 64  
 越の国, 22  
 御所, 16, 17, 26, 42  
 御親供, 33, 38, 42, 45  
 御神体, 6  
 後醍醐天皇, 19, 27  
 後土御門天皇, 49, 51  
 事代主神, 34, 40  
 後鳥羽上皇, 48  
 後鳥羽天皇, 45  
 近衛天皇, 65  
 小松和彦, 5  
 後村上天皇, 47, 48  
 曆, 20  
 強飯, 33  
 金光教, 4  
 混沌, 54  
 金毘羅, 5  
  
 齋王, 27  
 『西宮記』, 50  
 齋宮, 27  
 祭祀, 4, 5  
 祭祀王, 29  
 齋場, 40, 53  
 祭神, 6, 8  
     大嘗宮の儀の——, 44  
 歳旦祭, 30  
 齋田, 38-40, 60  
 齋田点定の儀, 38, 39  
 齋田拔穂の儀, 38, 40, 45  
 再拝, 7  
 嵯峨天皇, 52  
 坂枕, 32  
 桜町天皇, 49  
 刺車文錦の御被, 58  
 定省, 26  
 識仁, 47, 48  
 佐比川, 52  
 サラスパティ—, 5  
 猿女君, 24  
  
 讚, 18  
 三貴子, 21  
 三種の神器, 23, 24, 27  
 三神山, 46  
 三の丸尚蔵館, 17  
 散米, 53  
  
 滋賀県, 39  
 式年, 28  
 式年遷宮, 28, 46, 57  
 諡号, 16  
 紫宸殿, 37  
 紫宸殿の儀, 37  
 静岡県, 39, 50  
 自然宗教, 4  
 室, 42  
 十干, 55  
 垂, 6  
 持統天皇, 46, 47  
 柴垣, 41  
 四拍手, 7  
 紫微垣, 54  
 四方拝, 30  
 社(序数詞), 8  
 釈迦空, 61  
 社号, 8  
 社殿, 8  
 秋季皇霊祭, 30  
 秋季神殿祭, 30  
 習合, 56  
 十二支, 32, 55, 60  
 秋分の日, 30  
 儒家, 54  
 祝賀御列の儀, 37  
 主権, 20  
 修祓, 6  
 春季皇霊祭, 30  
 春季神殿祭, 30  
 春興殿, 18  
 春秋戦国時代, 54  
 淳和天皇, 52  
 春分の日, 30  
 嘗, 31  
 烝, 31  
 承久の乱, 48  
 正宮, 26, 57, 58  
 将軍, 16, 20  
 上皇, 13  
 上皇后, 13  
 小祭, 30  
 祥子, 27  
 嘗烝, 31  
 象徴, 12

- 象徴天皇制, 15, 20, 29  
 掌典, 29  
 掌典職, 29  
 正殿 (伊勢神宮), 27, 60  
 掌典長, 29  
 聖武天皇, 19  
 小揖, 7  
 昭和, 15  
 昭和天皇, 17, 26, 30, 36, 37, 39, 50, 51, 61  
 昭和天皇祭, 30  
 女王, 13  
 所管社, 57  
   『続日本後紀』, 53  
 諸子百家, 54  
 助数詞, 5, 8  
 諸陵部, 17  
 標山, 53  
 白酒, 33  
 辛亥革命, 56  
 神嘉殿, 18, 30, 32, 33, 38, 42, 63  
 神宮, 26  
 新穀, 31  
 寢座, 32, 63  
 神座, 32  
 親祭, 29  
 神事, 5  
 神璽, 24  
 神社, 4, 8  
 神社神道, 4  
 新嘗, 31  
 真人, 46  
 壬申の乱, 56  
 親政, 18  
 神饌, 7, 18, 28, 29, 31, 53, 58, 60  
 神饌行立, 33, 43  
 神体, 6, 26  
 神殿, 17, 37, 39  
 神殿祭, 30  
 神道, 4, 56  
 親王, 13  
 親王妃, 13  
 心御柱, 28, 29, 58-60  
 神仏習合, 56  
 神武天皇, 17, 21, 23, 30, 63  
 神武天皇祭, 30  
 神明造, 27  
 深揖, 7  
 神話, 5, 10  
  
 水田, 17, 33  
 垂仁天皇, 27, 59  
 居玉, 27  
 菅原道真, 5  
  
 主基, 39, 42, 50, 53, 54, 60  
 主基殿, 40-44, 60, 63, 64  
 主基殿供饌の儀, 40, 42-45, 59  
 崇光天皇, 48  
 素戔鳴尊, 21, 22, 25  
 素戔鳴尊, 5  
 崇神天皇, 27  
 崇徳天皇, 65  
 すめらみこと, 12, 18  
 すめろぎ, 12  
  
 済, 18  
 姓, 16  
 征夷大將軍, 19, 20  
 政教分離, 29  
 正殿, 37  
 正殿 (皇居宮殿), 17  
 生物学御研究所, 17  
 撰閣政治, 19  
 撰社, 8, 57  
 撰政, 15, 19  
 撰末社, 8  
 遷宮, 28  
 宣下体, 7  
 戦国時代, 49  
 戦国大名, 49  
 専制, 19  
 専制君主, 19, 20  
 践祚, 36, 50  
 践祚大嘗祭, 38  
 先帝祭, 30  
 先帝前三代例祭, 31  
 宣命書, 7  
  
 造化の三神, 12, 23  
   『宋書』, 18  
 創唱宗教, 4  
 奏上体, 7  
 造替, 28  
 総理大臣, 37  
 総理府, 15  
 蘇我氏, 19  
 蘇我入鹿, 19  
 蘇我蝦夷, 19  
 即位, 13  
 即位儀礼, 36  
 即位後朝見の儀, 36, 37  
 即位の礼, 37  
 即位礼, 36, 37, 50  
 即位礼正殿の儀, 37  
 即位礼当日賢所大前の儀, 37  
 即位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀, 37  
 外削, 10, 27

- 外削ぎ, 41  
 祖霊, 5  
  
 退位, 13  
 第一神座, 32  
 太一, 18, 54-57, 59, 60  
 大化改新, 19, 38, 46  
 大饗の儀, 39  
 太極, 54, 56  
 太皇太后, 13  
 大行天皇, 16  
 大黒, 56  
 醍醐天皇, 26, 50  
 大祭, 30  
 大嘗会, 38  
   『大嘗会卯日御記』, 65  
 大嘗宮, 38, 40-42, 60  
 大嘗宮地鎮祭, 38  
 大嘗宮の儀, 38, 40, 42, 59, 63, 65  
   —の祭神, 44  
 大嘗祭, 36, 38  
 大嘗祭前一日鎮魂の儀, 38  
   「大嘗祭と記紀神話」, 45  
   「大嘗祭の本義」, 61-64  
   「大嘗祭の本義(別稿)」, 61  
 大床子, 52  
 大正天皇, 26, 37, 39, 50, 51  
 大正天皇例祭, 31  
 第二神座, 32  
 大日本国璽, 36  
 大日本帝国憲法, 20  
 太陽, 21  
 太陽暦, 29, 32, 58  
 内裏, 16  
 高木神, 23  
 尊治, 19, 27  
 尊成, 45, 48  
 高天原, 12, 21-23  
 高御座, 37  
 高御魂神, 40  
 高御産巢日神, 12, 23  
 高御産日神, 34  
 高皇産靈尊, 23, 64  
 高森明勅, 45-47  
 湍津姫命, 8  
 竹下登, 37  
 竹の間, 17, 51  
 田心姫命, 8  
 田道間守, 59  
 豊表, 41  
 手力雄神, 22  
 玉, 6  
 玉串, 7  
  
 玉串拝礼, 7  
 鎮魂歌, 35  
 玉作部, 24  
 玉積産日神, 34  
 玉屋命, 24  
 足産日神, 34  
 短帖, 32  
 誕生日, 31  
 壇ノ浦の戦, 26  
 丹波, 27  
  
 千木, 9, 27, 41  
 地祇, 12, 45  
 仲恭天皇, 47, 48  
 中国, 19, 46  
 長慶天皇, 47, 48  
 手水, 52  
 朝廷, 18, 48  
 帳殿, 43  
 珍, 18  
  
 月次祭, 28, 60  
 憑物, 5  
 月読尊, 21  
 津田博幸, 64  
 壺切御剣, 26  
 妻, 9  
 妻入, 9, 41  
 剣, 6, 52  
  
   『帝紀』, 10, 11  
 帝国議会, 49  
 出口なお, 4  
 手摩乳, 22  
 昭仁, 49  
 天, 5  
 天子, 50  
 天智天皇, 16, 46  
 天守閣跡, 17  
 天壤無窮の神勅, 23  
 天神, 12, 45  
 天神地祇, 12, 30, 34, 44, 45  
 天孫, 23  
 天孫降臨, 22  
 天地開闢, 12  
 天長祭, 30  
 天長節, 31  
 天帝, 18, 54  
 天皇, 12, 18, 21, 54  
 天皇御璽, 36  
 天皇家, 13, 16  
 天皇制, 13  
 天皇大帝, 18, 54

- 天皇靈, 56, 59–64  
 天廟, 55  
 天武天皇, 10, 28, 45–47, 51  
 天理教, 4  
  
 唐, 19  
 堂, 42  
 道家, 54  
 桃華楽堂, 17  
 道教, 4, 46  
 登極, 50  
 登極令, 49, 50  
 東宮便殿, 18  
 動座, 26  
 東照宮, 5  
 道府県, 39  
 非時の香果, 59  
 解縄, 53  
 言仁, 16, 25  
 徳川家康, 5, 49  
 徳川綱吉, 49  
 徳川吉宗, 49  
 常世国, 59  
 祈年祭, 30  
 都城制, 46  
 舎人親王, 11  
 帷, 52  
 止由気宮儀式帳, 27  
 豊受大神宮, 26–29, 57  
 豊受大神, 27, 45, 57  
 豊国神社, 5  
 豊鋤入姫命, 27  
 豊臣秀吉, 5, 49  
 烏居, 10, 41  
 頓宮, 51  
  
 内閣府, 15  
 内宮, 26  
 内掌典, 29  
 内陣, 42  
 内親王, 13  
 直会, 7  
 良子, 17  
 中臣氏, 24  
 長野県, 39, 50  
 中御門天皇, 47, 49  
 長筵, 52  
 中山みき, 4  
 流れ, 9  
 撫物, 52  
 鮮物, 33  
 鮮物筥, 33  
 奈良時代, 19, 46  
  
 成明, 50  
 体仁, 65  
 南朝, 48  
 南斗六星, 55, 58, 60  
 南北朝時代, 48  
  
 新潟県, 39, 50  
 新嘗祭, 30, 31, 38, 43, 45, 46, 63  
 和妙, 58  
 和御魂, 58  
 瓊瓊杵尊, 22–25, 27, 63, 64  
 二拝, 7  
 二拍手, 7  
 日本, 12, 14  
 日本国憲法, 13, 14, 20, 29  
 『日本書紀』, 10, 11, 21–25, 27, 44, 46, 56, 59, 62, 64  
 庭高日神, 40  
 庭積の帳殿, 44  
 庭積の机代物, 44  
 仁徳天皇, 11, 16  
 仁明天皇, 51, 53  
  
 拔穂, 29  
 拔穂使, 40  
 貫, 10  
  
 根の堅洲国, 12  
 根の国, 12  
 年号, 15  
 年頭祭, 30  
  
 祝詞, 7  
 義良, 47, 48  
  
 拝, 7  
 拝殿, 9  
 幕府, 20  
 葉薦, 43  
 柱(助数詞), 5  
 八ゼノキ, 31  
 機殿神社, 58  
 八神, 34, 35  
 八神殿, 40, 45  
 波々迦, 40  
 波比伎神, 40  
 袈う, 6  
 袈, 6  
 袈具, 6, 7  
 播磨, 11  
 半帖, 32  
 万世一系, 20  
 半帝, 48

- 稗田阿礼, 11  
 東山天皇, 49, 51, 53  
 日別朝夕大御饌祭, 28  
 彦火火出見, 21, 23, 30, 63  
 肥前, 11  
 常陸, 11  
 人形, 53  
 神籬, 6  
 百子帳, 52  
 平, 9  
 平入, 9, 27, 41  
 枚手, 34, 45  
 蒲葵, 52  
 熙成, 47, 48  
 裕仁, 26, 30, 36, 37, 39, 50, 51, 61  
 ヒンドゥー教, 4  
  
 武, 18  
 吹上御苑, 16, 17  
 福岡県, 39  
 成仁, 49, 51  
 武士, 20  
 附式, 50  
 藤原氏, 19  
 藤原京, 46  
 藤原公任, 50  
 藤原忠通, 65  
 藤原基経, 26  
 藤原師通, 51  
 衾, 32, 63, 64  
 風俗歌, 44  
 仏教, 4  
 風土記, 10, 11  
 太玉命, 24  
 布帛, 7  
 冬祭り, 62  
 武烈天皇, 21  
 プロイセン, 20  
 豊後, 11  
  
 平安時代, 19  
 平氏, 25  
 平城京, 46  
 平成, 15  
 平城天皇, 51, 52  
 幣帛, 7  
 別宮, 57, 58  
 別宮所管社, 57  
 ベニバナ, 31  
 弁才天, 5  
  
 袍, 31  
 鳳凰, 31  
  
 法家, 54  
 崩御, 13, 16  
 奉耕者, 40  
 方丈, 46  
 北条義時, 48  
 崩ずる, 13  
 宝殿, 60  
 奉答文, 37  
 豊明殿, 17, 39  
 蓬萊, 46  
 鳳輦, 51  
 北欧神話, 10  
 『北山抄』, 50  
 北辰, 18, 54  
 北辰社, 56  
 北朝, 48  
 北斗七星, 55, 57, 58, 60  
 銚, 6  
 墨家, 54  
 北極星, 18, 50, 54-56, 60  
 堀川, 52  
 ポリネシア, 62  
 本社, 8  
 誉田別, 21, 44  
 本殿, 9  
  
 勾玉, 22, 24  
 真菰, 43  
 正良, 51, 53  
 松阪市, 58  
 松崎川, 52  
 末社, 8, 57  
 松の間, 17, 37  
 松前健, 45  
 まつり, 5  
 まつる, 5  
 真床覆衾, 23, 64, 65  
 マナ, 62  
 マハーカーラ, 56  
 『万葉集』, 47  
  
 御神楽, 18, 30  
 御膳八神, 40, 44, 45  
 みかど, 12  
 御巫, 53  
 神酒, 7, 29, 31  
 御食津神, 34  
 御饌津, 27  
 御饌殿, 18, 28, 33  
 御饌八神, 40  
 禊, 6, 42, 51  
 御杣始祭, 57  
 御杣山, 57

- 鎮魂, 34, 38  
鎮魂の儀, 32, 34  
鎮魂祭, 24, 34  
御霊代, 6  
御帳台, 37  
御歳神, 40  
源高明, 50  
源頼朝, 20  
三節祭, 28, 29, 60  
御被, 58  
御間城入彦五十瓊殖, 27  
耳成山, 46  
妙見社, 56  
名字, 16  
三輪山, 9, 18  
民族宗教, 4
- 産霊, 34  
睦仁, 16, 41, 44  
棟持柱, 27  
棟, 9  
村上天皇, 50  
室町幕府, 20, 48
- 名家, 54  
明治, 15  
明治維新, 19, 20  
明治宮殿, 17  
明治天皇, 16, 41, 44  
明治天皇例祭, 31  
明暦の大火, 17  
メラネシア, 62
- 八百万の神, 12  
屋形文錦の御被, 58  
八尺瓊勾玉, 24-26, 36  
社, 8  
慶仁, 47, 49  
八咫鏡, 18, 24-27  
八代物, 35  
八開手, 7, 35  
八尋殿, 58  
八岐大蛇, 22, 25  
大和, 18  
大和三山, 46  
大和政権, 18, 20, 29  
日本武尊, 25  
大和朝廷, 18  
倭姫命, 27  
倭舞, 35  
山部, 36  
山家公頼, 5
- 唯一神明造, 27
- 木綿, 6, 22  
揖, 7  
雄略天皇, 27  
幽霊, 5  
湯帷子, 43  
ユキ, 60  
悠紀, 39, 42, 50, 53, 54, 60  
悠紀殿, 40-44, 60, 63, 64  
悠紀殿供饌の儀, 40, 42-45, 59  
由貴朝大御饌, 29, 58  
由貴大御饌, 28, 29, 59, 60  
由貴夕大御饌, 29, 58  
寛成, 47, 48  
ユダヤ教, 4  
斎庭の稲穂, 23, 24  
湯槽, 42
- 夕の儀, 32  
妖怪, 5  
養蚕所, 17  
養老律令, 47  
吉野, 44, 48  
吉野裕子, 56-60  
嘉仁, 26, 37, 39, 50, 51  
寄棟造, 9  
黄泉の国, 12, 21  
依代, 6  
尸童, 6
- 立憲君主制, 20  
立太子礼, 26  
律令, 19, 46  
律令制度, 19, 20, 38  
諒闇, 39  
綾綺殿, 18, 34
- 靈元天皇, 47, 48  
レガリア, 25
- 倭, 18  
稚日本根子彦大日日, 21  
和霊神社, 5  
和暦, 15